

常陸の祈り



講話集

常陸の祈り

——大御心を恐みて——

第二十五回神道講演全国研修大会・茨城大会

目次

御挨拶　神社本庁総長　矢田部正巳
序　茨城県神社庁庁長　塙東男
記念講演「神話と歴史―神道の基本理念」　秩父神社宮司　薗田稔　1
杜と杜と水　佐伯正則　7
スサノヲ祭　多田利子　13
子供たちと学んだ日本の神話「因幡の白兎」　寺本正徳　18
わたしたちの口にするもの　西川嘉信　22
神宮式年遷宮について　小貫隆嗣　27
オハケ&オバケ　村田和弘　33
天皇ありて日本あり　畠田明彦　37
挨拶　石井昌孝　42
日本の、日本人の素晴らしさについて考えること　飯田延生　47
いのちの神さま　龍見将弘　52
日本神道は世界の宝　村瀬佳子　58

ようこそ　おたけびの宮　男神社へ　菅野洋子　62
厄除け祈願と厄神さん　宮城豊　67
皇居勤労奉仕を終えて　營田英聖　71
誠は天の道なり―徴古館開館百周年記念展に向けて―　大野康孝　75
ビジネス社会を生き抜くヒント　鈴木哲司　83
武田流流鏑馬神事について　大関光佐雄　88
正直は一生の宝　瀧森好　94
日本人のしきたり　西村純子　98
現代の鎌倉武士であれ　當麻洋一　102
私の使命　中道豪一　106
神代（かみよ）の動物園へ　山本陽徳　111
捧げよう！大御心に感謝の誠を　渡邉知宣　117
平成の今　辰守弘　123
「至誠通神」の教えから　宮澤正夫　127
関東下り衆の神主　波多野學　131

『夢の跡』からの眺め　小野道教　135
護国神社の現状と対策　滑川久美雄　140
のさり　木下久榮　143
身を踏んごんで田植えかな　鈴木明子　148
薩摩の役割　中木屋豊　153
御身一つに　負ひたもふ　木下鍒二　159
時代劇と現代　佐古一洌　163
きさらぎの花開く　黙霖の教え　村田和之　167
神社の参拝作法について　前原亨秀　172
神社と参拝道　坂巻博志　175
例祭日の変更に関する考察　中嶋勇人　180
心の玉手箱　河本文夫　188
「いざさらば我はみくにの山桜」靖国の心を護り伝えん　小野日隆　195
「懸税」奉献の大任を終へて　石塚智康　201
乃木将軍御夫妻　松吉宣和　206

北海道名付けの親　松浦武四郎の敬神　芦原　高穂　211
神様を信じて　佐々木　美津子　218
神宮大麻・神札の冒険　山元　義清　221
お言葉　原　茂子　225
神道講演構成法　230
茨城大会の記録　茨城大会実行委員長　村田和之
神道講演全国協議会役員名簿
あとがき

表紙　皇居二重橋写真　提供㈱神社新報社

御挨拶

神社本庁総長　矢田部正巳

第二十五回神道講演全国研修大会・茨城大会の開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。

神道講演全国協議会の皆様には、平素より神社本庁の諸施策に対し、格別なるお力添えを戴き厚く御礼申し上げます。

本年は、天皇陛下御即位二十年・御結婚五十年の佳節を迎へ、神社本庁と致しましては、貴会をはじめ関係諸団体との連携をより強いものとし、皇室敬慕の念を喚起・醸成するための活動を展開して参りたく存じますので、更なる御理解、御協力をお願ひ申し上げます。

さて、貴会は、長きに亙り神道講演を通じて斯道の興隆に御尽力戴いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の貴い志を受け継ぎ、昭和四十六年より本研修大会を開催してこられました。会員の皆様が日々研鑽を重ねてこられた成果は、奉仕神社における社頭講話を始めとした教化活動の大きな要になつてゐると存じます。これは、斯界にとりましても実に心強い限りであり、深く敬意を表する次第であります。

道徳心や地域教育力の低下が叫ばれて久しい今日、日本古来の伝統的価値観が見直されつつあります。このやうな時こそ、神道の精神を平易な言葉で氏子崇敬者に説き聞かせ、次の世代へと伝へてゆく神道講演、社頭講話は、益々重要になるものと確信してをります。

どうか皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと、斯道の興隆、ひいては我が国の発展のために、尚一層の御尽力を賜りますやう切にお願ひ申し上げます。

結びにあたり、貴会の愈々の御隆昌と参加各位の益々の御活躍、御健勝をお祈り申し上げまして、御挨拶と致します。

序

天皇陛下御即位二十年・天皇皇后両陛下御結婚五十年を奉祝し、第二十五回神道講演全国研修大会・茨城大会が平成二十一年六月二十四日～二十六日の三日間、当神社庁を会場に開催されました。

この度、その成果が纏められた講話集が刊行されました事を心からお喜び申し上げます。

全国各地よりご参加頂いた受講生お一人お一人、研修中は気迫が溢れ、その熱誠に深く感銘致しました。

今日の社会情勢は激動し、混迷を極めております。このような時機にあって、悠久の昔より今に至る迄、日本人の心の基として生活の規範をなしてきた、我が神道の精神を如何に伝えて行くか、その重要性を痛感致します。皇室を尊び敬神崇祖の神ながらの道を弁え、遙かな未来へ向けて斯道を宣揚するため、我々神職はこのような研修を通じて学問の研鑽を積まなければならないと存じます。

最後に当庁を会場として活用頂きましたが、参加者の方々にはご不便をお掛けした事と

存じます。この大会が無事に終了できました事は、村田会長、佐古副会長をはじめ事務局、そして参加者各位のご協力の賜物と深く感謝致しますと共に、神道講演全国協議会の益々のご発展、皆様のご活躍とご健勝をご祈念申し上げ、ご挨拶と致します。

茨城大会会長・茨城県神社庁庁長　塙　東男



第25回　神道講演全国研修大会　茨城大会　　平成21年6月24日～26日　茨城県神社庁

第二十五回　神道講演全国研修大会・茨城大会

とき　平成二十一年六月二十四日～二十六日

ところ　茨城県　神社庁

神話と歴史―神道の基本理念

秩父神社宮司　薗田　稔

はじめに

このたび伝統ある全国協議会の第二十五回研修大会にお招きをたまわり、お話をさせていただきますこと、まことに光栄に存じます。

折角の機会ですので、日ごろ愚考しております神道の拠るべき基本理念について、特に「神話」の大切さをお話申し上げたいと思います。

一　神道は歴史ではない

お話の枕として、御手許に配りました資料のうち、かつて平成五年に神社新報へ掲載したことがあります「わが道の神社と神道」のなかで特に「神道は歴史ではない」を引用いたします。

「いうまでもなく神道には永い歴史がある。だが、歴史が古いから神道は尊いのであろうか。古ければ尊いのであれば、仏教やキリスト教のほうがよほど古い歴史を持っている。

現代は新奇なものを喜ぶ半面、むやみに歴史を有難がる一種保守化の風潮がある。神社に参拝する善男善女のなかにも、神社の由緒で古さを強調すれば、それだけで満足する者が多いので当惑することがある。神社はあくまで祭の場である。そして祭は時代を超えて常に新生であるから尊い。神道は永遠に古式が歴史を無化するから常に新しいのである。伊勢の式年遷宮は、新築の御正殿にすべての神宝を新調して御祭神の新生をこそ祝う。神社や神道は歴史があるから尊いのではなく、祭において常に新しいから尊い。」

二　祭はイベントではない

もうひとつ関連する文章として次の「祭はイベントではない」を紹介いたします。

「ちかごろ神道の祭をイベントと混同する手合いが多い。神職にも区別を心得ぬ者がある。伝統の祭もイベントも同じ催しにはちがいないが、本質は正反対である。イベントは趣向を変えて新奇を追うところに効果があるのだが、祭は逆に同じ趣向を繰り返すところに大切な意味がある。年ごとに古式ゆかしい祭が為されてこそ祭る者の安心立命があるのだ。祭がイベントになれば陳腐化して滅びるが、もしイベントが祭に組み込まれれば、それは神賑わいの「風流」になる。祭はあくまで永遠回帰の神話的再現である。」

なにぶん短い文章なので十分に意を尽くせず、それに先の文章で「神道は常若の道だ」と

言いながら、後の文章で「祭は古式の神話的再現だ」と言って、一見矛盾した指摘に思えるかもしれません。

三　神道の強み

しかし実は、わが神道の真骨頂は歴史の古さにあるのではなく、拠るべき太古の始原が歴史の変化を乗り越えて神話的に再現されるところに神道ならでは強味があるのです。

たとえば、江戸初期の伊勢神道の大家、度会延佳がその著書『神代圖鈔』に「今日ノ神代」と題して、

「夫レ昔ハ必モ今ニ無キヲ以テ為スニ不ズ。今ハ尚古ヲ去ルヲ以テ為スニ不ズ。則チ神代ハ今ニ在リ、今ハ神代ニ在ル者ナリ」

と喝破しています。だからこそ、かつて北畠親房も正月を言祝いで「天地の始めは今日を始めとす」と詠み、荒木田守武も「元日や神代のことぞ思はるゝ」と詠ったのです。

つまり、これらは現在が絶えず過去に流れて、過去は絶対に戻らないという歴史の時間観ではなく、神代の太古が今に生き、元旦は天地の始めに立ち帰ることだという神話ならではの時間観を示している。これこそが、古来の神道が、今日に至るまで拠るべき理念です。

四　神話の時間的営み

では、こうした神話と歴史との時間の営み方は、どう違うのか。これも一つの参考例を挙げてみますと、もう一枚のコピー資料に「時の〈生命〉と年中祭祀」とある、その一部を引用してみます。

「『唐詩選』に収める劉廷芝の「代悲白頭翁詩」のなかに、

年々歳々花相似タリ　／　歳々年々人同ジカラズ　という有名な一節がある。花は毎年の時が満ちれば同じ美しさで咲くが、人は年を重ねて確実に老いていくことを詠んでいることはいうまでもない。前者は、自然の摂理でもある生物的イノチの時間。後者は、もっぱら人間の自意識がもたらす人工的歴史の時間を示している。

現代のわれわれは、とかく時間が未来から過去へと一方的に流れ去って、二度と戻らぬ〈歴史〉だけが真実と思い込み勝ちだが、古人が祭や年中行事を大切にしてきた理由には、季節のくりかえしや親から子へイノチが甦るように、再生する時間の営みがあることも忘れてはなるまい。（中略）

神社の年中祭祀は、天地とともに循環して年毎に時の営みが甦るからこそ、恒例として同じ神事をくりかえすことに深い意義があるのだ。仮に〈歴史〉だけが時の営みの真実だとすれば、神事はただ過去の伝統の墨守に過ぎず、古いだけが頼りの時代錯誤に堕する

のが落ちである。時がイノチとして「子孫ノ弥継々ニ」甦るからこそ、神事は永遠に古くて、しかも常に新しいということを銘記したい。」

結び　神道の神話理念

そもそも歴史という時間意識は、古代に世界各地で栄えた神話文化を批判して誕生した世界宗教の教義や神学のなかで初めて市民権を得た現実認識です。教祖など特定人物の活動や異例の事件などが歴史に刻まれることから、同じことが定期的に繰り返す時間よりも流れる時間に生起する事件の意味を信仰上の真実と捉える意識が広まったといえましょう。近代の社会は、圧倒的にこの歴史主義が支配し、学問や知識、常識さえも歴史だけが真実という風潮ですから、時間は不可逆なもので物事は二度と繰り返せない一回起性のものだけが真実で尊いかのごとくですが、実は夜毎に朝が来、冬来たりなば春遠からじ、人生が子孫に繰り返されるように、時間が生命的サイクルを刻んで可逆的に同じ物事が立ち帰ることに安心立命するという神話的な時間の文化が、むしろ近代以前には主流でした。

今でも大方の日本人は正月を一斉に祝いますが、それも年の命が改まって全てが新生するからこそめでたい。歴史では単に一月一日に過ぎませんが、神話的には太古の始原そのままに世界が若返るからこそ人々もそれを実感するのです。

神道文化や神社祭祀は、まさしくこうした神話文化に即してこそ神事祭礼を真っ当に営むことができると、われら神道人は自覚すべきではないかと思うのです。

以上

杜と杜と水

佐伯正則

これをもちまして御諏訪の御祭滞りなく終了しました。

御諏訪のお祭とは云うまでも無く樹木の神様を崇め讃えるお祭であります。神様を「一柱二柱」と御呼びするように我々日本民族は古代より樹木には神が宿ると信仰して参りました。又現在、神社の「社」は社会の「社」を書いておりますが、これを「杜の都、仙台」の杜の字、木偏に土の字を充てるべきではなかろうかと云う議論もあるくらいです。事実、万葉の時代には杜の字を「やしろ」とも読んだそうです。この様な事から御宮にとりまして樹木は必要不可欠の存在です。

御宮の無かった時代のお祭は、ある一定の清い場所を設けまして、常緑樹の榊を取り付けていました。神様はお祭になると、天上から降りて来られその榊に憑依、のり移られ、お祭が終ると天上へ帰られると信仰されて参りました。ですから今も祭礼になると神社に大きな旗、大幟を挿し立てますのは、神様が降りて来やすいようにとの古代の方の配慮だ

ったと聞いております。

この常緑樹の榊の初見は古事記、日本書紀にあり「天の岩戸」の段におきまして、天照坐皇大御神様にお出ましを願う為、「真坂樹」の枝に鏡と勾玉を取り付け、お祭を斎行したと記されております。この事から神の道、神道では榊、所謂本榊は大切な樹木の中でも特立した地位を占め、辞書によりますと「栄える木」の意味もあり御家にとりましては有難い木と云えます。

又、榊と云う字は漢字では御座いません。「何をそんな馬鹿な」と思われるかも知れませんが日本書紀に書かれていた漢字の坂樹は当て字でありまして、その後日本民族は神への思いを込めて木偏に神の字を創りました。この様な字を国の字、国字と申すそうです。これが榊でありまして葉が交互に付いている事が絶対条件です。特徴としましては、葉に光沢があり葉の周辺にギザギザ歯、鋸歯はありません。これは葉が交互には付いてはおりますが葉に光沢が無く、周辺にギザギザ歯がありますので代用品の柃（ひさかき）であります。この枝は葉が榊によく似ておりますが葉の付き方が違います。葉が交互に付いておらず対称についておりますから、榊でも榊の代用品でもありません。それではこれはどうでありましょうか。葉が交互に付いており光沢があり、ギザギザ歯がありません。実はコーヒーの木で

あります。

榊は、コーヒーの木と同じく常緑小高木に属し熱帯、亜熱帯に広く分布し、榊の日本での北限は北陸地方と云われます。北海道では榊の代わりに櫟の木等を用いるそうです。御宮の無かった時代のお祭は現在、地鎮祭に色濃く残され又、諏訪社の「本宮」、仏教で云うところの「本山」は信州の諏訪大社であります。この御宮には「上社」、「下社」両社が有り、両社共神様が鎮まっておられます御本殿と云うものがありません。それではどこを礼拝の対象とするかと申しますと、上社では御山「神体山」下社では「自然木」であります。

大正の時代明治天皇陛下を追慕した全国民の総意により「明治神宮」が鎮座されました。この御造営には全国より十万人の勤労奉仕と三百六十五種、十万本の献木、樹木を十万本奉納したのであります。現在は十六万本にもなろうかと聞いております。明治天皇陛下と申さば明治維新当時、アジアで外国の植民地になっていないのは日本とその他二つの国しかありませんでした。

「眠れる獅子」清国、今の中国はイギリスの不条理極まりない「アヘン戦争」を仕掛けられまして敗北、香港を割譲、取り上げられてしまいました。その香港が中国に返還されたのは、つい最近の事であります。陛下はこの激動の時代「良きを取り悪しきを捨てて外国

に劣らぬ国となすもよしがな」と御詠みになられました。「日本の伝統文化技術を守り、旧来の陋習を捨て、とつくに、外国より新知識を導入し、外国に負けない国を作ろうではないか」この大御心を拝察した政府は、間、髪を容れず伊藤俊輔（後の伊藤博文）、木戸孝允（かつての桂小五郎）、日本女子教育界の先駆者としまして「津田塾大学」を創設しました津田梅子（梅子はまだ当時六歳でありました。）、この様な英才を欧米各地へ送りこんだのであります。我が国を植民地にしようと虎視眈々と狙っている国へであります。云わば仮想敵国へ教えを請うた訳であります。この大英断が見事に功を奏し日本の近代化は飛躍的に推し進められたと記されております。

この明治政府の外交術に比べ、今の政府の稚拙な外交、そして世界に恥を曝した外交。昭和二十年終戦後の教育の荒廃が、この大事な遺伝子、ＤＮＡさえも消滅せしめたかと思われるような昨今であります。明治天皇陛下の御聖徳は十万人の勤労奉仕と十万本の献木と共に未来永劫に語り継がれます。そして陛下は樹木を通して私達、国民を何時も慈愛の目で見守っておられます。あの明治神宮の杜が、どれだけ訪れる人々の憩いの場、癒しの場になっているか計り知れません。

富士山の頂上に降った雪は百年の時間をかけて麓の川に注ぐそうであります。青木ヶ原

の樹海、樹木の海で徐々に濾過され命の水となって注ぐのであります。この川には鮎が生息しておりまして、鮎は御承知の様に年魚とも書き短い一生を一年で終えます。しかし、この川の鮎は一年で終える事無く、その年の冬を越すそうです。全国名水百選にも指定されているこの川の水は正に命の水であろうかと思います。山は海を育てます。川を通して栄養分を徐々に海に与えてくれます。栄養分はプランクトンを育み、プランクトンは小さな魚の命を保ちます。

我が富山県の漁業関係者の間には代々云い伝えられている言葉があります。「ブナの木一本、鰤千本」。鰤とは「大間の鮪か、氷見の鰤」と謳われた、あの鰤であります。漁師さんは山の大切さを身をもって知っておられました。近年は従前にも増して漁業関係者による森林の下草刈り、植林等が盛んに実施されている事を聞き、有難い事だと思っています。

最後になりますが、平成十二年より始めました実生、種より育てました榊苗を氏子崇敬者の皆様に差し上げて本年で数が八百を超えました。本当に有難うございます。私が丹精込めた物を氏子の皆様に引き継いで貰い、それを神棚に供えていただく。こんな神職冥利に尽きる事は御座いません。今、店頭に並んでいる榊は大半が中国産です。中国には榊と

云う漢字は御座いません。そのような榊を神棚にお供えして神様に喜んで貰えるでありましょうか。榊に限らず自分が丹精込めた物を神棚にお供えする事により、敬いの心は一層深まり、その深まりの心は自分を謙虚にする心、慎みの心でもあろうかと思います。

本日は御参拝下さいまして、誠に有難う御座いました。

（富山県　素盞嗚神社　宮司）

スサノヲ祭

多田利子

私の奉仕致しております素盞嗚尊神社は、神社名の通り「素盞嗚尊」をお祀り致しております。本日はご祭神のお祭りを起こすまでをお話致します。

年間の神事行事の中にご祭神にふさわしい神賑わいの祭を、新しくおこせないものかと常々考えておりました。

ある時、友人にその話をしたところ、友人は岡山県の出身で幼い頃から備中神楽を見て育ち、「スサノヲの大蛇退治」の神楽舞の事を楽しそうに話をしてくれました。私は友人の話を聞きながら「これだ！」と思いました。「スサノヲの大蛇退治」まさにご祭神が奇稲田姫を救う為に八俣の大蛇を退治する物語。この物語を氏子さんや子供達に実際に目で見て、ご祭神を感じて欲しいと思ったのです。

そこで、この物語の神楽舞を神社の職員だけで出来ないものかと思い、友人の紹介で備中から先生に来てもらい、指導を受けることになりました。神社の職員といっても「私・

宮司（主人）・娘婿・巫女さん二人」の五名です。私は浪速神楽や祭祀舞・剣舞（詩吟に合わせて刀を持って舞う）などを指導しておりましたので、舞をすることには自信がありました。ですが、この備中神楽は大変難しいものでした。「足の運び、手の動き、目の付けどころ」など、これらを太鼓の拍子だけで合わせて舞うのです。月に一度先生に来て頂き指導をして頂きましたが、なかなか思う様には体が動きません。

そして、一年・二年と、年月だけが過ぎて行きました。舞の経験がある私ですら、順番が覚えられなく先生について舞うことすら出来ません。大変なことを始めたものだと思っていると、五名の生徒が一人、二人と何かと理由をつけて休むようになったのです。舞について行けず面白くなかったのでしょう。ついに巫女さん二人が「これは無理です」とギブアップ。娘婿も「お母さん、神社のことはなんでもしますけど、この神楽を身につけて、神さんや氏子さんの前でするのは無茶でっせ。」と。私自身もこの神楽を「甘く見ていたなあ」と、つくづく思い知らされました。

地元で幼い頃から秋祭にはこの神楽を見て育った人達には、太鼓の音を聞いただけで体が自然に動き出すのでしょうが、思いつきだけで備中神楽を自分達で奉納するなんて、なんと無謀な事かと気がつきました。それでも「スサノヲ祭」と名付けて神賑わいの祭を起

こしたいという気持ちは膨らむばかりでした。

「そうだ、できないことはプロに任せよう」ということになり、「大蛇退治」は先生とその社中の皆様にお願いをして、前座を私が指導しております「浪速神楽」、「祭祀舞」、「剣舞」これらを神社の拝殿で行い、神事芸能の奉納をしようということになりました。そこで、責任役員さんや総代さん達に相談をして日時を決め、第一回を平成十七年四月三日（日）に行うことになったのです。

さあ、新たに始まる「スサノヲ祭」。氏子さん達にせっかく来て頂いたのに祭が終って何か振る舞うものはないか?・・・私の病気が始まりました。（私は振る舞う事が大好きなのです。正月は甘酒、小正月はぜんざい、節分は甘酒など。また、六月末の夏越しの祓いには、新たに茶粥を考えております。）四月は桜、「桜粥というのはどうかな」と娘達に相談をして、早速お粥を炊き、その中に桜茶を入れると白いお粥がピンク色に染まりほのかに桜の香りがしてとても良い具合に出来ました。早速、巫女さん達に試食をしてもらったところ、これが好評でした。名付けて「桜粥」。響きも美しい。これなら氏子さん達もきっと喜んでくれるに違いない。

さて、第一回目当日はお天気にも恵まれ、神事の後巫女さん達の浪速神楽の舞に続いて

剣舞、そしていよいよ備中神楽です。でもすぐに「大蛇退治」ではなく「大国主の命の舞」や「猿田彦の舞」など、どれもすばらしく氏子さん達は見入っていました。

いよいよクライマックスの「大蛇退治」の始まりです。まず、「スサノヲの尊」が力のこもった舞を舞います。次第に太鼓の調子も早くなり、舞にも熱が入る頃「ピー・ピー」と大蛇の鳴き声が聞こえてきます。やがて大蛇が現れ酒樽の酒を呑みほし、酔っ払って「トグロ」を巻くと、見入っている人達から大きな拍手が起こりました。スサノヲの尊と大蛇の戦いが続き、大蛇は倒されスサノヲの尊の勝ち誇った舞で終わります。直会の「桜粥」も好評で氏子さん達も喜んでくれました。こうして無事に第一回目は終わりました。

それから毎年四月に「スサノヲ祭」を行い、今年で五回目を済ませました。来年からは舞台を拝殿から境内に移して、境内に舞台を作って奉納出来るようにという動きも出てきています。有り難いことです。

何か新しい事をするということは大変なことです。しかし、これも神様と氏子さんとを繋ぐ大切なことだと考えております。そして、少しでも神社の活性化になればと思い、これからも頑張って行きたいと思います。ですが娘婿からは、「お母さん、もう新しいことはせんといてや。大変やからな。準備するのは誰がしますねん。」と言われています。そ

れもそのはず、準備と後かたずけは娘婿と主人で私は口だけです。
以上です。
有難うございました。

（大阪府　素盞尊神社　禰宜）

子供たちと学んだ日本の神話「因幡の白兎」

寺本正徳

約束の、日本の神話「因幡の白兎」の話を始めます。

だいこく様が、大きな袋を肩にかけて、因幡の気多岬までやってきました。

皮を剥がれた、赤裸の兎が、「痛いよ…痛いよ」と泣いています。

だいこく様は、やさしく聴きました。

「これ兎よ、どうしたんだ」

兎は、泣きながら言いました。

「仲間と、気多岬で遊んでいました突然、大波がきて、みんなは山に逃げました、運悪く、自分だけが波に呑まれ、隠岐の島まで流されました。助かったけど仲間がいません。毎日、毎日海に出ては、因幡の方をみていました。ある日、海で楽しそうに泳いでいる〝ワニザメ〟をみました。声を掛けました……。『ワニザメさん、数を数えてあげるから向う岸まで並んでくれる……』『いいよ』ワニザメは海の中から大

勢の仲間を連れてきて、向う岸まで並びました。自分は、ワニザメの背中をピョン、ピョンと飛びながら、数を数えはじめました。岸に近づくに従い、数を数えるのを忘れ、『ワニザメさん、ありがとう』と思わず口から出ました。『なんだ、この野郎、数を数えてくれたのとは違うんか』と言うなり、一匹のワニザメに捕まり〝赤裸〟にされました」……と、一気に話しました。

静かに聴いておられた、だいこく様が

「いつでも騙したり、嘘をついたらいけんよ。そこの清水で身を洗いなさい。川岸の蒲の穂を取り、下に敷き、蒲の花粉を散らし、静かに待ちなさい」

よくよく教えてやりました。

兎は、だいこく様が、教えてくれた通りにすると、もとの白兎になったとさ。

これが日本の神話「因幡の白兎」の話です。さあ、みんなの質問を聞きながら、一緒に考えようか。

質問のある人……。

「ハイ、なんで、ワニ海にいるん」

山陰地方では、サメのことを、ワニザメと呼んでるんだと、ワニ海にいないわな。

「ハイ、だいこく様、なんで大きな袋を肩にかけてん」
出雲大社の本『いづもさん』によると、だいこく様は、「みんなの苦しみ、悲しみ、難儀」を一人で引き受け、袋の中に詰め込んでいて下さるんだと。
「ハイ、なんで兎、海の水で消毒せへんの」
横から、一人の子が、「お前海水浴行ったことあるやろ、きずついた処を海水に浸けたら痛いやろ、あれだ」「…そうか」
「ハイ、日本の神話、どこに書いてあるん」
日本で一番古い本『古事記』『出雲国風土記』、出雲地方の民話などに書いてあるんや。
「ハイ、日本の神話、因幡の白兎だけ」
この本には、仰山書いてある、みてみ。
「ワア、岩ひっぱってる、大蛇もいる、仰山書いてるな、おっちゃん、この本を借りる」
いいよ、家でゆっくり読んで。
「ハイ、因幡の国、ほんまあったん」
この図をみてみ。（絵図を見せながら説明）

「おっちゃん、なんで蒲の穂綿で白兎になったん、花粉症にならへんのか」
蒲の穂綿は、癒しのベット、花粉は「止血、皮膚の乾燥」に役立つんだと、だいこく様は、知ってはったんやな。
あとなんか、質問ない、それじゃ「だいこく様の歌」を唄おうか。（歌詞を書いたボードを見ながら元気よく一緒に唄った）
今日、みんな一生懸命に学習してくれた、これ、お土産、一つづつとって。
三年生の女の子が「どんな時でも騙したり、嘘をついたらいけん」この一声で大笑いになった
短い一時だったが、日本の神話「因幡の白兎」について、真剣に学んだ、夏の午後の一時だった。
「おっちゃん、またきていいか」
この一声を残して、蜘蛛の子を散らすように帰って行った。

（大阪府　稲荷神社　禰宜）

わたしたちの口にするもの

西川嘉信

近年さまざまな場面で「食」が話題にされています。狂牛病、無農薬野菜、遺伝子組み換え食品等、枚挙に暇がありません。また、子どもの実態として、昔に比べてアトピー等のさまざまなアレルギーを抱えた子どもが増えてきています。このように、「食」が本来の役割とは逆方向の、いわば健康を脅かす恐れのあるものとして受け止められる反面、「飽食」という言葉が象徴するように、低い食料自給率にもかかわらず食料の約半分を捨て、バラエティに富む味や豪華さに惑わされた挙げ句に栄養過多となり、ひいては若年層にまで糖尿病や高血圧が広がりつつあるという奇妙な傾向が見られるのが今の日本であります。今の日本の「食」文化のあり方、それらによって変化を強いられる伝統文化に危惧の念を抱かずにはいられません。さらに付け加えるならば、幼少期からの食生活が脳の働きや人格形成に大きく影響しているという研究成果も踏まえ、「食」に対する意識や心を育てていくことは道徳教育につながると考えます。そこで、「食育」による神道教化を提

案してみたいと思います。

食育基本法は平成十七年に成立したもので、その前文では、「食育は生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの」と記されています。今、食育講習会が各地で開催され、その重要性を伝える活動が様々な団体、教育機関、施設で推進されています。本来ならば食育の基本は家庭での食生活であり、外部での講習会で学ぶものではなく、親から子への縦繋がりと地域社会の横繋がりで自然に伝えられてきたものでありました。しかしながら現在では家庭や社会がバランスを崩し、当たり前だった「好ましい食生活」がうまく機能しなくなったと言えます。

このような例があります。ある小学校で保護者から驚くべき苦情が出ました。自分たちが給食費を払っているのだから子どもは「いただきます」を言う必要がない、言わせるなというのです。その学校は保護者の意見を受け入れたとのことでした。何とも馬鹿げた話です。食事の時の「いただきます」「ごちそうさま」と言う言葉。これは誰に対して言っているのでしょうか？「食事を作ってくれた人への感謝の言葉です」と言う答えが大人からも返ってきそうです。今や大人も子どもも個人主義でご都合主義、他人の気持ちを想像できないからいじめが絶えない、そして、すぐキレる・・。そんな状態にある今の日

本は、このような場面から端を発したのかもしれません。

食事をいただくことができるのは、当然調理してくれた方がいるため。しかしそれ以前にお米や野菜を作ってくれた方がいたからです。それを我々の住む町まで運んでくれた人がいたからです。ひいては、充分に太陽があたり、適度に雨が降り、寒い時期には寒く、暑い時期には暑くなってくれたからこそなのです。これは何を意味するのか。「いただきます」は「あなたの命をいただきます」であります。動物や魚などの生き物だけではなく野菜もひとつの命としてありがたくいただくのです。同じ地球上に生きている、動物や野菜の命をいただくのですから。

人間の力など遠く及ばない大自然の豊かな恵みに育まれ、そして大変多くの人が関わるからこそ、我々は毎日家で食事をいただけるのです。「食べる」の語源は、「賜る（タマワル）」→「タブ」→「タベル」と変化したものと言われています。まさに、大自然の大いなる恵みを賜り、たくさんの人のおかげを賜ることが「食べる」と言うことであります。「いただきます」「ごちそうさま」という言葉は、これらの自然の恵みとたくさんの人のおかげに感謝する言葉なのであります。我々一人一人の人間が生活し、生きていくためには、目に見えない大きな力が働いているものです。

古来より日本人は、この働きを総称して「神様のおかげ」と言い習わしています。神に祈ることは、「人は自分一人の力で生きているのではないこと」を再認識し、自然の恵みに感謝し、支えてくれる多くの人達に感謝することです。商売をされている方が熱心に神棚をおまつりしたり、毎月一日に欠かさず神社にお詣りされるのは、商売をしていると「商売はたくさんの人のおかげが有ってこそ。一人の力だけではない」と言うことが分かり易いからなのかもしれません。

さらには、食育の基本となる考え方に「身土不二」（シンドフジ）・「一物全体」（イチブツゼンタイ）があります。身土不二とは人の体はその土地と切り離せないという意味で、人はその土地でできる食物を食べるべきであるという食の原則を支える思想であります。そして一物全体とは食物の一部分ではなくて全体を食べるべきであるという、これも食の原則の一つです。米ならば精白せずに粒全体（玄米）を食べる、大根ならば根と葉を含めた全部を、魚ならば一匹丸ごと食べることで、その物の命を余す事無く受け入れるという考えです。魚に頭が欠けても、尻尾が欠けても、それは本来の魚とは言えないということです。これらはいわゆる地産地消や「もったいない」とも言い換えることができます。

この身土不二は、神道における神饌を指すと思います。その国土や地域で獲れたもの、

旬のものをお供えする。この供えられる食材は、日本古来の食材、日本人に適した食材であります。

また一物全体においては、その食材だけの全体をみることに限らず、食材のできた地域の環境や文化、農作行程までも含めて考えてみます。例えば日本の農作物の代表となる稲作。お米は、神道の祭りを語る上で欠かせないものであります。

これらのことを踏まえまして、現代で失われつつある古き良き食習慣をもう一度私たちから伝えていきましょう。毎日毎食、感謝の気持ちを持ちながらありがたく食事をいただく当たり前の習慣が子どもに与える影響というのは、大人が考える以上に大きいはずなのです。そこには日本文化があり、その根底には純然たる神道精神が存在します。そのために今こそ私たち神職が、神道教化の一環として率先して声を挙げていかなければならない、そのように考え、発表させていただきました。

ご静聴ありがとうございました。

（京都府　八坂神社　権禰宜）

神宮式年遷宮について

小貫隆嗣

伊勢の神宮に於きます第六二回式年遷宮が平成二五年十月に行われます。皆様方にはいち早く奉賛金を戴きまして誠にありがとうございます。お陰様で私どもの支部では目標額を大幅に上回りまして県内でも三番めにつけております。これ一重に皆さま方の神宮に対する一方ならぬ思い、ご信仰に対して敬意を表するものであります。

現在五十鈴川に掛けられております宇治橋が掛けかえ中で今年十一月三日に渡り初めが行われます。いよいよ遷宮に向けて、諸祭順調に進められております。

さて、今日は皆様方からリクエストがありました神宮の事、遷宮の事についてお話したいと思っております。「神宮にお参りに行かれた方、手を挙げて戴けませんか」あー、七〇パーセントの方は行かれていますね。一度でも行った方はご理解していただくのに早いのですが。最近修学旅行も伊勢に行かなくなってしまったんですね。どこへいくかと思えば、デズニーランドとかユニバーサルスタジオなどテーマパークへ、はたまた高校では海

外旅行などへ行ってしまっているんですね。神宮の統計では昭和四〇年代は一九〇万人位の修学旅行生がいましたけど、今では五、六万人だそうですね。これは京都にも言える事です。

五十鈴川にかかっております宇治橋を渡りますと深い森に入ります。境内面積五五〇〇町歩、これは世田谷区とほぼ同じ面積だそうです。玉砂利を踏みしめて一五分程で内宮の御正宮に着きます。初めて行った方はさぞかし大きい、絢爛豪華な建物が建っていると期待をして行くんですが、極めて素朴な、しかも周りの杉木立の大きさ、境内面積から考えれば小さい建物、掘立柱に茅葺屋根、驚きますね。「いやー、素朴だ」の一言。

しかしこの建物が二〇年に一度建て替えられる。一三〇〇年間もずうっと続いて、六二回目になる。不思議だなーと思うんですね。そしてそれまであれもこれもお願いしなくてはと頭に思っていたのがなんにも消えちゃって、ただ、二礼二拍手を夢中でした。という方がほとんどではないでしょうか。実はうちの家族で三回ほど伊勢参りをしました。うちは四姉妹なんですね。それはどうでもいいんですけど。一番下の娘が十八の時に「お父さん神様のパワー感じるね、絶対感じるよ」と言ったんですね。その時西行法師の有名な和歌を思い出したんですね。

何事の　おはしますかは　知らねども　かたじけなさに　涙こぼるる

あ、これだ。西行法師が感じたこと、うちの娘が伊勢にきて感じたことは同じだな、と思ったんですね。お陰でこっちが涙こぼしてしまいました。

さて、この神宮すなわちご祭神天照大神はもともと皇居に祀られていました。十代崇神天皇の御世疫病が流行り世の中が疲弊してしまいました。あるとき天皇は霊夢、不思議な夢を見ました。私を皇居の外の日本で最も良い処に祀ってくれというお告げがありました。皇女を遣わして、まだ社殿が整わない状態、外でお祭りを致しました。神籬祭祀と申します。その後垂仁天皇の皇女倭姫が都すなわち奈良から良き宮地を求めて一五番目に訪ね選ばれたのがこの伊勢なんですね。ここで天照大神が皇居に祀られていたというのが大事なポイントなんですね。

皇孫ニニギノミコトが天孫降臨の際に、天照大神は三種の神器と共に、次の三つのお言葉を賜りました。これを神勅と申します。

天壌無窮の神勅　「私の子孫がよろしく国を治めれば、天地が永遠であるように、いつまでも国と民族は栄え続けるだろう」

宝鏡奉斎の神勅　「この鏡を私と思い、身近で大切にお祀りしなさい」

斎庭の稲穂の神勅　「私が高天原で作った稲穂を授けるから、地上で育て食糧とし、豊かな国にしなさい」

この神勅この言葉の通りに伊勢の神宮でも皇居でもいまだに同じ形、精神でお祭りが行われているということが大事であります。世界で類例がないということであります。天皇が稲種をまき、田植えをなされ、実れば刈り取りをなされる。そして、稲穂を神宮へ天照大神のところへ捧げられる。宮中神嘉殿にもささげ、新嘗のお祭りをされる。このお姿が日本の天皇のお姿であり、国体、国民体育大会ではないですよ、国柄の中枢に据えられたということが大事なんですよ。従って、キングやエンペラーとは違うんですね。神宮も数ある祭典の中で一番大切なお祭りが神嘗祭ですね。神嘗祭を中心にお祭りが行われているといっても過言ではありません。神嘗祭は陛下が育てた稲を天照大神に捧げるお祭りです。稲についてもう少し申し上げますと天皇陛下が即位される時にも悠紀田、主基田で獲れたお米を新帝が召し上がる事により天皇霊を身に付けられる。これが大嘗祭ですね。そして大嘗祭は祭祀を行う時のために新しく大嘗宮をお造りになるんです。古代に於いての神嘗祭は毎年社を建ててお祭りを行ったとも言われております。だんだん祭りの規模が大きくなってくると毎年毎年社殿を建てるというわけにもいかなくなって二〇年に一度というこ

とになったんではないかとも思われます。要するに社殿を最高のコンデション、清浄の中で神嘗祭を行うためだったのでしょう。

日本人は大地自然に神々が存在すると考えました。その最高にあるもの、それは太陽です。太陽がさんさんと大地に光をそそぎ恵みを齎す。太陽そのものを神というのではなくその現象を天照大神と御名を讃え、また日本人の大御祖神と仰ぎ、感謝のまことを捧げてまいりました。これが日本人が心の中で脈々とつないできた精神であります。二〇年に一度というのは、社殿の耐久性や技術の伝承とか言われてもおりますがやはり、二〇年に一度の遷宮を大神嘗祭とも言います。原点にもどり建物一切を新しく整え、天照大神の神恩に感謝し国を若返らせる。これを「とこわかの思想」といいます。国の根幹を農業稲作に置いたということ。これを忘れてはならないと思います。

さて稲作を行うには山川の清らかさが求められる訳です。緑豊かな森の育成、森のもたらす威力、そして大地の計る事の出来ないエネルギー、そのエネルギーを戴くための掘立柱ではないでしょうか。社殿の中心にある柱を心の御柱といって大切にしております。古殿地と申す元の宮地の中に小さな屋根が葺いて残してある処が御座います。これが心の御柱の場所です、大地自然の中、青々とした森、澄んだ水、白い石の上に立つ真新しい社殿

で、そして御神宝も一切新しくして大神嘗祭を行うこと。これが遷宮だと思います。常に更新しながら変わらないというのが日本の文化です。世界で一番古くて新しい建物と言われる所以でもあります。その神宮と地域を守る氏神さまそして各家庭をまもる神棚が一直線で繋がり、幸せな家庭が育まれる事とおもいます。宜しくお願いします。

（茨城県　健田須賀神社　宮司）

オハケ&オバケ

村田和弘

日本の国は落ちる処迄落ちてしまいました。

毎日の様に報道される凶悪な犯罪、市民は元より公人に至る迄詐欺事件から厚生省の局長公文書偽造、広島少年院での法務教官による暴行事件、十八年目に無罪が証明された殺人事件等・・・。あれよあれよと出るたびに慢性化し、「又ですか・・・」とその驚きも薄れる日々であります。物で栄えて心で滅びる日本人、西洋的な投資経営に引きずり廻され、アメリカがこければ皆こける日本・・・。

私は今、気に掛る小学校の学習方針に注目しています。義務教育の小学五～六年生より英語を取り入れ指導することになったのであります。日本語が満足に使えない日本人にすぐ取り入れる必要があるのでしょうか。又、世界一の奉仕団体、日本のライオンズクラブは世界の四割献金協力をしており、三十年振りに日本から国際会長を出すべく支援をしましたが英語が話せないとの理由で選出されませんでした。昨年のノーベル賞受賞者三人の

一人、名古屋大学の教授は英語が得意でないからと堂々と日本語で挨拶をされました。ドイツの首相がドイツ語を忘れない限りドイツは滅ばないと話されたそうですが、言葉や生命をかけて国を守り戦っています。世界中の文字は大きく分け英語、アラブ語、漢字を使用する国に大別できると思いますが特に、日本語は音読、訓読、カタカナ、ひらがな、漢字、アラビア数字、漢数字と多枝多用に変化いたします。活字離れの若人の為に、日本の漢字能力検定はいいことだと思いきや検定協会の前理事長父子の背任容疑。一体何を信じれば良いのであろうか。

私の奉仕する小さな一村社の宮司が何時も若い小学生を相手に話していることを思い出します。デルタの町広島には多くの川が流れ戦後の日本三大放水路として三十三年越しに太田川放水路が昭和四十年に完成した関係で六つの川となっていますが、ちょうど一本の川が分かれる分岐点に我が社（長束神社）はあり、以後太田川の総水神を祀る社となりました。古代人達は大雨の度に被害をもたらす大きな川、太田川を恐ろしい大きな川との意を残す為に「大」の字の中に「丶」を記し「太」という字を使い太田川と名付けました。これは、「大の字の中にほこりが付いているのではなく大きな意味を含んでいるので皆さんは大の字に点を書くことを忘れてはいけない。単に大きい川でなく、大水の度に河川の流

れが変わるほど恐ろしい偉大な川。より大きいの意味を含む」との説明でありました。小さな「丶」一つにも思いを込め作られたのが日本の漢字なのであります。「丶」や濁点が有か否か又、付ける場所や位置により内容が一変するのであります。大の字の上に点が付けば犬となり大きく内容も変ってきます。

今日話します「オハケ」の「オ」と「ハケ」とは別々であり「オ」は「ハケ」の尊祢で「御」の意味をもっています。「ハケ」の「ケ」に点を付けると「ハゲ」となり茂っている物が無くなる場合に使いますが、逆に赤子に生まれた時から生える毛は「ウブゲ」と変化します。

役者が舞台で出演をし、下手に退場する場合も「ハケル」とか「ハケ」なさいと指示し使い分けします。「ハケ」の「ハ」に点を付けると「バケ」、「お化け」として使い、三次元の世界よりこの世に出る未確認物体の意味となります。濁点位置やあるなしで大きく違った意味に変化するのです。

さて、神社界におけます「オハケ」の意味は古代の頃より崇高な場合に使用していました。「オ」は「ハケ」の尊祢で室町時代以降用いられたと言われていますが、「ハケ」は二通りの意味がありその一つは、単なる目印に使用し残る一つは注連縄のように精進潔斎

をし不浄のものをさけたり、標識のように外部から見え又、場所を示す標識を示し、専門的には依代とする意味を含んでおります。古代人等は紙や布を大切にし青々と茂った榊や竹等が一時的に神が宿る依代、目印として神籬の意を持ち使用させ「オハケさん」と呼ばれ神主に代わる頭屋の間、使用され呼ばれていたと言われます。このオハケが後世神道で使われる御幣や神籬に変っていき現代に至っているといわれています。

従ってオハケとは神社祭祀や村落祭祀に神祭りの当番として標示した目印の意なのであり、濁点がある「オバケ」とは大きく変り「オハケ」は聖高なる神に繋がる意味になるのであります。現在「オハケ」は西日本を中心に伝承されており頭屋としてのシンボル象徴として設けたもので一年神主、廻り神主とも呼ばれる司祭者を表わしているのであります。標識から神籬に変化し榊や紙垂を付け御幣となり日本全土に広まり一時的に神の宿る場所となりました。

この様に、日本の漢字には象形文字から始まりカタカナ、ひらがな、漢字等様々に変化もし一つ一つの字の中に複雑な多くの意味を持ち後世に伝えていることを私達は考え知り使いたいものであります。

（広島県　長束神社　祢宜）

天皇ありて日本あり

畠田明彦

二、三年前の夏だったと思いますが、当時中学生だった娘が突然「お父さん、靖国神社には戦犯が祀られているんでしょ?なぜ戦争で悪い事した人を祀っているの?それにあの戦争で悪いのは日本と違うの?」と訊ねてきました。何故そのような事を聞くのか質すと、やはりマスコミの影響でした。学校行事における国旗掲揚並びに国歌斉唱の問題、或いは歴史教育の問題が取り沙汰されている中で、娘のこの質問は改めて家庭教育の大切さを気付かせてくれました。そして学校では教わらない日本の素晴らしい国柄、正しい歴史を我々が教えなければならないと痛感した次第です。私は反省しつつ、娘を諭しました。

さて、世界で比類なき我が国の国柄、その中心は言うまでもなく「天皇」であります。小学校学習指導要領に「天皇についての理解と敬愛の念を深めるようにすること」と明記されていますが、これを意識して授業をしている教師は殆どいません。そのような中で、現代の中学生、高校生が天皇についてどのように思っているのか。次の一～五のような質

問を想定し、それに答える形で話を進めて行きたいと思います。

一、天皇は偉いの？

当然です。日本で一番偉いだけではなく、世界で最も地位があり権威があります。つまり世界で一番偉い方です。現にアメリカの大統領もイギリスの女王も、そしてローマ法王も天皇陛下と同席する時は上席を譲るのです。それは天皇が世界で唯一、一度の革命もなく、古代から連続した最古の王朝の君主であり、他国との友好や親善に尽くされ、心から世界平和を願われている事を知っているからです。実際皇室外交により危機から救われた国もあるのです。

こんなお話を知っていますか。千七百年以上も前のお話です。ある時当時の天皇だった仁徳天皇は、村から湯気や煙の立ち上る様子がなく、人々が食事もできないくらい貧しさに苦しんでいる事をお知りになり、国に納める税金を免除されました。その結果、天皇のお住まいは雨風で屋根が破れ、衣服や布団が濡れてしまうほどに荒れ放題になってしまったそうです。天皇はいつもご自分の事より国民を優先して来られたのです。これが「偉い」と言う事です。

二、天皇は普段何をしているの？

お仕事はたくさんあります。どれも大切なお仕事ですが、最も重要なのが「お祈り」です。天皇は常に国の平穏と国民の幸せをお祈りされています。その一例としてこんな史実があります。鎌倉時代に超大国の元という国が日本に攻めてきました。これを元寇と言います。元軍の数は日本軍を遙かに上回っていました。当時の後宇多天皇とその父亀山上皇は国民を守るため、寝ることも食べることも忘れひたすら神仏に祈り続けられ、その結果台風が吹き荒れ元軍は全滅しました。曇りのない一途な祈りは必ず天に通じるのです。

三、天皇に戦争責任はないの？

当然ありません。当時の大日本帝国憲法と照らし合わせ、天皇のお立場を考えると責任など生じない事がわかります。又この戦争の経緯を深く掘り下げて考えれば、日本人が自虐的になる事はないのです。アジア諸国を欧米の植民地から独立・解放させるために始まったのが大東亜戦争（第二次世界大戦）です。つまり、欧米白人支配からアジアを守るために日本は戦ったのです。しかし日本は敗戦しました。米英を中心とする戦勝国は「平和に対する罪」と言う以前にはなかった事後法で日本を裁きました。これを東京裁判と言います。原爆を投下したアメリカの行為は裁かれない、国際法を無視した不公正な裁判は無効です。「責任」と言う言葉は「敗戦」と言う結果がもたらしたものです。それより忘れ

てはならないのが、昭和天皇と連合国司令官マッカーサーとの会見です。昭和天皇は「私は極刑に処せられてもかまわない。しかし国民は救って頂きたい。また私の全ての財産を差し出すので、国民が飢えて困らないよう配慮頂きたい」と仰ったのです。このお言葉にマッカーサーは大変驚き、感動したそうです。昭和天皇の捨て身の御心がなければ、日本は滅んでいました。更に昭和天皇は、終戦後約八年半かけて、日数にして百六十五日、距離にして三万三千キロ、荒れた各地を巡り国民を労り、励まし続けられたのです。今の日本があるのは昭和天皇のお陰です。

四、天皇が日本の象徴ってどういう意味?

正確には「日本国と日本国民統合の象徴」です。象徴とは「そのものの性質を他の言葉等で表すもの」と言う意味です。即ち天皇は「日本の本質を表されるご存在」で、「日本国民が一つに纏まるために不可欠なご存在」と言う意味になります。言い換えれば「日本そのもの」と言う事になるのです。

五、天皇は日本にとって必要な存在なの?

天皇は日本の国が誕生してから、二千六百年以上百二十五代にわたり、如何なる時も常に温かいお気持ちで国民を慈しみ、日本を守って来られました。阪神・淡路大震災等の災

害が起こった時、天皇皇后両陛下は真っ先に被災地を訪れ、被災者と膝を交え（上から見下ろすのではなく、相手と同じ目線になる）、親身になって励まされました。この両陛下の御心は被災者の生きる希望となり、復興へ向けての原動力となったのです。又天皇陛下は平成十年にイギリスを訪問されました。その時イギリスの為に亡くなった方々を慰霊する「無名戦士の墓」に花輪を捧げられ、元捕虜の孫たち一人一人に声をかけられました。突然の事に皆驚き、中には涙を流す人もいたそうです。かつて敵であった国の兵士を慰霊する。そこに天皇陛下の御心の大きさ、深さ、優しさが窺えます。

天皇皇后両陛下は、我々日本人にとって、偉大なるお父さんお母さんなのです。そして日本と言う大きな家の大黒柱なのです。その柱を取り除けば家は崩れてしまいます。そう理解出来れば、「天皇は日本にとって必要なの?」と言う質問が如何に馬鹿げたものか分かると思います。天皇なくして「日本」と言う国はあり得ないのです。

以上Q&A方式で私なりに簡潔にお話しさせて頂きました。なかなか子供らにこのようなお話しをする機会がないと思いますが、身近なところから機会を設けて行かなくてはならないと思います。

（京都府　松尾大社　権禰宜）

挨拶

石井昌孝

「私はあなたを知りません。格好から松尾さんの神主さんとは思いますが、どこのどなたか知りません。知らない方とはお話をしないようにしていますから挨拶はしないでください。」

正直あっけにとられ、なんとも言えない悲しい気持ちになりました。これは境内清掃をしておりました時、普段と変わらずに発した私の「おはようございます」への返答です。挨拶をしましたとき、その応対には色々な方がいらっしゃいます。「おはよう」と返してくださる方、会釈をされる方、チラッとこちらを見てそのまま歩いていかれる方、こちらに挨拶をかけてくださる方皆様々です。決して挨拶の返事を期待しているわけではありませんが「挨拶をしないでください」と言われた事は初めての経験でしたので、私はその方に何も答えることができませんでした。

普段私たちが自然に行っている挨拶。この件があり挨拶という言葉をこの歳になり始め

て辞書で調べてみました。そこには、『新たに顔を合わせた際や別れ際に行われる、礼儀として行われる定型的な言葉や動作のことを指す。また式典などで儀礼的に述べる言葉をいう。』と記載されておりました。人間同士がなんらかの目的で顔を合わせる場合、すぐにその目的に関する話題を始めることはまずないでしょう。最初にお互いの姿を確認した際に言葉を発し、又は体を動かし互いの存在を認めたとわかる行動をします。この一連の行動が挨拶だと言われ、多くの社会では、人間関係を円滑にする上で必須の手続きと見做されています。それ故に挨拶をしなければ、対人関係が悪くなる可能性があります。

ですが私たちは普段生活をしている中で、「対人関係が悪くなるから、人間関係を良くしたいから」このような事を思って日常の挨拶をしているでしょうか。いいえ、決してそんなことはないと思います。ただ挨拶は社会的に強く奨励されており、多くの人は幼いころからの家庭に於ける躾や学校教育の中で習慣化され、挨拶するのが当たり前という環境で育ってきております。確かに人間関係の向上のためという考え方が基礎となっていると考えられますが、損得勘定で日常の挨拶をすることはまずないでしょう。本当に自然にされていると思います。

私は青森県の小さな田舎町で生まれ育ち、御名前までは分からないにしろ地域の人たち

とは幼いときからほぼ顔見知りでした。やはり神社の長男ということで地元の方からも覚えられていたせいもあるかと思いますが小学校、中学校に通う登下校時、又普段道を歩いているときなどすれ違う人、お会いする方と挨拶を交わしておりました。時には知らない方とも交わす事もあります。何度も交わす事により、初めは知らない者同士でもお互いは認識しあっていきます。これはなにも私だけに言える事ではなく、友人にも、又先輩後輩にも言える事であります。田舎の小さな町であるからこそかもしれませんが、もしすれ違ったときに挨拶をこちらからしなければ、大人の方から、「学校でなにかあったのか？どうした、大丈夫か？」と心配をされたものです。たった一言、二言の挨拶を交わす事をきっかけとして、大人が子供達を見守る、そして人と人とが互いを思い合える、こういった人間の絆、地域の絆を作っていけるのではないでしょうか。この絆こそが、地域共同体を形成し生活をしてまいりました我々日本人にとって非常に大切なことであります。挨拶を無くして相手のことを知りうる、関係を築いていくということはありえません。つまり人間が共同体の中で生活をしていく上での基盤は挨拶であると言えるのです。人間同士の絆が深まれば深まるほど、より共同体は活性化していきます。地域共同体の活性化は結果として我々がご奉仕しております大神様の御神威の向上へと繋がっていきます。

正直なところ、初対面の方へ挨拶をすることは非常に勇気が必要だと思います。今日自分自身を振り返ってみましても、恥ずかしながらなかなか日常ではできておりません。私の未熟さのゆえでございますが、周りを見ておりましても少なくなってきていると感じております。それは地域共同体の希薄化が原因として挙げられるのではないでしょうか。逆に私が白衣袴、若しくは作務衣姿の際には相手の方から我々は神職として認識されているためにお互いスムーズに挨拶がかわされます。ここに私は注目致しました。神職の立場から我々がきっかけとなれないかということです。特に子供たちへの。最初は私達が子供達に声をかけていく。次第にお互いが判りあって行き、互いに声に掛け合って行く。子供達が私達と挨拶を自然と交わせるようになり、今度は地域の皆さん、大人と、そして大人同士が、この子供達が大人になったとき、今度は大人から子供達へと。今まではそんなに関係のなかった方同士でも挨拶をきっかけとして時には冗談を話したり、また時には支え合い協力しあったりと信頼関係、そして絆を築いていけるのではないでしょうか。

「私はあなたを知りません、だから挨拶をしないで下さい」

もし再びこのように言われましたら、私は次のように答えようと思っております。

「挨拶を無しにして私は何事も始まらないと思っております。今回は初対面どうしでした

が、これをきっかけにこれから宜しくお願い致します」

と。挨拶、それは本当に短い単語ですがそこからの発展となりますと、それは計り知れない無限大の可能性を秘めた言葉です。私は挨拶をきっかけとして多くの方と心と心のふれ合いを広げていきたいと思います。

（京都府　松尾大社　権禰宜）

日本の、日本人の素晴らしさについて考えること

飯田延生

私の勤めます松尾大社には、庭園史研究家、作庭家として名高い重森三玲氏が、昭和五十年に完成された「松風三庭（しょうふうさんてい）」という現代式庭園がございます。

重森先生は、明治二十九年（一八九六）岡山県でご出生。若い時は日本画を学び、生け花、茶道にも励まれ、多分野にわたりご活躍なされました。

庭園研究に進まれたきっかけは、昭和九年の室戸台風の被害からでございます。この大型台風により、社寺の庭園も大きな被害を受けました。しかしながら、庭園につきましては設計施工の資料がなく、修復は困難をきわめたのでございます。そこで先生は一念発起なされ、昭和十一年四十歳の時から全国約五百ヶ所の庭園を巡り、実測調査をなされました。

調査開始後僅か三年の昭和十四年、実測図などをまとめた『日本庭園史図鑑』全二十六巻を上梓なされ、日本庭園史研究の先駆けとなる、多大なご功績を残されたのでございま

す。

四十代前半からはご自身で作庭にも携わられ、京都東福寺の方丈庭園から始まって、およそ二百の庭園をお作りになりました。その先生の七十代後半、最晩年に作られましたのが、当社の「松風三庭」であります。三庭は「平安風　曲水の庭」「上古風　磐座磐境の庭」「鎌倉風　蓬莱の庭」から構成されておりますが、三庭の中でも特に注目されますのが、「磐座磐境の庭」でございます。

松尾大社本殿の裏手には、標高二百メートルほどの松尾山がございます。太古の昔はこの松尾山の御神霊を生活の守り神として崇めてきたわけですが、この松尾山の山頂付近、古い絵図には旧鎮座地と書かれております大きな磐座がございます。重森先生はその山上にある磐座を庭園として表現なされました。

何故、重森先生は「磐座磐境の庭」をお作りになろうとされたかと申しますと、先生は日本の庭園の築山、石組みなどの独特な雰囲気のルーツとは何かとお考えになりました。そして、これらの源流は、日本の神々が自然の中に鎮座した姿、則ち、古代の信仰の対象であった磐座磐境などを庭園の中に活かそうとしたことである、と感得なされました。そこで最晩年の作品として「上古風　磐座磐境の庭」に挑まれたのでございます。

○

古来、日本人が最も大切にしてきた道徳、また生活規範とは何か。それは神道でいう明浄正直、一般的な言葉では誠実、純粋、一生懸命などであろうかと存じます。

それは天照大神様と素戔嗚尊様の誓約の場面から拝することが出来るのではないでしょうか。

素戔嗚尊様が根国に赴く前に姉君である天照大神様にご挨拶のため参上なされますが、天地を鳴動させつつ来られる素戔嗚尊様に対して、天照大神様は高天原を奪いに来たものと思われ、相対されるのでございます。その御姿は、古代男性の髪型であった髻に結い上げ、背には多くの矢の入った多くの武具「千箭之靫と五百箭之靫」を負われ、腕には「稜威之高鞆」をつけられる。現在の言葉で申すなら、完全武装でありましょう。誠に恐ろしい場面でございます。さらには、剣を握りしめ、足が地に埋まるほど四股を踏みつつ「稜威之雄誥」を奮わし、問い質されます。まさしく、世の平安を、秩序を乱すものへの怒り、お覚悟を示されるのでございます。お互いの全身全霊を尽くされた問答、誓約が行われました。結果、天照大神様は、素戔嗚尊様の赤心をお受けになりました。

この赤心こそが、天忍穂耳尊様と瓊々杵尊様、そして万世の皇統へと受け継がれてゆく

始まりでございます。

そして日本人が、神代の昔より心清らかであるか否かを最も大切にしてきた証拠であるとも存じます。

○

この赤心が、皇統へとつながり、神道の核心となりまして、日本の歴史、文化の根底に働いてその原動力となってまいりました。一つ例をあげますと、明治天皇様の「陸海軍軍人に賜はりたる勅諭」には、忠節、礼儀、武勇、信義、質素の五箇条をあげられた後、この五箇条も一つの誠心（まごころ）が無ければ装飾に過ぎぬとされておられます。

赤心は、誠心、純粋、一生懸命と色々な言葉で表現出来るのでございますが、先程の重森先生もまた、一人の日本人としてその赤心を体現なされたのでございます。神の庭である「磐座磐境の庭」を作る時の心構えを『松尾大社造園誌』で、「神の庭を作る為には、神に近づかなければならぬ。どうしたら神に近づくことが出来るか、それには少しでも自らが純粋になることである。すべてのことは、一生懸命になるということである。一生懸命になり切ることによって、純粋度が増すのである。一生懸命になることによって雑事の一切を頭から除去することが出来る…ありがたいことに、人間は、この一生懸命になる

ことだけは、誰にも出来るはずである」と述べておられます。

○

「磐座磐境の庭」は、真夏の炎天下作業が進められ、昭和五十年に完成。そして重森先生の最後の作品、絶作となりました。

その庭は、数多の作品の中で最高傑作と称えられ、動と静、荒々しさと静けさ、厳しさと親しみやすさ、本来相反するものを一致させた美しさをみせております。

国の内外に見苦しいこと、聞き苦しいことの多い昨今ですが、世のため人のため、それぞれの持ち場で一生懸命に頑張ってまいりましょう。

（京都府　松尾大社　権禰宜）

いのちの神さま

龍見將弘

皆さんこんにちは。私は大学卒業後、指定神社実習でご縁を頂いた奈良県に鎮座する「大和の国一宮　大神神社」に奉職しました。奈良では十三年間奉仕させていただき、昨年春に父の定年を機に生まれ故郷の滋賀県へ帰り、現在「お多賀さん」（多賀大社）で奉職しております。

お多賀さんといえば、古謡で紹介されるように「お伊勢参らばお多賀へ参れ　お伊勢お多賀の子でござる」とあるように、御祭神の伊邪那岐大神・伊邪那美大神は伊勢神宮でお祀りされている天照大神様の親神様にあたります。八百万の神をはじめ地上の山川草木を生み出された「いのちの親神様」であります。

今日は私の家族のことについてお話をさせていただきたいと思います。

私は二十二歳で奈良の地へ入りました。大神神社は当時、平成の大造営の真っ只中で国の重要文化財、拝殿の解体修理に伴い祈祷殿の新築が進んでおりました。まだ右も左も分

からないまま先輩にいろいろご指導いただき神明奉仕させて戴いておりました。

それから権祢宜となり、二十五歳で結婚しました。その頃同級生がチラホラ結婚式に呼んでくれるようになり、周りの波に乗って勢いで結婚したように思います。今振り返ると「社会に出て二年少々で、仕事や近所付き合いもろくに知らない若輩者が、一人前の様に結婚という大きな決断を易々としてしまったなあ」と自分の青さを感じると共に「若いからこそ出来たんだなあ」と思います。結婚は全く異なる環境で育った二人が同じ家で暮らすため、ぶつかることも多々ありましたが翌年第一子の女の子を授かりました。

季節は春　桜満開の中、春の大祭も終わり、一週間後のくすり祭と呼ばれる鎮花祭の参籠の夕方、家内から「そろそろ産まれそう」という電話を受け、病院に向かいました。家内は陣痛で苦しそうにしており、その晩は腰を押したり、さすったり。一晩中横について介添えしていました。そして夜が更け、空が白みはじめ、お祭の参進の時刻・・・十九時間の陣痛の末、長女が産まれました。私は立ち会い出産する心の準備もないまま家内の手を握り、子供が生まれる瞬間に立ち会うことになりました。お祭の始まる時刻で「これもこの子のご縁かなあ」と感じながら、産まれた瞬間手足の指の数を数え、五体満足に感動のあまり泣き崩れてしまったことを鮮明に覚えています。

翌日出社して先輩から「どっちやった?そうか。女の子か。女の子はええぞ」っとお祝いの言葉を頂きながら潔斎を済まし、社務所に上がると「病院から電話が入っています」とのこと。何かなと思い受話器をとると助産婦さんから「昨日の夜、子供さんが二回吐血されました。輸血が必要でお父さんのはんこがいります。今すぐ来て下さい」とのことでした。私は「昨日こうやって自分の手の中に抱いたのに、産まれて『おぎゃー』って泣いたのに・・・お前まだ空も、咲いてる花も見て無いやろ・・・」いろいろ頭をよぎりながら病院に着くと子供は既に新生児集中治療室の保育器であっちこっち管をはめられ、昨日の姿と一変していました。先生から輸血のリスクの説明を受け、「今できるのは輸血しかない」とのお話に、肩を落としながら印を押しました。子供は胃から出血しており、出血が止まるまでお乳も飲めず点滴のみで過ごすことになりました。子も「あれだけの陣痛で苦しんでこの世に生を受け、その後お乳も飲めないなんて」と考えると無念さだけが残りました。男の人は「産むこともできない。苦しむ子のために何も手を差し伸べることも出来ない。」やるせなさと情けなさで一杯でした。

そして一週間後、先生の処置により出血も止まり、取りあえず水を飲むことが出来ました。生まれてから初めての水分です。私なら水無しで一週間耐えられなかったでしょう。

子供の「生きたい」という生命力に驚かされました。

大神神社には摂社の狭井神社というお社があります。このお社は病気平癒の神さまとして非常に霊験あらたかなお社で、神体山からの地下水を井戸で汲み上げ、その水でお薬を飲むと病気が治るということで遠方からお水を汲みに毎日多くの参拝者の方が来られます。私も「このお水を子供に」と思い病院へ届けましたが、生水を直接飲ませる事は先生から許可が下りませんでした。しかし、家内にこの御神水を飲んでもらってお乳にして冷凍保存し、飲ませることはできました。

最初は水だけ。徐々に粉ミルクを足し母乳の濃さに整え、やっと解凍した母乳を飲めるようになったのは二週間目でした。出産後一週間にできるお乳は抵抗力を増す為、その時しか分泌されない大切な成分が入っているそうです。

その後、出生から一ヶ月で生まれた時の体重に戻り、晴れて退院することが出来ました。娘は「神様の水」によって助けられたのであります。

このような事があり、私は生まれて初めて神さまに「自分はどうなってもいい。死んでもいいから子供の命を助けて下さい。」とお願いしました。お恥ずかしい話ですが今までは「受験や部活で実力が発揮できますように」とか自分のことに関して願掛けしたことは

ありましたが、自分以外のことでそこまで真剣に神頼みしたことはありませんでした。

私は平々凡々と何の不自由もなくその歳まで暮らしていましたが、この時初めて参拝に来られる方がどれだけ一生懸命に祈られているのか気持ちが解ったような気がしました。

現在長女は小学五年生（十一歳）になり、何の後遺症も無く健康に毎日を過ごさせて頂いております。私はよく長女に「お前はどこの誰か知らない人の血で助けてもらったなあ。誕生日が狭井神社のお祭りの日やから、狭井神社の神様にも命を助けてもらったなあ。神様とみんなに、社会に奉仕する事で返さんといかんなあ」と言っております。

私もこの事があってからご神前で祝詞を奏上する時、神様と人との中取り持ちとしてその人の気持ちを受付伝票から察して奏上するようになりました。また特に祈祷の受付の時若いお父さんが来て「子供が生まれたんですが、入院しておりまして・・・」とか「今度手術を受けるんです」などの深刻な表情で御祈祷を依頼される方を見ると、この仕事を通じ私にできる事は、神様に共に祈る事しかない。と思って人事（ひとごと）ならぬ気持ちで奉仕するようになりました。ご祈祷が終って私の身の上話をして「必ず守っていただけますよ」と声をかけると受付にこられた時と違い、本当に安心した顔でお帰りになります。そして初宮詣に家族みんなでお参りに来られると「ああ本当に良かった。おめでとうございます」と

思うようになりました。

こういった体験談で深刻な悩みを持ってお参りされる方が楽になっていただけるという事は、自分はその時本当に苦しかったけど、この仕事をしてるが故に神様が与えて下さった壁だったと思っています。

私は子供の命を、「いのちの親神様」である故郷のお多賀さんと狭井神社（大神神社）の神様に助けていただきました。「神様に借りができた」といえば罰当たりな表現ですが、子供と一緒にお返ししなければならないものがあります。神前奉仕を通して神様に、そしてお参りに来られる参拝者に日々恩返しをしたいと思います。

これからもまだまだいろいろな壁があると思いますが、このような事を糧に日々自分を律し精進したいと思います。身の上話ばかりでお時間をお取りしましたがご清聴有難うございました。

（滋賀県　多賀大社　権禰宜）

日本神道は世界の宝

村瀬佳子

『日本神道は世界の宝』これは、元の神社本庁教化講師でいらっしゃった石井寿夫先生が演題として使われていたものです。石井先生の故郷は広島。本人は被爆こそ免れたものの、無残にも焼け野原となった故郷を見渡しながら、終戦後二年間、広島駅近くの二葉山の中腹にある山小屋に籠もり、早朝禊をし、古事記を原文で何度も何度も読み解かれました。

その姿はあたかも神話で天照大神が天岩戸へおかくれになった姿と重なります。そして、神代巻のハイライト「岩戸開き」の神話から学んだ教訓が「戦前の国家神道を『まさりて貴き神』の道に生み直せ」であったとされています。古事記の神話が若き日の石井先生を救い、ふるい立たせたのです。その後、佐古幸嬰先生との出会いがあって、昭和二十四年の正月初めて神社の社頭に講師として立たれたのです。その後、石井先生は沢山の演題を持ち、全国津々浦々講演をして廻られました。

『神道は世界の宝』という演題を初めて使われたのは昭和三十四年広島県でのことでした。その後昭和五十八年三重県で、そして平成三年二月二十日北海道・六月九日に愛媛県・続く二十三日に青森県で『神道は世界の宝』と講演して廻られたのです。そして、翌月七月三日脳出血にて入院され、二十一日に享年七十七歳をもって帰幽（亡くなる事）されたのです。

石井先生の講演人生の中でこれを演題として使われた回数は五回と少ないのですが、長年の学問の末、昇り着いた境地が『日本神道は世界の宝』という事だったのです。今は石井先生の肉声を聞く事は出来ませんが、私は明らかに先生の蒔かれた種を拾っていたのです。

フランスの神話学者デジュメルの言葉に「神話をなくした民族は命をなくす」というものがあるそうです。日本の神話は『古事記』『日本書紀』にあります。

私事ですが、結婚式の寄せ書きの色紙に『世を修理り固め成すこと（よをつくりかためなすこと）』という言葉を頂きました。大変感動しました。何故ならばこの言葉は『古事記』神話の中で初めて夫婦となるイザナギ・イザナミの神に天つ神が一同で命じた言葉だったのです。

二人の夫婦となった神様は世の中を良くするという目標を与えられたのです。世の中が良くなる一番大事な事は、神代の昔から変わりません。夫婦となり、そこから子どもが産まれ、社会との結び付きの大切さを身を以って経験し、自分の両親や御先祖様への感謝の気持ちをより一層深くするのです。

何より神話には人が生まれてから亡くなるまでの知恵が本当に沢山含まれているのです。

また、このような事があります。亡くなられた白川静という大漢字学者がいらっしゃいました。その方が監修された『神さまがくれた漢字たち』という本の中で紹介されているのですが、『韓非子』という思想書の中に「宗廟をして掃除せしめず（神霊を祭る場所を誰ひとり清めたりする者はいなくなった）」という句があるそうです。聖所を清めるという重大な儀礼を忘れてしまうことは、とりもなおさず国の滅亡を意味するというのです。

日本の神道・神話がなぜ素晴らしいかと申しますと、それは日本が建国されて以来およそ二〇〇〇年、守り伝えられ、現在にも通用する古くてなお新しいものだからなのです。

江戸時代までの鎖国を終えて明治天皇は開国以来、人々が西洋諸国と競争する心というものを大変に戒められたと言います。何故なら日本の国には一歩一歩積み上げてきた素晴

らしい文化・精神性が既に備わっているので、それをさらに磨くことで世界の手本になるように志そうとされたそうです。

しきしまのやまと心を先だてて
道ある国と人に言われむ
（明治天皇御製）

何と貴い志でしょうか。日本の国は建国以来貴い天皇様に導かれながら今日まで来たのです。素直な心に立ち返って『古事記』・『日本書紀』を読み解いて、石井先生も気付かれた「まさりて貴き神」の道を究めてゆきたいと思います。

『日本神道は世界の宝』と堂々と胸を張って次の世代に伝えて行きましょう。

（広島県 長束神社　権禰宜）

ようこそ　おたけびの宮　男神社へ

菅野洋子

皆さん、今日はようこそ男神社にお越しくださいました。皆さんは毎日雄信小学校へ通っておられますね。そして、月に一度のダイアモンドロード作戦には、参道もお掃除して下さっていますね。有り難うございます。そのことを、神様はとても喜んでいらっしゃいますよ。

さて、このように男神社と雄信小学校はお隣同士ですが、皆さんが神社におまいりになるのは、お正月とお祭りくらいでしょうか？皆さんは男神社のこと、由緒などほとんどご存じないと思いますので、これから説明させていただきます。

皆さん今の天皇陛下、今上陛下といいますが、第何代か知っていますか？平成の天皇様は第百二十五代です。

一番初めに天皇の位に就かれたのは神武天皇といわれる方ですが、男神社の始まりは、神武天皇が奈良の橿原に都を建てて、天皇の位に就かれる以前のお話です。

昔々、五瀬命と神倭磐余彦命のご兄弟が、奈良に都を建てて日本の国を治めようと日向、今の九州から奈良へ進んでいかれる途中、大阪で長髄彦と戦になり、お兄さんの五瀬命が敵の流れ矢で肘に傷を負われ、

「吾は日の神の御子として、日に向かいて戦うこと良からず。故れ、賊奴が痛手をなも負いつる。今より行き廻りて日を背負いてこそ撃ちてめ」

(私は太陽の神様の子孫であるのに、太陽に向かって戦い、進んでいるから良くないのだ。だから傷を負ってしまった。これからは回り道をして太陽を背にして進んでいこう)

とおっしゃいました。それで一行は大阪湾を南進して紀伊、今の和歌山に向かわれようとして紀元前三年五月八日、この男里にお着きになりました。男里の村人たちは、五瀬命の傷の手当てをして命の傷の血を、山の井の水門で洗いました。その洗った水が大阪湾に流れたことで　大阪湾を血の沼の海と書いて「血沼の海」といいます。また大阪湾で獲れた鯛を血沼鯛といいます。

さて、五瀬命の傷は重くなり、そのお苦しみの中で剣の柄を堅く握られ

「慨哉、大丈夫にして賊しき奴の手を負いて、報いずして死なむや」

(奈良に都を建てて日本の国を治めようと志して進んできたのに、賊の手傷によって思い

を遂げられずに死んでしまうのか、残念だ。）

と、雄詰されたのです。それで男神社を「おたけびの宮」ともいいます。雄詰とは、「勇ましく叫ぶこと、雄雄しく振舞うこと」です。

五瀬命の傷が少し良くなったので、一行は男里を出発されることになりました。村人は大変別れを惜しんだので、五瀬命は

「私の霊を末長く祀りなさい。」

と、七人の家来を残して行かれました。これが男神社の始まりです。

出発した一行は和歌山まで進みましたが、五瀬命の傷が重くなって、とうとう竈山という所でお亡くなりになりました。

神倭磐余彦命は悲しいながらも、奈良に都を建てて日本の国を治める、という志を成し遂げるためにどんどん進み、ようやく奈良に着いて都をお建てになりました。神倭磐余彦命、それが初代の天皇、神武天皇さまです。

さて、五瀬命は男里の海に近い所でお祀りされていましたが、貞観元年、八百五十九年に今の地に移されました。この時、五瀬命と共に神武天皇、天児屋根命、熊速玉神様をご一緒にお祀りすることになり、現在本殿には四柱の神様がお祀りされています。

本殿の横には小さなお社があります。若宮といいまして事代主命をお祀りしています。「商売繁盛、笹もってこい」の戎さんですね。十日戎と言うお祭りで一月十日とその前後三日間、福笹を受けにたくさんの人がお参りになります。

さて、建物の説明をしましょう。本殿は貞観元年に建てられたようですが何度か修繕が繰り返されて、今の本殿は天正十七年、一五八九年、豊臣秀吉公のご命令で造営されました。

当初は大社造りであったものが、後に流れ造りに改められて、殿内外に極彩色を施し、所々に彫刻物を挟み仏堂に近い建造物になったようです。残念ながら今は色がはげてしまい極彩色は見られません。

いま皆さんがおられるこの建物は拝殿といいます。拝殿は皇紀二千六百年、つまり神武天皇が橿原に都を築かれてから二千六百年にあたる、昭和十五年に建て替えられました。

さて、五瀬命が肘に怪我をされた時、雄詰されましたね。「私は太陽の神様の子供であるのに太陽に向かって進むことが良くない。だから傷を負ってしまった。」と気が付かれたのです。そして、方向を変えて進むことを選ばれましたね。また、雄詰をすることで、怪我をして弱気になった気持ちを奮い立たせたのです。

皆さんもこれから長い人生の中で、自身の目指す道に向かって進んでいる時に、困難に直面したり大きな壁が立ちはだかって身動きが取れなくなることがあるかも知れません。そんな時はそのまま我武者羅に突っ走ったり、落ち込んだりせずに、男神社にお参りして、まず心静かに日ごろの感謝を申し上げて、それから心の中で雄詰してゆっくり目を閉じて下さい。そうすると、神様が進むべき道を示してくださると思いますよ。

それでは、またのお参りをお待ちしています。

本日は、ようこそのお参りありがとうございました。

（大阪府　男神社　宮司）

厄除け祈願と厄神さん

宮城　豊

よく世間の人の会話の中で、「今年厄年なんだよね」とか、「厄年だから最近全くいいことが無いんだ」とか、「神社にお祓いに行った?」なんて会話をよく聞くことがあります。厄年だから良い事が無い。厄年だから悪い事ばかり起こるんだ。そういうふうに人は思う事が多いのです。しかし、簡単に厄年と口にはしますが、そもそも厄年とはどういうものなのでしょう。人によっては厄年を気にするタイプの人、逆に全く気にしないタイプの人がいる筈です。厄年を気にする人は神社に厄除けのお祓いに行くでしょうし、全く気にしない人は神社に近づくことさえしない筈です。もちろんそれは人それぞれですから、各々が好きなようにすればいいと思いますが、まずは厄年というものがどういうもので、またなぜ存在するのかを理解する事が一番大事だと思います。それが出来れば、それぞれ自分なりの厄年が過ごし方が出来るようになると思います。

厄年といってもいったいどうなるから厄年なのかわからない人が多いと思います。単純

に自分の年齢を照らし合わせて「ああ自分は今年厄年なんだ」と思う人が大半ではないかと思います。

そもそも厄年というものは、陰陽道で教育され、そして宣伝されてきたものであり、その年に、それぞれ大きな厄が降りかかるとされています。そういう事はすでに平安時代から存在し、現在までの間、長く受け継がれてきている風習です。陰陽道は、古代の中国で生まれた自然哲学思想などから独自の発展をした呪術と自然科学の体系です。また陰陽道に通じる人を陰陽師と呼び、室町時代から占い師、祈祷師などとして活躍するようになりました。

一方で厄年を民俗学的に見ると「役年」になります。ある一定の年齢になると、お寺で「役」をするという風習がありました。その「役」を終えてはじめて周囲の人々から一人前と認められたと云われています。それが次第に、この「役」の年齢に差し掛かる頃には、精神的や肉体的に変化が起こりやすく、体を壊したり、思いもよらない災難をうけたりして、人生の一つの節目になっている事が分かってきました。

「役年」を決める際に、地域によってその年齢がバラバラだったのを陰陽道をもとにしてある程度統一されるようになり、方位や日時の吉兆が定められ、年齢も定められる様に

なり、「役年」が決められたのです。

現在の厄年の年齢にも、地域によって多少の違いはありますが、大きな違いはありません。厄年は基本的に男女別で考えられています。人生の節目であり、体調や精神に変化があるので気をつけるようにとの戒めの意味が込められていると考えるのであれば、男女別にそれぞれ分かれるのにも納得がいきます。そうした古くからの様々な風習が長い年月を経てなお現在に受け継がれているのです。

厄年に良くないことが起こるかもしれないと思う人も、まったく気にしない人でも、神社に参拝して厄除けのお祓いを受ける人はたくさんいます。中には、前厄・本厄・後厄と三年間しっかりとお祓いを受ける人もいます。また本厄の一回だけの人もたくさんいるでしょう。それは人それぞれなのですが、現在でも厄除けのお祓いを受けるひとは全国でもたくさんいる筈です。

ここで私の事を話しますと、私は兵庫県加古川市に鎮座する八幡神社に社家として生まれまして、現在神職として日々奉仕しております。私のその実家の神社も厄除けの神様として、周囲から信仰されています。多くの厄除け祈願を日々奉仕させて頂いていますが、そのたびに、人々の厄年に対する想いを強く感じます。また、私の神社は周囲の人々から、

「厄神さん」という愛称で呼ばれています。厄除けの神様だから「厄神さん」と呼ばれるのですが、この呼び方は全国共通ではなく、兵庫県内でのみ使われる呼び方です。兵庫県内では、八幡神社の事を厄除けの神様として信仰する人々の強い思いがあります。そして人々は親しみを込めて「厄神さん」と呼んでいるのです。兵庫県内の八幡神社には、年間を通して多くの厄除け祈願の参拝者が絶えないのです。

私の神社に厄除け祈願に来る人にもいろいろな人がいます。強い信仰を持っている人、単に厄年だからという人、周りに言われてきた人などいろいろですが、まず何より神社に参拝するという事が大事だと思います。そして厄除けのお祓いを受ければまず気持ちが楽になります。そして気持ちが楽になれば、日々の生活にもいい影響を与えてくれると思います。

（兵庫県　八幡神社　禰宜）

皇居勤労奉仕を終えて

營田英聖

今回私は「皇居勤労奉仕を終えて」というテーマで講演をさせていただきます。

大学時代より常々行きたいと思っておりました皇居勤労奉仕についに昨年「伊勢国一之宮椿大神社椿講婦人部皇居勤労奉仕団」の一員として参加させていただきました。皇居内での清掃奉仕はもちろんの事、建物や庭園に対する説明などすべてにおいて熱心に取り組むことが出来ました。その中でも一番深く心に残っていることは、天皇皇后両陛下より御会釈を賜った時のことです。あれは忘れもしない奉仕三日目の晴天の中、蓮池休所にて整列し待機している私達の前に一台の公用車がゆっくりと停車しました。ドアが開くとそちらから天皇皇后両陛下が背にまばゆいばかりの太陽の光を受け、ゆっくりと室内にお入りになられました。天皇皇后両陛下よりあふれ出す慈愛のオーラで室内はあっという間に満たされました。そのとき私は緊張とも何とも言えぬ感覚に陥り、目からは自然と涙がこぼれてまいりました。その涙は、御会釈を賜っている時も、最後に参加諸団体一同にて万歳

三唱をしている時もとどまることはなく、天皇皇后両陛下のお姿が見えなくなってようやくやんでまいりました。その瞬間私は、今まで生きてきた人生が間違いではなく、日本で生まれ日本人として育ち日本の心をしっかりと持つことが出来たのだと思いました。そして、育ててくれた親や、これまで関わってきた人達・環境に対し、心から素直に感謝することができました。そして自分の人生がとても幸せであるものだとも強く感じることが出来ました。

このように、皇居勤労奉仕に参加させていただき、私利私欲の為にするのではなく誰かの為にすることの素晴らしさや、感謝の心、日本人の誇り、尊さ、今日本人として生きていることに対して幸せだと思える心を気付かせていただきました。

これも一重に、親の背中を見て幼い頃から神道に触れ、自然と神様に手を合わせ日本人の心を育んできたからだと思います。

では、いつ頃から私は、神様という目には見えない尊い存在を感じ信じることが出来たのかと疑問に思い幼少期の記憶をたどってみました。そして一つの答えを見つけることが出来ました。

私は小学校二年生の時に、神様にお米・お酒・お塩・お水を毎日お供えする「日供」を

するように言われました。それからというもの、毎朝手を洗い顔を洗い口をゆすいだらすぐに台所に向い、母が朝ごはんを作っている横で神様のお供えものを用意し、こぼさぬようにゆっくりと持っていきお供えをしたあと、二礼二拍手一礼をして、台所にもどり家族と一緒に「いただきます」をして、朝食をとり、学校に行き、夕方学校から帰ったらまず神様に手を合わせお供えものを下げてくるという生活をしておりました。これが小学校二年生から始まったごくあたり前の生活習慣でした。そんな日常のある夕方、いつものようにお供えものを下げてくると、不思議な事に、お米とお水が減っていたのです。その次の日も次の日も減っていたので、あまりに不思議に思った私は、母に「なんでお米とお水が減っているの?」と聞きました。すると母は少し微笑みながら「それはねっ神様がお食べになられたからだよ」と言いました。

その時幼い私は、目に見えない神様が確かにそこにいらっしゃるんだと感じ信じることが出来たのだと思い出しました。今思えば、お水は蒸発し、お米は炊いたお米をお供えしていましたので乾燥し少なく見えたのかもしれません。しかし、今となってはそんなことはどうでも良く、幼い頃に母の教えによって神様を信じられたことは、私にとってはかけがえのない事であります。

このように伝えていただいた、古くより日本人が日本人としてあたり前にしてきた生活習慣である神道をこれから生まれてくる子供たちや周りの仲間に伝えていき、神様を信じ敬う心を教え導いていかなければならないと神主としてだけでなく日本人として強く感じています。

明治天皇御製に

「よきをとり　あしきをすてて　外(と)つ国に
　おとらぬ国と　なすよしもがな」

という歌がございます。確かに日本は、外国の文化を取り入れ肩を並べるほど、素晴らしい経済発展をしてまいりました。しかし一方では、決して捨ててはならない日本人として大切な神道の心までも捨ててしまったのではないかと思います。

今こそ神道の心をはば広く伝え、皆が幸せで笑顔の絶えない世の中への扉を開くべく、まだ見ぬ神に手を合わせ、微力ながらこれからも社頭で参拝者の皆様に声をかけていきたいと思います。

（三重県　椿大神社　権禰宜）

誠は天の道なり
―徴古館開館百周年記念展に向けて―

大野康孝

人は皆神の子。神社神道では、人みな此の顕世を身罷ればその故人の姓名に『命』の字を付し「祖霊の神と高まり安らかに鎮まりますように」と、手厚く祀ります。

それは、人それぞれが八百万神々の一人として使命のまにまに、天が下の芦原の中つ国に生き死にして、地上に『神のみこと持ち』としての役割『天与の事依さし』を果たし、誠を尽くして人生を全うすべきであるからなのです。

＊　＊　＊

私の座右の銘は、『誠は天の道なり、これを誠ならしむるは人の道なり』です。

この維新黎明の地水戸の碩学勤皇の志士、藤田東湖先生の墨跡が史蹟弘道館より広く頒布され、つとにその書が高名ですが、その出典は支那の礼記中庸です。

この教えの『天』を『神』と置き換えて読み解き行けば、「神の道は人の道」と理解で

き「人の道は神の道に通ずる」との事がよくよく判り得ると思います。東湖先生もまた、これを信條として尊攘の志道に至誠もって生死されたのでした。

＊　＊　＊

さて昨年、神都伊勢での神道講演研修全国大会終了後に神宮の博物館である徴古館を訪ねました。その折に同館の堀川館長ならびに深田学芸員より、明治四十二年開館以来実に百年を迎える平成二十一年度開催の『徴古館開館百周年記念展』の企画と構想をお聴きし、更に、この展覧会への協力を要請されたのでした。

＊　＊　＊

そのパンフレットの行事案内書の中に、以下のような一文が記してありました。

『現代刀の百年―復興と継承―』神宮式年遷宮ごとに新たに調えられる六十振りの御太刀。明治の廃刀令と先の大戦の終戦の二度に及ぶ作刀技術存続の危機にあって、式年遷宮が復興のきっかけとなりました。

本展では明治以降、御太刀調製に関わった刀匠の経歴と作品を紹介し、また終戦による式年遷宮の延引と斎行、日本刀の所持並びに製作の禁止とそれらが許可されるまでの法制資料を公開して、現代刀復興の軌跡と式年遷宮が我が国の文化継承に果たした役割を明ら

かにします。…と、その趣旨が端的に述べられているのです。

＊　＊　＊

数ある神宮の御神宝の中でも最も位列の高いのが御太刀であり、その外装です。

徴古館ではこの五年間、年頭を飾る新春企画展として毎年正月元日より二ヶ月間に亘り『神宮の刀』展を催して来られました。その第一回より第三回目迄が『将軍奉納刀』展。昨年の第四回が―聖上の御心を拝して―として天皇陛下が捧げられた『御奉納刀』展。

そして本年は―館蔵品名刀とともに―と題して『御神宝御太刀』展を開催し、この様にその度毎に立派な図録を発行し続けておられます。

そして来年度の徴古館開館百周年記念展の準備にあたって「是非、君に協力して欲しい」との有難いお話であったのです。

＊　＊　＊

私の卒業論文は『肥後敬神党―神風連の研究』、神主としての生涯の課題です。

ですから日本刀に関する想いは所持鑑賞のみならず、特に神話の解釈から始まってその歴史沿革に学びつつも「剣の魂・神武の心」が奈辺にあるか、なのです。

更には、厳しくも美しい神秘的なる刀剣の製作及び研磨の技術や、刀装具に至る職方の

領域まで興味が進み昂まって、今や趣味の域を超え道楽とまで高まりつつあります。

この先は極道です。…もはや、慎まなければなりません。

＊　＊　＊

さて今回の協力要請の趣旨は、未曾有の敗戦汚辱を払拭して昭和二十八年秋見事に斎行なった日本民族独立再興の証、『第五十九回神宮式年遷宮』の御神宝御太刀製作者全国十三名の刀匠中、熊本県より奉仕された隈部忠利刀匠とその製作刀の調査でした。

かねてその栄誉とお名前だけは聴いてはいましたが、郷土の誇りと仰ぐこの刀匠の作品のみが八方手を尽くして探しても、一振りも発見できぬとの事なのです。

＊　＊　＊

只今も刃物鍛冶を営む遺家族や門流の現役刀匠ならびに研師の面々、出身地の役場や教育委員会、県内外の刀剣商や㈶日本美術刀剣保存協会熊本県支部をあげて調査しても皆目見当がつかぬのです。半年を経ても尚、未発見でした。

そのうちに、東京からも福岡からさえも私の処に問い合わせが参ります。

阿蘇神社の台帳にあった筈だと思い返し連絡してみますが、むしろ阿蘇神社の宮司様や同社の学芸員からも却って探索の依頼が帰って来る始末です。

熊本県教育庁文化課に問合わせて刀剣登録の台帳を閲覧できれば、立ち所に調査の糸口が判明し解決するのですが、守秘義務により、その協力要請が適わないのです。

＊　＊　＊

神宮徴古館当局では、最終的には「隈部刀匠の作品ぬきで之を開催するしかない」との、刀匠や郷土にとって実に不名誉な結論を取らざるを得ぬ方向に傾いていたようです。

私は現在、熊本県神社庁神宮式年遷宮特別対策委員会の副委員長。そして、㈶日本美術刀剣保存協会熊本県支部の理事の立場でもあります。

ましてや神職としての資格は、この伊勢倉陵の皇學館大學に学んで取得しました。生命すらも大神様に護っていただき現在があります。…洵に残念でなりません。

『天与の事依さし』神々から与えられし聖使命、その役目を是非、全うしたいのです。天照皇大神のみことを畏みまつり、その成就を必死に祈り行じなければなりません。

＊　＊　＊

鎮魂帰神…原点に立ち帰って探索することにしました。

隈部刀匠の敬神の念と鎮守の神様の調査です。産土神社の若宮神社では、近年まで例祭時に真剣を用いての『肥後神楽』が奉納されていた事が直ちに判りました。

はやる心を押さえつつ、未だお会いした事なき同神社ご奉仕の日方宮司様に早速、連絡を取って一気に事の次第を説明、御刀の事をお伺いしたのでした。

「ああ、隈部さんの奉納刀ですか、二振りありますよ。」あっさり明るい返事がかえって参りました。暁光です！ ああ、遂に神の啓示を賜ったのです。

＊　＊　＊

高まる鼓動をひたすら抑え、近日中に伺う事を直ちに申し入れた次第でした。

返す刀で、同じ県内下益城郡支部所属、佐俣阿蘇神社ご奉仕の船原宮司に正式な紹介と若宮神社へのご案内をお願いしました。…ごく親しい特別の関係の一期先輩です。

何と、「ああ、その隈部さんの奉納刀、うちにもあるよ！」との事。

涙が一気に堰切りとめどなく溢れ出て止みません。…ああ、至誠が天に通じたのです！

神武天皇ご東征の折に、夢に神の命を受けて天剣を捧げまつった高倉下の心境です。

吾もまた高倉下なり天が下　神武の剣ささげまつらん…拙い歌を詠みました。

暗雲が一気に切れ、天照皇大神の御光が燦々と照り輝き始めました。期待に背筋が伸びます。まさに、サムシンググレート！…私の責務はどうやら果たせそうなのです。

＊　＊　＊

折しも春休みで、皇學館大学神道学科に先年入学した長男が帰省中でした。その晩私はこみあげ来たる此の感激を、祝杯を重ねつつ妻子に語り伝えたのでした。

明けて、徴古館開館を待っての朝一番の喜々たる朗報に、館長並びに担当学芸員の喜びが受話器の向こうから伝わり来ます。午後からは、長男同道で往復四時間余の道程を駆けてその二社を参拝し、隈部刀匠奉納の御刀調査に伺う事にしました。

＊　＊　＊

船原先輩ご奉仕の佐俣阿蘇神社の御神刀は、「昭和二十七年十月吉日　肥後住忠利」と表裏にあざやかに刻銘の二尺六寸に迫る堂々の御太刀でした。しかも上品静穏…一見して天下の名刀来国俊を目指したと想える、渾身の直刃出来の高位の御太刀なのです。

そしてその白鞘には墨痕淋漓と、隈部刀匠自筆の鞘書が遺されているのでした。

何と、第五十九回神宮式年遷宮斎行前年の年季銘、御神宝太刀製作と同時期作です。

この頃は未だ刀剣の製作は許されていなかった筈、まさに式年遷宮の御為に、特別に許されて打ち鍛えられた御太刀なのです。

＊　＊　＊

日方宮司奉仕の若宮神社には、もう一振り見事な隈部刀匠奉納の豪刀がありました。

昭和十三年、刀匠として独立後始めて打ち鍛え、新作日本刀展第七席の栄誉に輝いた重厚幅広猪首の剛刀です。銘文から音に聞こえた栄誉の作であることが判りました。

そして表裏に振り分けて、「奉・納」と追刻してあります。

私の感激は更に重なり、昂ぶる胸の震えは治まりません。同行の長男も解っているようです。…神の実在、その証を目の当たりにして静かに堪えておりました。

＊　＊　＊

つい三日前の六月二十二日、研師を始め各職方の協力で最上の仕上げを得、全てが修復なったこの『徴古館開館百周年記念展』出展の二振りの御神刀は、一旦、それぞれの神社に納まりました。…そして九月には、神宮徴古館へと旅立つのです。

＊　＊　＊

明治天皇御製

目にみえぬ神の心にかよふこそ　人の心のまことなりけれ

『誠は天の道なり、これを誠ならしむるは人の道なり』ご静聴有難うございました。

（熊本県 本渡諏訪神社 宮司）

ビジネス社会を生き抜くヒント

鈴木哲司

本日は、ようこそお参りくださいました。ただいま御神前に於きまして大神様に事業繁栄の御祈願をお取次ぎさせていただきました。

さて、少しお時間を頂戴いたしましてお話しをさせていただきたいと思います。

皆さま世界の三大宗教をご存知でしょうか?キリスト教、仏教、イスラム教です。

キリスト教は、イエス＝キリストを神として崇め聖書を拠り所として信仰生活が営まれています。

仏教は、お釈迦様を教祖として自らの煩悩を消滅させ悟りの境地に近づくように修行します。生前釈迦が説いた経典が多数存在しています。インドで教えの花を咲かせ世界中に広まりました。

イスラム教は、預言者マホメットが唯一神アッラーから啓示を受けて、教典であるコーランを信仰生活の基盤として、朝夕の決められた時間に決められた方角に向けて祈りを

ささげ、また厳しい戒律が存在します。

そこで、わが国の民族宗教である神道については、皆さまご存知でしょうか？

神道には、教祖・教典・教義が存在しません。自然そのものが神様であり日本人の生活そのものが神道の実践であり、あえて言葉化する必要がなかったのです。

明治神宮の外山名誉宮司は、神道とは何か、について端的に「命の宗教」であると述べられております。古来より、森羅万象あらゆるものに「命」を見出し「命」こそが「神」であると感得したのが日本人であったわけです。木の神、水の神、土の神、風の神、火の神、海の神など自然の恵みなくして我々の尊い命を、保ち永らえることは決してできません。自然は、偉大なるものです。

自然には常に畏敬の念を抱き、恐れ多いという姿勢で臨む必要があるのではないでしょうか。登山家が山を征服しようなどという思いで登山し遭難する事故が後を絶ちません。自然現象に眼を向けますと、我々の周りにたくさんの御教えを神様は示しておられます。二つばかりお話をさせていただきます。

一つめのお話です。漁師が沖合でとったナマコを生きたまま港に持ち帰りたいが、港に着いたときには皆死んでしまっていることが多いそうです。

そこで、どうしたかと言うとナマコを入れた水槽にカニを入れるそうです。なぜ、そんなことをするのでしょうか?

実はカニはナマコの天敵なのです。ナマコはカニが水槽に入ってきたことで臨戦態勢に入ります。

「おい!ナマコのみんな、天敵が来たぞ!気をつけろ!」

「カニの野郎共なんかに喰われてたまるか!」

その緊張がナマコの生命力を上げて、生きたまま港に持ち帰ることができるそうです。

これこそが自然の神様からのメッセージであり、これはそのまま個人や企業のビジネスにあてはめることができます。ライバルの存在によって緊張感や危機感を感じますが、それは自らを高めるために必要な感情です。ライバルがいるからこそモチベーションが高まり、加速度的に成長させてくれます。

企業もライバルと競争することで、よりよい商品、サービスを社会に提供することができ、その結果として事業繁栄を続けることが可能になります。そのように考えると「天敵」や「ライバル」ほどありがたい存在はありません。

二つめのお話は、「窮鼠猫を噛む」という諺があります。

追い詰められ居直ったネズミは、超越した力を発揮して猫に立ち向かうと言います。実際、ネズミは強力な前歯を持っていて、硬い壁にも穴を開ける力があります。コンクリートでさえも砕く強力な歯で噛み付かれたら、猫もたまったものではありません。他の例では、シマウマだって、ライオンに簡単に食べられている訳ではありません。時には勇敢に闘い、ライオンを退散させることもあります。しかし、すべてのネズミが立ち向かうわけではなく、あきらめて猫にやられるネズミもいます。

皆さんは、会社で追い詰められた時、普通に考えれば無理なことにでも立ち向かえるでしょうか？立ち向かうためにまず大事なのが、自分の置かれた現状をありのまま受け入れ、その意味を考えるのです。神様は、いま自分に起きた問題について何を教えてくださります。このことでどのように成長することができるのだろうかと考え抜く必要があります。

我々人間の場合は、開き直って無我夢中でやればいいというものではありません。窮鼠が強力な前歯を持っているように、皆さまもその問題を解決するための前歯をお持ちのはずです。さて、皆さんの前歯は何でしょうか？

厳しい局面に立たされたときに、自分にとっての強力な前歯は何かを日頃考えておき

ましょう。めまぐるしく変貌するビジネス社会を生き抜く社員の皆さまには、常に身の周りで起きることにいたずらにただ流されるのではなく、その事象に対し謙虚に心の眼を開き分析してみてください。そこには、必ず神様からのメッセージや意味が込められ、それを読み解けるはずです。

本日、神様から学ばせていただいた事柄をぜひ事業繁栄の活力やビジネス社会を生き抜くヒントにしていただければ幸いです。

最後に、神様への日々の祈りをぜひ忘れずに実践し楽しくお過ごしいただきたいと思います。また、ぜひ熊野神社にご参拝ください。皆さまのご参拝を心よりお待ち申し上げております。

（東京都　熊野神社　禰宜）

武田流流鏑馬神事について

大関光佐雄

私は神職の傍ら、約二十年ほど武田流流鏑馬の射手として、寒川神社を始め明治神宮・鶴岡八幡宮・三嶋大社等での流鏑馬神事に奉仕してまいりました。全国各地に様々な形で伝承されておりますこの流鏑馬も、流儀として確立されましたのは武田流が始まりで、その土地柄や伝承の過程で変化したものなど、伝統武芸を後世に残そうとしたその時代の人々の努力によって様々な形で現在に伝わっているようです。

今日は、その流鏑馬の起源と変遷等について話をさせて頂きます。

流鏑馬の始まりは、約一四〇〇年前欽明天皇の御代、当時大和朝廷は神功皇后の働きにより朝鮮半島の三国、新羅（辰韓）・任那（弁韓）・百済（馬韓）を治めておりましたが、欽明天皇の御代、突如百済が反乱を興し他の二ヶ国に攻め入り、その戦況不利な状況が朝廷にも伝えられます。此れに心を痛めた欽明天皇が再びこの三国を平定するに当たり、神功皇后と応神天皇の二柱を豊後国・宇佐の地（現在の宇佐神宮）に祀って、天下平定・五

穀豊穣を祈願し、神前に於いて馬上よりこの三国に見立てた三つの的を、射さしめたのが『矢馳馬』の起源とされています。

その後、日本書紀に拠りますと天武天皇は、神事としての流鏑馬の振興に力を入れ、六八〇年九月の条に「馬を長柄社に看す。乃ち馬的射させたまう」と見受けられ、この『馬的射』が流鏑馬の神事としての原型を為すものとされました。当初は『やばせめ』とも呼ばれておりましたが、次第に訛って『やぶさめ』となり、その語句も《馬に乗って鏑矢を射流す》という事から現在の『流鏑馬』という字が当てられるようになりました。

奈良時代に入り、流鏑馬は盛んになり全国的な拡がりを見せ、特に良馬の産地信州や奥州で盛んに披露されたようです。現在でも盛岡では、「南部流鏑馬会」という会が継承して奉納しております。

平安時代に入りますと、第五十六代清和天皇は、御自ら射手となって流鏑馬の奉納に参加されたと伝えられ、貴族の間でも宮廷内行事として盛んに行われたそうです。天皇御自ら流鏑馬をされるという事など、今では到底考えられないとても危険な行為ですが、当時は流鏑馬をすることがとても栄誉な事だったのではないでしょうか。確かに明治天皇や昭和天皇も乗馬を得意とされておりましたが、馬上で手綱を放すことなどとても許されなか

ったことかと思われます。私も習い始めの頃は、何度も落馬致しましたし、気がついた時には病院のベッドの上だった、ということもありました。一見、華やかで勇壮に見える流鏑馬ですが、それを会得し初陣するまでには、数々の危険が伴うものでもあり覚悟を決めなければ出来ないものです。

さて話を戻しまして、西暦八九六年、第五十九代宇多天皇は、時の右大臣源能有（よしあり）に命じて「弓馬の礼法」なるものを制定させ、能有はこれを貞純親王に継承せしめ、その後源経基・満仲・頼信・頼義を経て八幡太郎義家へと源氏が相伝することになります。その後、甲斐源氏の始祖であり義家の弟、森羅三郎義光へと伝承されます。こうして流派は、甲斐源氏一統に相伝され武田家の氏祖武田太郎信義がこれを受けて、武田流流鏑馬として形成されていきます。また、太郎信義の弟加賀美次郎遠光も父から指導を受け、これを遠光の次男小笠原長清へ継承することで、武田流と別れて小笠原流流鏑馬がここで形成され、鎌倉時代初期に二大流派として継承されていきます。笠間稲荷神社や日光東照宮等では、現在でも毎年小笠原流流鏑馬が奉納されております。

鎌倉時代に入りますと更に流鏑馬が盛んになり、「吾妻鏡」の記録によれば、源頼朝は、西行法師に流鏑馬神事の教えを乞い、一一八七年八月十五日、鶴岡八幡宮にて流鏑馬を奉

納し、以来武田・小笠原両家が鎌倉政権確立に大きな功績を収めたことにより、四十七回もの流鏑馬神事が幕府の手によって行われてきました。これが始まりとなり、今でも鶴岡八幡宮では、春の鎌倉祭りには武田流で、秋の例祭には小笠原流でと年二回流鏑馬神事が奉納されております。

武田家は、その後室町時代に山梨の甲斐・広島の安芸・福井の若狭の守護家として分流し、やがて甲斐武田家十九代武田晴信こと武田信玄を最後に、流鏑馬の流儀は若狭と安芸の武田家に相伝されます。しかしその若狭と安芸の武田もやがて滅びて行きますが、最後となった安芸の武田家は滅亡後、熊本の細川氏の庇護を受け細川幽斎が流鏑馬の礼法を相伝し、細川家門外不出の秘伝として阿蘇宮司家の竹原惟成（これしげ）に伝授します。阿蘇家は九州に強大な勢力を有していた為、豊臣秀吉により滅ぼされますが、幼児だった惟成は家老の竹原氏にかくまわれ、細川氏に庇護されて弓馬礼法に精進しながら成長し、やがて細川幽斎が七十七歳で没する年に武田流弓馬の礼法を伝授されます。その後、竹原氏が九代に亘って継承し明治二十八年、これまでの宗家世襲制でなく、優れた門弟に継承されるようになり、熊本藩士井上平太居元（おきもと）が第三十三代武田流継承者となります。

この井上平太という人物は、人斬り名人と言われる程の伯耆流の達人で、新撰組の四人

を相手に立ち向かい、一人を倒して退散させた程の腕前の持ち主であり、明治維新の動乱期に小倉・京都・会津戦争を歴戦した勇士でもあります。その井上も、昭和八年八十六歳で他界し、その遺命により翌年の昭和九年、時の高弟であった金子有鄰氏が第三十四代を継承し、鎌倉に居を構え明治神宮をはじめ鎌倉宮・恵林寺など、多くの神社やゆかりの地において神事として奉納されました。

昭和五十五年、九十四歳で金子有鄰氏が逝去した後、その四男金子家教氏が第三十五代武田流弓馬軍礼故実司家を継承し、神事奉納ばかりでなく「七人の侍」や「影武者」等の映画の出演俳優に弓馬術の指導や自らも出演するなど、また、三嶋大社や賀茂別雷（かもわけいかづち）神社などでの神事再興やドイツ・フランス・ブラジルなど海外でも伝統武芸を紹介するなど各方面に亘って流鏑馬の普及に努められました。私どもの師匠でもありますが、残念ながら本年一月、八十七歳で永眠いたしました。

以上、流鏑馬の変遷ということで話しをさせて頂きましたが、伝統を絶やさず守るということは、神職を職業とする我々にとってもその使命は同じくするところであり、その努力は並大抵の事ではないことと思います。今の話の中では、継承者だけを取り上げてまいりましたが、それ以外にもその時代時代に関わった射手や門人も少なからず、その伝承に

心血を注いできたことと思います。そしてこの流鏑馬が、一四〇〇年間途絶えなかった大きな理由の一つには、神事として色濃く神社に関わってきた事が挙げられるのではないでしょうか。

今後も後世に伝えるべき伝統武芸を、私もその一員として守り続けていく所存です。皆様にも、それぞれ後世に守り伝えなければならない大切なものが、たくさんあろうかと思います。是非、その為には力を惜しまず絶やさぬよう努めて頂ければと切に願います。

（神奈川県　寒川神社　権禰宜）

正直は一生の宝

瀧森　好

私たちにとって、人生を考えるとき「しなければならない」ことの多さに改めて気付かされます。日々の生活の中で、「朝早く起きて仕事に行かなければならない、家の掃除や食事の支度をしなければならない、学校に行って勉強しなければならない。」数え切れないほどの「しなければならない」ことがあります。

私たちは、これらのことをすべて義務として果たすものであると感じ、それぞれの立場によって「しなければならない」こととして理解していると思います。また、そのことによって、重圧感や精神的緊張を強いられることもしばしばあります。しかし、今の社会を見ますと、この「しなければならない」ことをしていない人たちも多くいます。

「しなければならない」こととは、私たちが選択して決めたことです。そのことの何れもしなくても良いという選択もあります。しかし、選択したのは私たち自身であり、すべての責任は自分にあるということです。

ここで重要なことは、そのことを「正直」に受けとめ、自分の本質を見失うことなく、本来そなわっている「清らかで、明るく、正しい、素直な心」で日々暮らすことが、如何に大切であるかということです。

神道では、古来より「浄明正直」ということを生活の基本としてきました。それは、この世に生をうけたときから最も重要な特質として、すべての日本人にそなわっているものです。

私たちは成長し大人になるにつれて、本来もっている純粋なものを少しずつ失ってしまっていると思いがちです。しかし、本質を失うことは決してないと思います。概念や観念によって本質が包み隠されたり、見失ったりすることはあっても、無くなることは絶対にないと思います。

たとえば、神社の鳥居はいつも開かれていて、そこからすべての人が自由に入ることができます。そして、そこから清浄の世界がはじまります。手水を取り、玉砂利を踏み、清められながら本殿に近づき、心を高め、偽りの無い心で神様に手を合わせます。そこには、神様に対する尊敬の念があり、人が本来もっている「正直」な心があります。

日本人の清浄に対する考えは、決して表面的なものではなく、それぞれの魂の中に存在

していると思います。その心の深くにある大切なものを理解できない人も多くいます。そして、「浄明正直」なる心が、雲で覆われているのが今の社会ではないかと思います。「正直」に生きるとは、務めを果たし、責任を負うということです。私は今の日本人の多くが失ってきたものが、この「直き、正しき」真心という「正直」な心ではないかと思います。

人の気持ちとは移ろいやすく、萎えるときもあります。それを意識し、とどめる訓練も必要ですし、教育も必要であると思います。

皇位継承のみしるしとして「三種の神器」（八咫鏡、天叢雲剣、八坂瓊曲玉）がございます。伊勢の皇大神宮（内宮）の御神体であります八咫鏡は、曇りなき心、「正直」のしるし、ともいわれます。この鏡には現実を認識する力があります。私心なく、常に清らかで、曇りない状態にありますから、真実がうつし出されるものだともいわれます。

「正直」とは、人が人として生きるための最も大切な徳目であり、人間関係のあらゆる不幸を無くする根源的なものであると思います。常に正直者が幸せになる世の中でなければ国の繁栄は望めません。そして、「正直」に生きるという認識がなければ、人に対するいたわりや思いやりも生まれてこないと思います。人というのは、そういう人に魅力を感

じ、惹かれるものです。

そして、「正直」であることを誰よりも大切に思い、心を尽くされておられるのが天皇陛下であると私は確信しております。私たちが天皇陛下に恋闕（恋い焦がれ、お慕い申し上げる）の情をいだくのは、その海よりも深く、空よりも広い大きな御心にあると思います。天皇陛下がまったく無私のお方であり、誰よりも「正直」なお方であることを多くの方々に知っていただきたいのです。

この御即位二十年の佳節の年に、私たちはあらためて、皇祖天照大神の御心を体して、日々常々を誠をもってお過ごしになられておられる天皇陛下の御心を心とし、かつての日本人の多くがもっていた価値観が清く正しく生きることであったように、「正直」であることが人間にとって最大の宝であることを認識して、皆様とともに生きて参りたいと思います。

（神奈川県　鶴岡八幡宮　権禰宜）

日本人のしきたり

西村純子

一昨年（平成十九年）、『日本人のしきたり』という、日本の四季を重んじ、人生の節目、節目を大切にする、いまに残しておきたい伝統の原点をさぐる本が、青春出版社より発行されました。飯倉晴武先生の本で、大変良い機会だと私は思い、今年はその中の『日本人の数のしきたり』を取り上げお話ししてみたいと思います。

常日頃から何気なく使っている「数」は、単に数量を表す言葉としてだけでなく、伝統に基づいた意味が込められていることがあります。

たとえば畳一帖の「一帖」は、かつての日本の成人男子が横臥して寝られる広さを基準に決められているようで、その畳を二つ合わせると「一坪」ですが、これも成人男子が生きていくのに必要な、一日分の稲が取れる耕地の広さが目安になっているといわれます。どちらも、その後の日本人の体格の変化や、生産技術の向上などで、実情は大きく変わってしまっていますが。

また、日本は言葉に霊魂が宿ると考える「言霊」の国で、その音や意味から「二」や「四」を忌み嫌う傾向があり、現代でもご祝儀袋には、「二」で割り切れる枚数の札を入れるのを避けますし、病院では、たとえ四階であったとしても、「四〇一」など四のつく病室表示はしません。「二」や「四」など偶数を忌み嫌う根底には、言霊信仰だけでなく、古代中国から伝えられた陰陽思想の影響もあります。陰陽思想では偶数は陰の数とされ、縁起が悪いと考えられていたからです。

反対に「三」「五」「七」の奇数は陽数として縁起が良い数とされ、お祝いの席に用いられます。わかりやすい例として、二月二日や四月四日、六月六日など偶数が重なる日は、特別な日ではないのに、一月一日はもとより、三月三日（桃の節句＝雛祭り）、五月五日（端午の節句＝こどもの日）、七月七日（七夕の節句＝七夕祭り）、九月九日（重陽の節句＝菊の節句）はすべて、お祝いの行事が執り行われる日です。

飯倉先生はそんな数にまつわる様々な日本人のしきたりを、その由来と共に紹介され、日常生活の中で接する「数」に込められた、日本人の知恵と伝統を感じとって頂きたいと記されておられます。

「一」のしきたり

「一」は、物事のいちばん初めの数です。昔から「一」は最もすぐれたものを表す数と考えられてきました。日本の生活文化に大きな影響を与えてきた中国の陰陽思想では、神・超越者・中心など、聖なる数として崇められてたようです。また太陽と月、男性と女性、昼と夜など、この世を形づくるあらゆる物事を陰と陽という対で考えてきたようです。

まず、一月一日は掃除をしてはいけない理由は、「一年の計は元旦にあり」として年の最初の日から活発に活動する人がいますが、このことわざの意味は、「物事を始めるときは最初が肝心。きちんと初めに計画を立てましょう」「その年にやろうと思っていることは元日に計画するのがよい」というもので、元日から忙しく動き回るものではないと言う事です。昔は大晦日に大掃除をすませ、元日には掃除をしてはいけないと言われていました。元日に掃除をすると福を掃き出してしまうことにつながると考えられていたからです。

特に商家では、大晦日は夜遅くまで客が来るので寝ないで過ごし、「年越しそば」を食べ、そのまま新年を迎えておせち料理を食べるのが一般的だったようです。そのため掃除は大晦日に終わらせていたわけです。このしきたりには、毎日忙しく働く家庭の主婦への心配りがあるのかもしれません。「元日くらいはゆっくり骨休めしなさい」という労いが込められていたのではないでしょうか。慌ただしい現代でも、せめて正月くらいはのんび

りとしたいものです。

「年末の一夜飾りは縁起が悪い」と言われます。正月の飾りといえば、門松としめ縄です。一般的には門松は三本の竹を組んで松を合わせたもので、昔は松に限らず榊などの常緑樹が使われていました。正月に降臨する年神様への目印として、門口や玄関口の左右に一対立てるようになったと言われていますが、地域によっては床の間に飾ることもあるようです。しめ縄は玄関口や神棚に張ります。これも門松同様年神様を迎え入れるためのもので、神様が降臨されるのにふさわしい神聖な場所であることを示しています。これら正月の飾りつけは、年末に行いますが、十二月三十一日にするのは「一夜飾り」といわれて忌み嫌われています。年神様をお迎えする準備を前日に慌ただしく行うのは失礼にあたるからです。葬儀の飾りが一夜限りであることからも、縁起が悪いと考えられてきました。また、十二月二十九日に飾り付けをするのも「九（苦）に通じる」、この日に餅をつくのも「九（苦）餅」といって避けられてきました。

このように、日本の「数」には我が国の文化伝統を垣間見ることができるのです。

時間が参りました。つづきはまたの機会にいたしましょう。

（愛媛県　生名八幡神社　宮司）

現代の鎌倉武士であれ

當麻洋一

皆さん、本日は中学校のご卒業に際して、ようこそご参拝下さいました。この鎌倉の町で生まれ育ち、ともに学ばれた皆さんが、こうして揃って巣立ちの時を迎えられたことを、心からお慶び申し上げます。

皆さんは三年前の春の日に、誰もが少し大き目の制服に身を包み、心の中で期待と不安が交錯していることを隠せぬまま、それぞれ入学式に臨んだことでしょう。

三度の四季が過ぎようとする今、相模の海から吹き寄せる穏やかな春風に送られて羽ばたく皆さんは、実に堂々と、自信に満ちた表情をしています。一人ひとりのまなざしには強く・明るく・優しい力が宿っています。それは皆さんが、中学校での三年間を通じて、それぞれのこころの内にゆるぎ無い「自分自身」を作り上げることが出来た証に他なりません。

さて、皆さんの郷土・鎌倉は、八百年前に「中世」という新しい時代の扉が最初に開か

れた町です。その担い手であった鎌倉武士たちの力の源は、飾り立てず実際的であることを尊ぶ「質実剛健」の気風や、うそ・偽りなど卑怯な行いによって利を得ることを卑しむ「名こそ惜しけれ」といった誇り高い心意気でした。また、彼らは親から子へと受け継がれる領地と自らの正義や真心を守るためには、尊い命を投げ出すこともいといませんでした。この気高く勇ましい生き方を「一所懸命」と云い表したのです。

これらの新しい精神は、それまでの貴族社会にはない新鮮な心のあり方でしたが、その後、長い時の中を受け継がれ磨かれて、「正直」「誠実」「勤勉」といった日本人の伝統的な価値観の根っことなり、遥か現代にも通じています。

このように伝統とは、単に古い物が形を変えずに残されたのではなく、その時代時代の人々が、新鮮な心持ちで新しい物事に挑戦し、困難を克服しながら発展させ、次の時代へ、そのまた次の時代へと引継ぎ続けたその積み重ねなのです。

皆さんが人生の中で最も多感な季節を過ごしたこの町は、豊かで明るい自然に恵まれているだけではなく、文化の香り漂う町並みの中に多くの史跡が残り、まさに伝統の成り立ちを語る歴史のぬくもりが、日常の中に息づく所であった事を、思い出深い日々の情景とともに、是非心に刻んで欲しいと思います。

今、皆さんは、これから一歩を踏み出そうとする新しい世界に、大いなる夢と希望を描いていることでしょう。しかし同時に、現代社会には、人の尊厳を踏みにじる暴力や真心を裏切る不正義が横行している現実のあることを、日々のニュースや時には身近な出来事を通じて、皆さんは冷静に知っているはずです。

その現実を「仕方のないこと」として受け入れるのか、若々しいエネルギーで跳ね返し、よりよき方向へと正すのか、選択は何れ皆さんが自分自身で行うことになります。それは決して遠い将来の話ではありません。ほんのあと数年で皆さんは成人し、この社会の意思決定に直接参加する日を迎えるのです。

しかし、皆さんは臆することなく人として正しい選択をされるだろうと私は信じます。なぜなら、皆さんは中学校で、先生方や友達との真剣な心のやりとりを通して、人が人として幸せに生きるためには何が大切なのかを、しっかりと学んでいるからです。

それは人の痛みを自らの痛みとして感じ取れる思いやりであり、過ちを謙虚に受け止めてこれを正す勇気であり、周囲の人々を助け、また自らも助けられることへの感謝です。そして、自分達が生まれ育ったこの国と郷土を愛し、周囲の人々と社会のために尽くすことの大切さもしっかりと理解しています。

皆さんは八百年前の鎌倉武士たちが吸ったであろう、その同じ海の息吹を胸に満たして心を育みました。誇り高き気風と心意気の正当なる継承者として、逆風の中にあってこそ顔を真っ直ぐ前に向けて、この国に新しい伝統を築く担い手となって下さい。時代の不幸を嘆くのではなく、時代の希望を開くことが、今を生きる皆さんや私たちの歴史に対する責任なのです。

鎌倉武士たちも、今日の皆さんと同じように、この八幡さまをこころの拠り所として祈りを捧げ、勇んで困難な戦いの庭へと旅立って行きました。強き風に怯まず、高き浪を恐れず、自らの可能性を信じ、「現代の鎌倉武士」として弛み無く前進する皆さんを、八幡さまと鎌倉の町が、いつまでもどこまでも、温かく見守り続けて下さることでしょう。その前途が輝かしきものであるようにと心から念じて、新らたな門出に寄せる私からのはなむけと致します。

本日は本当におめでとうございます。そしてよくご参拝下さいました。

（神奈川県　鶴岡八幡宮　権禰宜）

私の使命

中道豪一

本日はようこそお参り下さいました。私ども神主が抱える使命の一つに、心の大切さを伝えることがあると思いますので、こうして教員の先生方と御縁を頂けたことを非常に嬉しく思います。さて先刻、境内でお話した際「神主さん、うちの学校は英語に力を入れとるけぇ。もう神道とか神社は全然教えられんよ」というお話を窺いました。いやいや、先生方も全くもって大変な毎日をお過ごしのことと、お察し申し上げます。しかし！しかしです。私ごとで恐縮なのですが、現在私は、英語に重点を置いた学校で、実際に神道を教えるプログラムを運営させて頂いております。つまり「やりかた次第では、学校でも神道が教えられるんですのぅ」ということでして、今日のこの話を何らかのお土産にして頂ければ嬉しゅうございます。

みなさまは「天は自ら助くる者を助く」という言葉を一度は耳にされたことがあるので

はないでしょうか?内容が日本的ですが、実はサミュエル・スマイルズという外国人の言葉なのです。この言葉は、彼の書いた『自助論』に書いてあるのですが…「えっ?そんな本、聞いたことがない?」確かに聞きなれない名前かもしれませんね。しかしこの本、福沢諭吉の『学問のすすめ』と並ぶベストセラーだったそうです。だから明治に生きたご先祖さまも、福沢諭吉も読んだ本かも知れません。

さてサミュエルは、天は自分から努力しようとする者を助けるといっているわけですが、自分から努力するとは、どんなことをすれば良いのでしょうか?サミュエルは「思いという種をまかんと、行動は起こらんけぇのう。行動せんと、習慣も出来ゃあせんで!」と言っていますが、はてさて、なかなか我々にもシックリくる言葉ではありませんか。要するに、思い・心がしっかりしていないと何もできないということを言っているわけです。もうちょっと言うと、思いや心がしっかりしていないと、行動も習慣も曲がったものになると言っているのです。まあ、サミュエルは広島弁を使ってなかったと思いますが…。

江戸時代に藤原惺窩という偉い学者がおりましたが、この人も「日本の神道も我が心をただしうして、万民をあわれみ、慈悲をほどこすを極意とし…」(『千代もとぐさ』)と言っております。生まれや育ちは違えども、同じことを言っているではないですか!なんと

も深いものです。

さて、みなさま。広島にもそういった偉い人たちがいらっしゃったのをご存知ですか？サミュエルも藤原惺窩もビックリ！…するかどうかはわかりませんが、身近なところのお話を申し上げましょう。

サミュエルや惺窩は、「思い」や「心」が基本だと言うわけですが、古来より中国や日本では、心を学ぶ学問を心学と言います。その意味で言うと、心を修養する学問は、何でも心学なわけです。そうした心学の流れの中に、石田梅岩という京都の商人が、私達にもわかりやすく説いた石門心学というものがあります。石田の石という文字と、流派をしめす門をあわせて石門というのです。生活への応用をモットーにした方でして、この方が厳しく諫めたのが、文字にこだわり生活の役に立たない学問をする者「文字芸者」でした。

実はその石門心学が、江戸時代の終わりごろ、広島で盛んだったのですね。大手町や比治山あたりで教えていたそうです。特に広島の歓心舎というグループの賀屋忠恕さんとおっしゃる四代目リーダーの方ですが、その娘さん賀屋鎌子さんは、女性の神道講演家だったそうです。昭和二十三年には高松宮さまがいらっしゃって、荒廃した日本を復興するた

めには、心学を復興させねばいかんとお話までされています。有難い事ではありませんか。

さて、この心学ですが、何を言ったかといいますと、思い、心が大事だと言うのです。人には「性」というものがあって、世の中のものにも全部「性」がある。だから、世界は全部つながっているというわけです。なので人の心は、天地万物の源が、人に入ってできたものだと考えるわけです。神道風にいえば、みんな「みたま」が宿っているということです。針供養、お年玉、大国魂神社なんて名前を考えてみてください。心学の言うところと同じわけです。

心学が心・思いを大事にしないといかん、ということを言うのは、心は知らず知らず行いになり、習慣になっていくからです。まさにサミュエルや惺窩の言うことと重なりますが、これは大変です。「やれ息子が生意気じゃ、嫁が意地悪じゃ」などということも、顔に出さないでいるつもりでいても、ついプイと行いに出るということですから。

はてさて、こうすると山川草木に神が宿る神道というのも実に尊いものです。理屈ではなく、行いをするため、習慣をつくるために必要な根っこを示してくれるからです。石田梅岩も同じことを言っております。いやいや、心、思いをしっかりさせておくことが、大

事というのは時代や場所を越えて言われていることなのが良くわかるではありませんか。

心・思いのない人間はおりません。ですから一人一人の中から、これを引き出すのが大事というわけです。新しいものを付け加えるわけではない。ひきだすことを心学では発明とか言います。われわれの町、広島はそうした心を学び続けた町でした。そしてその思いが、知らず知らずのうちに出てしまう、その限界と恐ろしさを知った心学者たちが、今の皆様と同じように、素直に神様へ手を合わせ、祈りを捧げていたとは、胸にジンときます。

私の使命は、そんな歴史に埋もれたご先祖さまの働きを見直して、みなさまに伝えていくことです。「故道に　積もる木の葉を　かきわけて　天照神の　足跡をみん」という歌がありますが、これからも木の葉をかきわけ続けたいと思います。最後に、みなさまと、この歌を唱えて参りたいと思います。（一緒に唱える）本日はようこそお参り下さいました。

（広島県　長束神社　出仕）

神代（かみよ）の動物園へ

山本陽徳

私は一昨年、國學院大學の神道学専攻科で一年間学びまして、昨年の春から神社に奉職している若輩者でございます。それ以前は、一般の大学を卒業し、企業の研究所において研究職として務めておりました。その折々、大学時代の友人や会社の同僚に実家が神社であるという話をしますと、「神社とお寺の違いがわからない」、「神社に行っても解らないことだらけで、つまらない」など、一般の方の意見を伺う機会が多くありました。

祖父母と同居する時代ならいざ知らず、核家族での生活が現代の基本ですので、神社について教わる機会がそもそもなく、「敷居が高い」というイメージが先行しているようです。

そこで本日は、神様のお使いである様々な動物や、干支の十二支を通じて、神社への入口にある見えないハードルを少し下げてみようと思います。

十二支、と一言に言いますが、皆さん暗記していますでしょうか。スラスラと全部いえ

ますでしょうか。

まさか、と不安に思ってこの春に高等学校を卒業して当神社に奉仕を始めた十八・十九の若い巫女たちに聞いたところ、恥ずかしい話ですが、そのうち半分の人間が即答できませんでした。いくら指を折っても十二に届かないもの、ネコが混ざったり、キジが混ざったりするものもおりました。

ね、うし、とら、う、たつ、み、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、い。

言うまでもありませんがこれが正解です。

そこからさらに巫女たちに、「この十二支の中で、仲間はずれを一つ挙げなさい」、と質問をしてみました。この質問に、ある者は、「足のないヘビだ」と答え、またある者は「空を飛ぶトリだ」と答えました。

仲間はずれという表現よりも、特別な存在として挙げられるのは、唯一タツ、つまり龍ではないかと私は思います。なぜなら、それ以外十一匹は動物園などで見たことがあるのですが、未だに龍のいる動物園に御目にかかったことがないからです。

龍、と聞くと、頭にツノを持ち、体は固いウロコに覆われ、時に口から炎を吐き、雲の上空高くを飛びゆくイメージが、皆さんの脳裏にすぐに浮かぶと思います。雨や風、雲、

雷を自在に操り、空の高みや海の底、山の奥峰、清い水の流れるところに棲み、龍神様・水神様として日本各地に神様としてお祀りされている存在です。十二支のヘビも、龍の一族・眷属として数えられており、白ヘビを神様としてお祀りするお社もあるほどです。

古くは中国に始まるこの「龍神信仰・ヘビガミ信仰」は、ヘビを実際に見た人が、足のない生き物の不思議さやその賢さに触れることで産まれた信仰なのではないか、と考えられます。

龍やヘビというものは、東洋と西洋とでは、全く扱いが異なってしまいます。ギリシャの神話に出てくるメデューサという怪物は、髪の毛はヘビで、その目を見ると人を石に変えてしまう恐ろしい力をもった怪物です。また、キリスト教において、最初の人間・アダムとイブは、悪魔サタンの化身であるヘビにそそのかされて禁断の実を食べた結果、住んでいた楽園を追われてしまいます。龍についても、西洋の御伽噺では、必ずどこかの国の御姫様をさらっていって、最後に勇者に倒される悪の象徴として描かれています。

龍や蛇は、日本・中国・インドなど東洋では、龍神様・水神様としてまつられる存在である一方で、西洋に行けば行くほど、その毒や獰猛さ、賢さを捕らえて、悪魔や災いの象徴として神話に描かれる存在となっています。調べてみれば、他にも捉え方の違う動物が

いるかもしれません。

水神様と一言に言いますが、ミヅハノメノカミ（罔象女神）様というお名前でよばれる水神様もいらっしゃいます。ミヅハノメノカミ様には、名前にゾウという漢字が入っています。ゾウというと、私はすぐに鼻から吸い上げた水を使って水浴びしている姿が思い浮かびました。神社の社殿や手水舎の柱をよく見てみれば、鼻の長いゾウの彫刻がみつかるはずです。御社はそのほとんどが木で出来ているわけですから、火事などの火の災害をよけるマジナイとして彫られているわけです。

同じ水神様のお使いとして描かれるのが、亀になります。水を司るだけでなく、「鶴は千年、亀は万年」と言うように、その堅固な姿カタチから健康長寿の象徴とも捉えられています。私の奉仕します千葉神社にも、亀の姿を模した「亀岩」というものがございます。特に高齢の方々は参詣の際に必ず亀岩に触れ、健康と長寿を願ってゆかれます。

また、千葉神社にお祀りされる神様は、古くから氏子の皆さんから「妙見さま」と呼ばれております。妙見様は、正式なお名前を北辰妙見尊星王さまと申します。漢字で書くと、北辰は方角の北に、干支のタツ、摩訶不思議を意味する「妙」、目が見えるの「見」、尊星王は尊い星の王様となります。古事記の冒頭に記されております、天之御中主神さまと

同じ神様であるとされております。

妙見様の御姿は、天の星々の中心、動かない星である北極星であると伝えられています。また、妙見様が車に乗って天を巡る御姿が北斗七星であるとも伝えられております。

人の御姿になって現れる際には、甲冑を着けて剣を携え、玄武に乗り、白蛇を従えていると伝えられています。玄武は北の方角を守護する聖獣であり、尻尾だけヘビに変わった大きな亀の姿をしています。

お気づきになったでしょうか。お名前に干支の「辰」の一文字が入っております。なぜなら、妙見様は龍の御姿にもなりうると伝えられているからです。古代の人には、北斗七星の七つの星が、天かける龍の姿に見えたのでしょうか。

水にちなんだ神さま・お使いだけでも、今日ご紹介した以外にもいらっしゃいます。またお稲荷様の狐や、熊野さんのカラスなど神様のお使いには様々な動物が定められています。古代の人々は自然の力・自然の驚異・自然の恵み・自然への恐れと言うものを、自然の中に住む動物や、空想上の動物に託して伝えたかったのではないでしょうか。

神社の敷居が高い、と感じる時には、まず試しに神社に足を運んでいただき、絵や彫刻に隠れている動物を探すことで、その神さまの御力を調べてみることから初めてみては如

何でしょうか。

（千葉県　千葉神社　禰宜）

捧げよう！大御心に感謝の誠を

渡邉知宣

今年は、天皇陛下御即位二十年の奉祝の年を迎えています。また、天皇皇后両陛下御結婚五十年の慶賀の年でもあります。このため現在、全国的にさまざまな奉祝行事が計画され進められています。

私もこの奉祝の年を迎え、七回目となる皇居勤労奉仕を計画いたしました。

御承知のように、この皇居の勤労奉仕は、敗戦直後の昭和二十年十二月に宮城県栗原郡の青年男女六十名が、空襲の爆撃で荒れ果てた皇居を清掃しょうと、親兄弟と水杯を交わし、アメリカの進駐軍が取り囲む中へと決死の覚悟で出かけたことに始まります。

その後、栗原郡からは、第二隊、第三隊、第四隊と続々と上京し、さらに日本全国から奉仕の申し出が殺到していきます。宮城県の青年たちの赤誠の心意気が敗戦後の国民を感動させて、戦後復興の原動力ともなりました。

をちこちの民のまゐきてうれしくぞ

宮居のうちに今日もまたあふ
戦にやぶれし後の今もなほ
民のよりきてここに草とる

昭和二十一年にお詠みになられた昭和天皇の御製です。陛下のお喜びの御心がにじみ出ています。

皇居の勤労奉仕は、決して行政や特別の組織から依頼があって行なっているのではありません。国民感情の赴くままに続いているのがこの皇居の勤労奉仕なのです。

私は疋野神社皇居勤労奉仕団を結成して、団長として今までに六回の奉仕を経験していますので、懐かしい思い出がたくさんあります。少しお話してみます。

毎回、神社の氏子崇敬者に呼びかけて、約四十数名・バス一台分の人数で奉仕に出かけています。

昭和五十八年、私が三十八歳の時に、神職として尊皇の気持ちを自ら昂めるとともに、人々に皇室敬慕の心を深めていただこうと計画したのが、御奉仕の一回目です。

この時は、御会釈を他の三団体の方々と同時に賜り、代表で万歳三唱の先導をさせていただきました。この時の感動感激を、大宰府天満宮での神道講演研修全国大会で発表させ

ていただきましたが、この発表はラジオで全国に放送されました。

昭和六十二年の第三回の時は、当時の皇太子殿下、現在の今上陛下より「以前にもお出でいただきましたね」とのお言葉を賜り、驚きました。たくさんの奉仕者の中で三回目の自分を記憶にとどめていただいていることに、本当に感激しました。

平成十年の第五回の時には、母と妻も一緒でした。

この時は御会釈の中で、母や妻と一緒に御奉仕とのことをお伝えすると「お母さまはどちらに?」との皇后陛下の御下問がありました。後ろの方から母がチョコチョコと前に出てきて、お話をさせていただいたことにも、突然の出来事でびっくり仰天でした。現在九十歳を過ぎた母の貴重な思い出となっています。

過去六回の御奉仕は、いずれも素晴らしいものでした。そして、私たち草莽の臣の尊皇の精神・皇室敬慕の心を後世に伝えるために、毎回参加者全員で神社の境内に勤労奉仕記念の石碑を奉納しています。

七回目の今回は、先に述べました昭和天皇の御製二首の記念碑を建碑すべく、現在宮内庁に申請中です。

次に、命をかけても勤労奉仕をしたいと国民が願うほどの我が国の皇室のことについて、

いま少しお話してみたいと思います。

御承知のように、日本の国の皇室には他の国の君主制に無い素晴らしい特徴があります。

一、日本は世界最古最長の君主国であると言うことです。

皇室は、第一代の神武天皇以来、今上陛下まで百二十五代を数え、君主の起源を神代の昔まで遡ることができる世界で唯一の国です。

現在、世界の君主国の中で、二位のデンマークが五十四代目、三位のイギリスが四十代目ですから、この二倍三倍以上もある日本の皇室が如何に長く続いているかがわかります。

二、日本は君主国の中で人口が世界最大の国です。我が国の国民の数は約一億三千万人ですが、二位の英国は約六千万人、三位のスペインは約四千万人です。このように日本は人口においても他の君主国の二倍三倍以上もある世界最大の君主国家であると言えます。

三、日本は敗戦後も君主制が存続し続けている国です。世界の歴史では、戦争に負けた国の体制は変わってしまうのが普通ですが、日本は現在もなお皇室を中心に世界有数の経済大国となって繁栄し続けています。

では、なぜこのような奇跡とでも言えるような皇室が日本の国に存在し続けているのでしょうか。

その理由は、天皇は国民を守り、国民は天皇をお守りするという建国以来の麗しい伝統にあると私は思っています。

歴代の天皇は国民をわが子のように慈しみ、その幸せを祈り続けてこられました。昭和天皇には、先の大戦でわが身を顧みず国民をお救い戴きました。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひ
いくさとめけり身はいかならむとも

の御製の通りです。

平成の御代を引き継がれた今上陛下もまた、国のために命を捧げられた多くの人々の慰霊に大御心を注ぎ続けてこられました。さらに、地震や津波などの災害に遭われた人々や身体の不自由な人々など、多くの恵まれない人々を励まし続けられ、平成の十五年間ですでに四十七すべての都道府県を御訪問されています。四百以上の市町村、移動距離十二万キロ、地球三周分に相当します。

人々の幸願ひつつ国の内
めぐりきたりて十五年経つ

平成十六年の歌会始にてお詠みになられた御製です。

このように、国民を御守いただく歴代の天皇陛下の大御心に対して国民は、皇居の勤労奉仕に見られるように、天皇陛下を敬慕し感謝の誠を捧げ続けています。

天皇は国民を守り、国民は天皇をお守りするという建国以来の麗しい伝統が、万世一系の天皇が百二十五代も続く最大唯一の理由であると思います。

国民の幸せをいつも祈り続けられている天皇陛下。

そして天皇陛下を国の象徴、国民統合の象徴と仰ぐ国民。

素晴らしい日本の国、永遠に栄えあれ！と願っています。

（熊本県　疋野神社　宮司）

平成の今

辰　守　弘

早いものでもう平成の御世も、数え二十一年となりました。神社界では、ご即位満二十年のお祝いを計画いたしております。

又ご結婚五十年、御大婚の年でもあります。先日、ご成婚当日の四月十日に、全国各地の神社で臨時の奉祝祭を斎行致しました。そういう意味でも、二重におめでたい訳で、大いにお祝い申し上げねばならないのですが、今日は内々の会でありますので、もう少し別の観点から皇室のこと日本のことを共に考えてみたいと思います。

はっきり申し上げまして、何と申しますか、心がすっきりしない、心が晴れ晴れとしないものがあるのであります。

それは、『みはしのさくら』の一節と、葦津珍彦先生が昭和天皇様ご在位六十年に際して書かれた文章が気にかかっているからであります。

今日は時間の関係で、神宮の少宮司をお勤めなられた幡掛正浩先生の『みはしのさくら』

（平成十二年、米寿に刊行）という文庫本の中の一節を考えてみます。私はほとんど幡掛先生とはご縁がありませんでしたので、勝手に先生と呼んでいるだけであります。そのような、勝手に幡掛先生などという言い方を、なれなれしくするなと言われるかもわかりません。（ご縁の深い佐古先生、どうでしょうか。）

その文庫本の中にですね、

お濠の向ふの現皇居は、嘗ての日の隠岐・佐渡と、今、遠いのであらうか、近いのであらうかーと。

とあります。どう解釈したらいいのでしょうか。

通常の距離の遠さを言っているのではないですよね。隠岐の島よりずっと皇居は近いですし、皇居前広場に行こうと思えばすぐ行けますし、そこで皇居に向かって頭を下げようと思えばすぐできます。それではどういう事を言っているのでしょうか。

陛下と我々国民の「心の距離」でしょうか。心の距離ならわからなくもありません。

親の心子知らずの如く、陛下の御心、いや、陛下の大御心、国民知らずと言うことを仰っているのかもわかりません。

昔より言われている、「君、君足らずとも、臣は臣たれ。臣、臣足らずとも、君は君た

れ」ということで、忠臣がいないと言うことでしょうか。

大御心が、国民の至らなさで病んでいるのに、我々国民が全然感じない状況を嘆いて、幡掛先生が申しているのかもわかりません。

平成という年号とは裏腹に、大御心が穏やかでないとするならば、然も改善する気配もないとするならば、やはり大問題であります。

よくよく考えなければなりません。

昭和天皇様がお隠れになられた節、お望みのことが改善することなく、昭和天皇様の願いの一つもかなえられなかった不忠をお詫び申し上げましたが、このまま推移すれば、恐ろしいことに、陛下二代にわたり不忠をなすことになってしまいます。

端的な例を申し上げますと、靖国神社の御親拝がかなえられておりません。各地の神社にはお出まし頂けるのに、靖国神社では実現されておりません。陛下となられてからのことです。

神社界は大賛成ですが、実力がなくその実現の露払いはなかなか成功に至ってません。もう一方の伝統宗教の雄、仏教界の大半は反対でありましょう。外圧もありますし、これでは難しいのかもわかりません。

それより何より御心配なのは、皇位継承の事でありましょう。我々国民以上に御心配でしょう。我々は微力ながら、大御心に応えるように今以上に努めていかないと大変な事になるのではないでしょうか。

内からとろけだしている日本。自己中心的（自己中）で、経済や大きな地球環境については考えても、我々の存立基盤の国家を考えなくなってきているという現実。

宮中祭祀廃止論を平然とぶち上げるふざけた学者が出てくるような現状では、天壌無窮の神勅が曇り、大御神の御神威が半減するのではなかろうかと思ってしまいます。神々の堪忍袋の緒も、切れそうになってきているのではないかと非常に心配です。

陛下は国民あげてお祝いしてくれる事に関して、お喜びであろうと存じます。然し、陛下の御憂念が晴れないと、心からのうれしさにつながらないのではないでしょうか。

皇祖に連なる陛下の願いが叶うように、御憂念が晴れますように、大御心を安んじ奉り、中今の民として、憂いを共にする忠臣として、心新たに祈り且つ祝い、そして責務を全うしてまいりましょう。

（愛知県　真清田神社　禰宜）

「至誠通神」の教えから

宮澤正夫

本日は例祭にむけての打合せ会です。皆様方にはお忙しい中お集りいただきました。ありがとうございます。連絡事項等は担当者が後程お伝えすることにして、私からは幾つかお願いごとや思うことを話します。まず初めに、例年この会でお話をしておりますことですが、今年も例祭が事故なく安全にそして賑々しく斎行できますことを念願いたします。そして、祭典に参加された皆様方から「今年もいい祭りができて良かった。これこそ伊奈のお祭りだ。」と言い合えるようご支援・ご協力をお願い致します。

ところで、昨今は世界的な経済不況がいろいろと報道されておりますが、先日テレビをつけましたら、アメリカの自動車業界のニュースで、会社が倒産するかアメリカ政府の支援を受ける必要があるのかを報道していました。そして、キャスターが「今の世の中では、会社が栄えること儲かることより会社を継続させて続けていくことの方が難しく価値あることだと認識が変わりつつあります。」と解説していました。

利益第一主義であったアメリカでさえも人々の意識が変わり、お金よりも大切な物があることに気づき始めたのです。その一つが継続していくことの値打ち「伝統」であると言えます。伝統と言えば、神宮の式年遷宮は二十年に一度執り行われており、今では千三百年の歴史をもつ素晴らしい伝統・財産を残しております。本社の祭禮も江戸時代から今の形態を受け継いでおり、祭で担ぐ神社神輿も木遣りとともに高く掲げられる獅子頭も二百年以上も前から大事に使われ修理しつつ現在に至っております。皆様方には本社の祭禮が、伝統あるものとして自負して参加していただきたいと思います。

さて、皆様に目にとめて欲しいことがあります。社務所の入口に額が掲げてありますが気づかれたでしょうか。『至誠通神』と書かれてあります。以前に明治神宮の宮司を務められた鷹司信輔先生の揮毫によるものです。至誠とは、まごころという意味で、まごころは神さまに通じるということですが、どのような願いや思いが込められてるのでしょうか。

よくキリスト教は愛を説き、仏教は慈愛を説くと言われますが、神道はこの至誠・まごころの宗教であります。明治神宮のご祭神であらされる明治天皇の御製に

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは　人の心のまことなりけり

めにみえぬ神のこころにかよふこそ　人の心のまことなりけれ

がございます。目に見ることのできない神さまは何時でも、どこでも自分の言動をご覧になっています。その神さまに対して恥ずかしくない心が清らかな正しい心境というものは、誠の心であり、それは私達にとって最も貴いものである、と詠われております。

誠の宗教と言われる神道ですが、その誠の具体的像が、清らかで明るく、正しくまっすぐな心なのです。皆さんも祝詞奏上の時に「浄く、明く、直く、正しき心」の言葉を聞くことがあると思います。それらことを表す言葉に「浄明正直」があります。よく神道には、教典がなく教えもないと思われる方もいらっしゃいますが、神道では、文字に記述された教えではなく、人それぞれの真心や良心を大切に致します。神道ではこの至誠（まごころ）が教えの基本になっていると言えます。社務所の入口に掲げてある額ですので、神道の入口（基本）は「至誠」であると覚えておくのも良いかもしれません。

あと数カ月で本社の例祭がやってきます。「まつり」の語源には様々な説がありますが、その一つに「待つ」があり、普段見ることのできない神さまが現れるのを待つとのことです。氏子の皆さん方が祭禮を待ち望んでいると同様に神さまも例祭の日を待っておられるようです。また、お祭りでは、神輿の渡御を通して、地域に神さまをお迎えすることによって御神徳を身近に感じていただくことができます。更に人と人とが睦みなごむ場や機会

であると言えます。人と人とが真に心を開いて睦みなごむことは、この複雑な現代社会においては、実現はなかなか難しいものがあります。しかし、お祭りの場では「浄明正直」の神さまの徳を戴いて、その御神徳に近づいた上でお祭りを通して人と人との睦みなごむ心の交流が実現できるのです。今日のような会合で、長く神社総代をされた野崎さんが「お祭りには、皆さん本気になって参加してください」と語り継いでおられました。まさしくその本気こそ今ここでお話致しました「至誠」かもしれません。

皆さん方には「至誠通神」の教えを胸に、今年の祭禮には本気で参加していただきたいと思います。

（東京都　岩走神社　宮司）

関東下り衆の神主

波多野學

第百二十五代今上陛下御即位満二十年、御成婚満五十年の佳節を寿ぎ、前中納言第二代水戸藩主源光圀公が、御国の為命を賭して『大日本史』を編纂された、この水戸の地で大会が開催されますことは、この上もない喜びであります。

波多野の姓は関東の秦野氏に由来し、八百年の時が流れました。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。おごれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

平家物語の冒頭であります。

巻の十一は「壇之浦合戦」です。第五十代桓武天皇様ゆかりの平家が、第五十六代清和天皇様ゆかりの源氏に破れます。安徳天皇様は御歳八才の齢で、御鏡・御剣共に「浪のしたにも都のさぶらうぞ」と、伊勢大神宮に「ちいさくうつくしき御手(おんて)をあはせ」入水(じゅすい)され

たのであります。今下関（赤間ヶ関）の水天門のある赤間神宮として祀られてゐます。

源氏方の村上水軍に対峙したのが、平家方の岡縣主の裔、筑前国遠賀郡の山鹿城主・山鹿透遠ですが、奮闘むなしく破れます。

平家の伊勢神宮への祈りに対し、源氏は八幡大神を守り神とします。源頼朝公は、平家追討の宣下を得て、関東の武士団を西国に下します。世に云ふ「関東下り衆」です。平家方の香月・原田・菊池・粥田氏は所領を没収され、神武天皇様東征に陪従した香月氏も、洞海湾に流れ込む割子川上流の畑の山奥でひつそりと暮らすこととなりますが、やがて下り衆宇都宮氏一統の千々和氏と縁を結び、千々和姓として、元の香月庄城主・杉守神社神主として、血を繋ぎます。北九州一帯は下り衆が統治することとなります。門司ヶ関の門司氏もやはり下り衆です。

波多野家文書には

建久五年（一一九四年）鎌倉右大将源頼朝の幕下、宇都宮上野介重業〔下野国宇都宮の人にて、下野上野（栃木県・群馬県）領主なり〕に采地を賜り、筑前国遠賀郡藤田村花尾山〔此所を麻生庄と云故に宇都宮を　改て麻生と云〕に城郭を築き、天正十五年（一五八七年）まで拾八代城主たりし

と書かれ『麻生文書』によれば、宇都宮朝綱二男家政が山鹿透遠ゆかりの山鹿姓を名のり、家政二男資時が建長元年（一二四九年）に、山鹿庄内の麻生庄・野面庄・上津役郷を分譲し、地頭代となり麻生姓として分家したと書かれ、宇都宮姓は山鹿姓・麻生姓と姓が代はり、この宇都宮氏と共に遠賀に下つた下り衆秦野氏の鶴千代に崗縣主忠経の娘を嫁がせ、娘婿の波多野姓として社稷を継がせ、崗縣主の血を繋いでゐます。

頼朝公より「下り衆として采地を賜る」と古文書には書かれてゐますが、何のゆかりもない平家方の敵地でありますから、領主になつたとは云ひながら、敵地を治めよ、と云ふことであります。領民の協力がなければ、国の統治は難しかつたのであります。

万葉集には山上憶良が

神代より言ひ傳て来らく　そらみつ倭の国は皇神の嚴しき国　言霊の幸はふ国と語りつぎ言ひ継ひけり　（巻五　八四九番）

と歌ひ、皇神のいつくしき国として

天地の神を祈りて幸矢貫　筑紫の島を指して行く吾は　（巻二〇　四三七四番）

と歌つた防人の心境に通ふものを感じます。平家が伊勢の大神様に、源氏は八幡大神様に祈りを捧げたやうに、日本人は神様に祈りを捧げる敬虔な民族です。領民も季節を通し

て神様のご加護を祈り、祭りと生活が一体となつてゐます。

源氏であれ、平家であれ、同じ日本人です。神様を敬ふ生活に変りはありません。年経るにつれ、源氏方の氏族は地縁の氏族と縁籍を結ばなければ、領民は納得しません。領地の国を栄へさせる手段（てだて）は、その土地の氏神様を大事にしなければ成り立ちません。源氏の氏族は、氏神様の神主として、姓を以て名をとり、平家の氏族は、源氏の氏族の名を以て血を繋ぎ、国を繁栄させたのであります。『高見大神宮御縁起』には

大宮司は宮と一木一躰にして運命を倶にするものなれば、一敗地に塗（まみ）ゆと雖も惑はず至誠結晶堅き事大磐（いは）の如し、此の魂魄（たましひ）は宮の基礎となり……神霊のたぐひなく、めでたくありがたき御徳光をもて、国中の人民御恩沢に浴し、太平の安きを楽しめることあふぎても猶あまりあり。まことにたれか敬神のこころざしなからんや。ふしてねがはくは、君のみよ安くさかへ給ひ、民しもにゆたかならんことをいのるのみ。

と書いてゐます。

氏を守り国を守り、下り衆の神主として、氏子の皆様と幾世代にも亘つて護り続けてきた神社を、如何なることがあらうとも、命を賭して守り抜く覚悟であります。

（福岡県　高見神社　宮司）

『夢の跡』からの眺め

小野道教

昨今、交通手段の発達や旅行会社による様々な商品開発等により観光旅行は盛んになっています。ただ単に、旅に出て自然のすばらしい景観を楽しみ、あるいは、珍しい文物等を発見する、これはこれで楽しいレクリエーションであると思います。しかし、それだけでは、日本人として何か物足りなさを感じるのではないでしょうか。昔は、日本人の持つ信仰心が人々を旅に誘いました。神様を拝み、身も心も祓い清め、精神の拠り所を確かめ、心の安らぎを得て、生きる希望と活力を見出しました。

俳人・松尾芭蕉が『奥の細道』の旅に出たのは、三二〇年前の元禄二年三月。冒頭「松島の月、まず心にかかりて」と記している通り、陸奥「松島」を始めとする各地の名勝や美景・史跡巡りへの思いは、事のほか強く、歌枕の地を訪れ、実際に、能因法師や西行の心に触れたい気持ちが、一層、旅心をかき立てました。元禄二年は折しも西行の五百年忌に当たり、この年、西行が二度も訪れた「平泉」の土を自ら踏む事は、芭蕉にとって、よ

り大きな意義を持ち、旅立つ時の心境は、古人を思い、古歌を思い、さぞかし心の震えるようであったと思います。ちなみに、旅行ガイド「ミシュラン・グリーン・ガイド・ジャポン」で最高峰の三つ星を得た東北の観光地は、いずれも芭蕉が訪れた「松島」・「平泉」そして「出羽羽黒山」です。これら三か所の共通点は「神聖さ」、言い換えれば、今もなお、「霊魂」を帯びている聖地であるという点です。そして、その霊魂を感じなければ、歌詠みとはいえないのではないでしょうか。芭蕉は、いわば聖地巡礼の覚悟で「白河の関」を越えたのです。

さて、芭蕉の鹽竈神社参拝は五月九日でした。現在の社殿は、仙台藩四代藩主伊達綱村公の造営計画により、元禄八年から建て替えが始められ、宝永元年に完成したものですが、芭蕉参拝当時の鹽竈神社は、寛文三年に整備が完了した社殿で、現在とは社殿の様子や配置が大きく違っていました。

参拝かたがた、鹽竈の神に「奥州平泉・藤原家」へのそれまでの御加護を感謝申し上げるとともに、源義経に対する忠誠を貫く事を誓い、文治三年に和泉三郎忠衡が寄進した鉄の「古き宝灯」を拝観した芭蕉は、五百年もの前に宝灯の扉に刻まれた文字から、「若くりりしい和泉三郎の姿が、今、目の前に浮かび上がるようである」と『奥の細道』に記し、

彼を「勇気ある忠孝の士」だと賞賛しました。和泉三郎は、藤原家の三代目藤原秀衡の三男です。秀衡は兄源頼朝に背いた義経をかくまって手厚く持て成しましたが、文治三年の秀衡の死後、四代目を継いだ藤原泰衡は、頼朝の圧力に屈し、文治五年に義経を攻めました。義経は必死に抵抗しましたが、最期は小高い丘にある「高館」に立てこもり、そこも、ついには「功名一時の叢」となりました。享年三十一歳。一方、泰衡の弟和泉三郎も義経に味方したという事で、兄に攻められ命を落としました。二十三歳の若さでした。芭蕉は、このような若武者の悲劇的な最期に深い哀惜の気持ちを抱く人でもあり、ことに義経については、三十一年の生涯そのものが、人の栄枯盛衰を最も劇的な形で表していると認めていました。

鹽竈神社参拝の後、芭蕉は五月十三日平泉へ出かけ、平泉に着くなり真っ先に高館に登りました。『奥の細道』の冒頭の句で「すべてのものは、同じ状態に止まる事なくどんどん変化していく」と詠んでいますが、この「無常」を身をもって示した義経最期の地に自ら踏み立った時、「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、杜甫の詩を思わず口ずさみながら、笠を打ち敷いて腰を下ろし、目の前の草の青に目を凝らし、昔を思って涙を落としました。そして、いにしえの栄枯盛衰に思いをはせ、かすかに残る霊魂に触れた

その時、芭蕉の感動は最高潮に達し、日本文学史上の最高傑作の一つといわれる「夏草や　兵どもが　夢の跡」の句を生み出しました。三代の栄耀一睡の中にして、今は「田野」となっている場所に実際に立ってみて、芭蕉は改めて「無常」を実感しました。盛んなものもいつかは滅びる時が来る、それが万物の定めなのだ、と詠んだのです。だからこそ、「人は、日々、力の限り生きる」事が大切になります。

芭蕉にとっての旅とは、第一には、古社詣でを通し、すばらしい神様の威光に接して神の力の大きさや深さを知り、一方では、風雅を愛した人々が歩いた地を実際に訪ね、景色はもちろん、そこに住む人々の声や営みを見聞きし肌で感じ、古人の感動を自分のものとして受け止める事でした。そして、これら旅先での実体験こそが、芭蕉の文学を高めていったのです。第二に、芭蕉の旅とは、一歩一歩身を運んでいく修行でもありました。「夏草や」の句からもわかる通り、実際に多くの地を訪ね歩き、時には強張りのない安堵の中に解き放たれ、同時にかすかに残る霊魂を感じ取る旅であったと考えます。

芭蕉の「旅ねして　我句をしれや　秋の風」の句は、行脚とでもいうべき良い旅の中で生まれた句を、実際に旅をする事を通して感じ取ってほしいとの願いを込めた句です。旅をする時は、身も心も祓い清め、自分の足で歩き時間を掛け全身で感じ取るよう心がけて

みてはいかがでしょう。そうすれば、在り来たりですが、身も心もいやされ、芭蕉が味わったような旅の充実感を体感できるのではないでしょうか。

（宮城県　志波彦神社鹽竈神社　権禰宜）

護国神社の現状と対策

滑川　久美雄

茨城県水戸市見川に昭和十六年に創建されました茨城県護国神社は水戸では、桜の名所と言われております「桜山」の一角に鎮座いたしております。御祭神は茨城県より出征され戦地、又は内地にて戦没された六三、四九四柱の大神様をお祀り申し上げております。

戦後何も無い時代に残された遺族は食べ物も満足に口にすることが出来ない中、幼い子供のために寝る間も惜しんで働き続け、万に一でも戦地から帰って来るだろうとの願いを胸に戦後を生き抜いてきました。

そして六十数年の月日が流れ、現在では妻の立場の方が遺族の一割にも満たない今、子や孫の参拝も年々減少し、中には「護国神社で祈祷してもらわなくても近くのお寺でお参りしてますから」と手紙や電話が近年増えています。

私が奉職した昭和五十八年には遺族会の組織も構成人員、財源力も強固なるものがあり、祭典、清掃奉仕、研修旅行等にあっても妻の立場の方の協力が得られ、まだまだ神社護持

運営も容易と思われていました。そんな時期の総代会の席上、「護国神社の今後を考えると一般の神社と同じように遺族に頼ることと同時に一般崇敬者に神社を知ってもらい参拝をしていただける対策をしていくことも必要ではないか」との提案に「水戸には一杯神社が有るのだから外に任せて、護国神社は遺族が護っていく神社です」との強い意見に押されて最近まで何もしないで慰霊の祭典だけを奉仕してまいりました。

ところが、遺族の高齢化や代替わりで毎年参拝の遺族数が激減し存続が危ぶまれてきた時に禰宜、宮司の退任、新宮司の就任と変動の時期を迎える事となりました。

現宮司は「この神社は絶対に良くなる」と口癖の様に言い続け、職員の意識改革から始めたのです。とは言っても何をしても直ぐには期待通りの成果が現れる筈もなく、只々「良くなる」を合言葉に走って来ました。まず手始めに鬱そうとした境内の樹木の伐採、神社の威厳のある景観を崩さず明るく参拝者が足を踏み入れやすい感じに変えていきました。又明るくなった境内には職員総出で挿し木して育てた紫陽花を毎年移植し三千株、第一鳥居表参道にはサツキを植え、桜の里親を募集して桜を三百本と、年毎に神社のイメージが参拝者の好評を得られるまでになってまいりました。

参拝者の増加を図るために十二月新蕎麦を目の前で打ち、その恵みを神様と共にいただ

く「そば打ち儀式」、二月から三月家庭で飾らなくなったお雛様を奉納展示する「ひなまつり」、四月初旬「夜桜まつりライブ」、七月「七夕まつり」、八月「ライブ」、九月「月見の宴」、十月から十一月「奉納菊花展」「野点」とイベント神社と言われる位の神社でありますが、このイベント等で確実に参拝者が増加しております。

しかしながらこれだけのイベントを神社の職員のみで対応出来る訳もなく、ボランティア団体「さくら山フォーラム」の皆様に、神社をたくさんの方に知っていただき伝統文化の発信の場となればと協力をいただいております。イベント開催については賛否両論いろいろな問題も有りますが今後も最善の方法を模索しながら開催をしてまいります。

神社の尊厳を厳守し、維持管理に取り組んでいるところで有りますが、観光地に有る神社であればさほど苦労はせずに居られますが遺族会も先細り、参拝者もさほど無い神社は何か他の対策をするか、マスコミ、口コミで参拝者の増加を図る外に対策が無いように思います。今後もイベント神社を自称しながら若者の参拝を増やし、地道に、時には激しくアピールして行きたいと思います。

根底には英霊の神鎮まります神社として。

（茨城県　茨城県護国神社　禰宜）

のさり

木下久榮

お祭りであるお宅にお伺い致しました折、そこの御主人が、「のさり」があるようにちゃんと神様をおまつりしていますという話をなさいました。

日常会話の中で「今日はのさっとった」とか「あの人達はようのさっとる」「のさった子供」「わたしには、のさらんだった」「あんなことをすれば　のさりがない」というような使い方をしますが、最近は久し振りに耳にした言葉でしたので、心の中にぽっと小さな灯がともったような気がいたしました。

「のさり」の正確な意味はどういうことだろうかと思って「のさり」について大日本国語辞典で調べてみましたところ「のさる」という言葉でのっており「のさる」は九州地方の方言で、運命づけられる、恵まれる、授かるという意味に使われているようです。ある時、偶然にも新聞記事の中に「のさり」についての解釈があるのを見つけました。それによりますと、「のさりは、わが身の理性、知恵、自己本位の計算や意志、教養のはるかに及ばない

大いなるもののはからいによって授けられたもの」というものでした。

まさに「のさり」のもつ意味をぴたりといいあてた表現だと感心しました。

私のうちでは、祖母や母が口ぐせのように「あたえがあるようにいいことをしなさい。」とか、「そんなことをすればあたえがない。」などと申しておりましたが、「あたえ」も「のさり」と同じように、「運がいい」「いいことがある」「恵まれる」「幸せになる」「授かりもの」などといい状態を表現する言葉であり、大いなる方のおはからいによるお恵み、お授けなど賜物、ごほうびであるといえましょう。

この「のさり」や「あたえ」をいただくためには、それなりに、大いなる方のお眼鏡に叶う心を持ち、御心に叶う行いをすることが大きな条件ではないでしょうか。

もう少し詳しく申しますと、人の道を実践することであり、神様や御先祖様を大事にお祀りする、感謝の心を持つ、正直で誠実な生き方をする、家族円満である、世のため人のためにつくすという種蒔きが必要なのです。

このような心や行いは、小さい時から日常生活の中でくり返し教え、その心を育み、実践できる力を培っていかなければなりませんが現代社会ではなかなかむずかしいようです。

最近は、大いなるものの力や不思議なものの存在、即ち神様の存在、因果応報などを軽視する風潮があり、子供達がどれだけ「のさり」「あたえ」ということを信じることができるか、また、家庭や学校地域社会も「のさり」や「あたえ」について理解し、信じて教えることができるかという大きな厚い壁にぶつかります。

かつて京都大学の教授だった方が、「戦後教育を受けた子供が社会に出た時は、日本は変わっているだろう。その理由は、歴史を学んでいない、宗教教育を受けていない、人の道を学んでいないから」とおっしゃったそうですが、まさにその通りになっているように思います。

科学的で実証主義を重視するあまり、目に見えない大いなるものの力や不思議なものの存在を信じることのできない子供、悪い事をしても恐れることもなければ、罪悪感もない異常な事態が生じてしまった事は困ったものです。これこそ教育のなせるわざではないでしょうか。

日本は昔から、藩校、私塾、学問所、寺子屋などで、識字率を高め、知識を身につけさせると共に心を育て、明治になってからは教育を義務制とし、国民全体の知的レベルアップを図り、徳育を重視して人づくりに心を砕き、更には人材の育成にも努めて参りました。

しかし、日本は昭和二十年の終戦と共にこれまでとはちがった方向に大きく教育の舵を切りました。そのため教育の方向や内容が一変しました。

どのような子供に育て、どのような国家にするかその根底にあるのは教育の力ですから「のさり」や「あたえ」を素直に信じ、感謝のできる子供、「のさり」や「あたえ」の種を蒔くことのできる子供が育つような教育がなされることを願っています。

教育の及ぼす影響の大きさということで大変気になることがあります。

教育の方向や内容は原則として国が定めます。国が定めるということは、その時政治の中枢にある人達の考えによって決定されますので、どのような考え方の人が政治の中枢にあるかによって、国民が思いもよらなかった方向に姿を変えたり、国家の根幹をゆるがすような事態も起こりかねませんので、私はこれからの教育のゆくえが大変心配です。

目に見えない不思議な力の存在を否定するような教育がなされないように、日本民族の原点である日本の皇室が、永遠に御安泰でありますように、日本の文化と伝統が大切に守られますように、今の国旗や国歌を改定するようなことがないようにと祈るような気持ちです。

教育のもつ力、教育の及ぼす影響は大きく、指導者の考え方が人間性の育成、国家観と

密接な関係がありますので、日本人が大事にしてきた考え方や生き方が失われないように念じてやみません。

教育の重要性に鑑み、熊本の教育に貢献された二人の教育者を御紹介いたします。

五高の教授であった夏目漱石は、創立記念日の式典の祝辞で、「ソレ教育ハ建国ノ基礎ニシテ育英ノ大本タリ……」と述べています。

また、熊本県の女子教育の魁（さきがけ）であり、一人一人の子供を大切にする教育に心がけた竹崎順子女史は

手折りつる花はもろ手にあまれども
いづれを野辺に捨ててかへらむ

という短歌を詠みました。

（熊本県　大江八幡宮　禰宜）

身を踏んごんで田植えかな

鈴木明子

大和は国のまほろば　たたなつく青垣
山籠もれる　大和し麗わし

皆さんご存じの倭建命が、伊勢の能褒野で故郷を偲んで歌った歌です。青々とした山々に囲まれて、その当時の日本はどれほど美しく豊かだったことでしょう。

天地の分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き駿河なる
富士の高嶺を　天の原　振り放け見れば　渡る日の
影も隠らい　照る月の光も見えず　白雲もい行きはばかり
時じくそ　雪は降りける
語り継ぎ言い継ぎ行かむ　富士の高嶺は

と、山部赤人は万葉集の中で富士山を称えておりますが、そんな美しい日本の国、神様が創り給うた国と神話にも語られている神の国で育まれた日本人は、言霊を大切にし、穏や

かで正直、助け合い支え合って社会生活を築いて来たこと、その中心として天皇陛下がおられたこと、それらは美しい日本の文化として、伝統として世界に誇れるものだということを、今の若者達、子供達に教えて行かなくてはいけないと思うのです。

私は中学校に勤務しておりましたが、学校では日本はこんな悪いことをしたと、悪い事ばかり教えていまして、それが革新的、民主的教育と思われておりました。しかし、子供達は良いことを言ってもらうほうがうれしいのです。私はこっそりと神話を読み聞かせ、「だからあなた達は神の子なのですよ。」と言いますと、授業中大声でおしゃべりをし、マンガを読んでいる女の子が、その時も後ろを向いておしゃべりをしていたのですが、突然くるりと前を向いて「そんなら、うちら神の子なん?」ときいたのです。「もちろん、神の子ですよ。」と答えますと、「わあ、うちら、神の子やて。良かったな。」とうれしそうに大きな口を開けて笑ったのです。輝く笑顔でした。

又、私は日本語の美しさを感じてほしくて、ことさら丁寧な敬語を使って生徒達に接しておりましたが、ある男子生徒が「先生、先生はなんで俺等にそんな丁寧な言葉を使うんや。」ときいてきたことがありました。「あなた達は日本の国の宝だからよ。あなた達が大人になって、この国を背負ってくれるのだから、宝なのよ。」と言いますと、「ふうん。」

と言いながらうれしそうににっこりしたのです。心に沁みる笑顔でした。

ですから私達はもっともっとこういう事を子供達に教えていかなくてはと思うのです

さて、そんな美しい日本の国で日本人がどれほど協力し、助け合い、譲り合い、和の精神、和の仕草を築いてきたかを、日本の国造りの基本となった稲作を通して、さらには江戸時代の「仕草」を通して考えていきたいと思います。

離別(さ)られたる身を踏んごんで田植えかな

これは、江戸時代の与謝蕪村の俳句です。離別して実家にもどってきたが、今、村は田植えの真っ最中で、村人総出で一戸ずつ田植えをして回っている。悲しんでなんかいられない。頑張らなくては、とぐっと体に力をこめて皆といっしょに田植えをするというものです。

産月の腹をかかえて田植えかな

同じく江戸時代の森川許六はこう詠んでいます。たとえ産月であろうと村の共同作業は休んでいられないのです。

生き変はり死にかはりして打つ田かな

明治時代の村上鬼城は先祖代々守り育ててきた田んぼのことを、こう詠んでいます。

こうして村全体で共同で稲を育ててきた助け合いの精神は、江戸時代の町人文化にも反映されているのではないかと思います。

越川禮子という方は『身につけよう、江戸仕草』という本の中で、「江戸仕草は人にして気持ちいい、してもらって気持ちいい、はた目にも気持ちいいもので、人皆気持ちよく笑顔で暮らせる社会環境を作るための基盤と、江戸っ子は考えていろいろな仕草が生まれた」と書いています。当時の江戸は人口百二十万人で、世界最大といって良い大都会だったそうで、だからこそ譲り合いの仕草、助け合いの仕草が生まれたともいえるかもしれません。

「傘かしげ」これは道ですれ違うとき、お互いに傘を外にかしげて雫がかからないようにする仕草です。「肩引き、腕引き」、狭い道を行き交うとき右肩や右腕を引いて譲り合う仕草です。「こぶし腰浮かせ」これは乗り合い舟でこぶし分腰を浮かせてお互いに座れるようにするという仕草で、現代の電車の中でも通用する仕草です。

「うかつあやまり」というのもあります。これこそ日本人として世界に誇れる仕草ではないでしょうか。とっさに避けられなかった自分もうかつだったのです、すみませんと口にはださなくても、とっさの仕草でその場に良い空気をつくることができる大人の仕草の

ことです。

現代の社会状態を見るに、なんと私達は日本古来から江戸時代、明治時代まで持っていた助け合い、譲り合いの精神、和の精神や仕草を失ってしまったことだろうと思わずにはいられません。司馬遼太郎が『この国のかたち』という本の中で「明治時代まで、日本には徳のある人が多かった」と述べておりますが、そういう現代だからこそ、若者達、子供達に苦しい稲作を通して、美しい四季を通して育まれた日本古来の、助け合い、譲り合いの精神や仕草こそ、世界に誇れる文化であり、伝統であること、そしてそんな日本や日本国民、世界の平和を常に祈っておられるのが、天皇陛下であることなどを、教えていかなければならないと思うのです。

昭和天皇が六十才になられたときの御製、

さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさんぞ我が願いなる

このお心を広くお伝えしたいものです。

（滋賀県　立木神社　権禰宜）

薩摩の役割

中木屋豊

桜島が今大変な事に二ヶ所から噴煙や爆発を繰り返しています。平成十九年から昭和火口の噴火が再開してしまっているからです。せんだっても二千五百メートルの噴煙の上がる爆発がありました。折からの風で私どものところにも降灰が降ってきました。大隅半島では、一年を通じてよく降灰を観測します。北西の風が吹くからです。大爆発四千メートルの噴煙が上がった時、目と鼻の先にある鹿児島市に折しも大量の降灰が観測されました。テレビは全国ニュースで伝えています。垂水市や鹿屋市の人たちは、「毎日のことなのに」と憤懣やるかたない様子でした。

桜島の噴火活動は、降灰対策のみの迷惑なものです。しかしかっての大噴火で形成されたシラス台地が歴史的発見につながりました。『古事記』天孫降臨の条に、筑紫の日向の久志布流多気に天降りましきと、書かれているように、霧島は天孫降臨の地だといわれます。文字のない時代口承で伝えられた「事実」は、歴史的発見により裏づけされるのでは

ないでしょうか。

今から九千五百年ほど前の上野原縄文遺跡が見つかったのが、昭和六十一年のことでした。この遺跡には、竪穴式住居五十二軒、料理用集石三十九基、土坑二百六十基、道跡二本、何より燻製などを作ることに、用いられたと考えられる、連穴土坑十六基が確認されました。そして農耕の始まっていない時代といわれる、約七千五百年前の、保存用のつぼ型土器が出土しています。高い水準の文化が確認されているのです。旧国分市現霧島市にこの遺跡はあります。

「鹿児島」「薩摩」と言えばすぐに明治維新が思い起こされます。西郷南州翁や、大久保甲東公が有名でした。昨年のＮＨＫ大河ドラマで、天樟院篤姫が世に知られ、小松帯刀も見直されました。いずれも幕末から明治維新で活躍して、日本の独立つまり植民地化を防いだのです。このことについては、第二十八代藩主島津斉彬公が、名君の誉れ高い存在で、小松を重用し、西郷・大久保に活躍の場を与えたことはよく知られています。しかしその確たる情報能力について、薩摩藩が琉球を経営して、東アジアとの密貿易でインドや中国の状態を知っていたこと、莫大な富を得てその資金が、倒幕の資金に充てられたことなどはあまり指摘を受けませんでした。

時代は少し遡ります。天孫ニニギノ尊さまは笠沙のみさきでうまし乙女にお会いになります。木野花咲哉姫がその方です。この笠沙という地名は現在もあります。今南さつま市となっていますが、坊津をはじめ天然の良港が、指を広げたように連続しています。いうまでもないことですが、坊津は日本三津の一つです。伊勢の津、福岡博多津と並んでの古くからの貿易港です。唐招提寺を開いた「鑑真和尚」が上陸した港であります。薩摩はやはり東アジアの玄関口であったことがこの事でも推認されるのです。

時代は一気に戦国時代になります。一五四九年フランシスコザビエルがやってきます。当時ヨーロッパでは、マルチンルターらによる宗教改革運動がおこり、カトリック教徒が激減しました。教会は、イエズス会を結成し、世界布教に乗り出したのです。その一人であるザビエルが種子島にたどり着いたのです。その六年前に鉄砲がもたらされました。「種子島」と名づけられし鉄砲を採り入れ、織田信長が天下統一を、果たすことになります。いずれにしても、戦国の世は親兄弟・主従関係も一夜で変わる、下剋上の時代です。力が全てでした。

ザビエルが上陸した薩摩は、桂庵禅師の教えもめでたく、朱子学に裏打ちされたとても道徳的な風土が形成されていました。ザビエルが来る五年前に、島津忠良公（日新公）は、

「いろは歌」を作っておられます。そのいくつかを紹介します。京の摂関家近衛家で絶賛されたそうです。

古の　道を聞きても　唱えても
　わか行いに　せすは甲斐なし

いくら良い教えなどを聞いたり知ったとしても実践しなければ何にもならない

楼の上も　はにふの小屋も　すみびとの
　こころのこそは　たかき賤しき

どんな立派な住まいにいようが、どんなにみすぼらしいあばら家でも、そこに住む人のこころがけで高い低いが決まる。

ほとけ神　ほかにましまさす　人よりも
　こころにはちよ　天地よく知る

心の中にこそ神仏はいらっしゃる。他人ではなくおのれ自身の心に恥じなさい。天地がしっかり見ていらしゃるのだから。

ねがはすは　へたてもあらし　いつはりの
　よにまことある　伊勢の神かき

分別身分の高い低いにかかわらず誠にあるのです。伊勢の神様は願いをかなえてくださるのです。

めくりては　わか身にこそは　つかへけれ
先祖のまつり　忠孝の道

先祖のまつりをするということは、巡り巡ってついにはおのれ自身に仕えることになる、忠孝の始めなのですよ。

こうした薩摩の状態を、二つの便りでザビエルが残しています。その一つが、インドのゴアの友人に「文盲の人が少ない。」「教理を理解したり、布教に困らない。」ひらがな文化が日本中に普及していたのと、薩摩ではいろは歌をそらんじたり、一部には漢字を交えるなどひらがななどの読み書きが十分普及していたことが想像されるのです。ヨーロッパの識字率が低い時代だったので特に感心したのでしょう。ここでも郷士制度、これはのちに北海道の開拓にあたった屯田兵に受け継がれます。普段は農業も営みながら、いざという時に兵事に当たるのです。大型農業の可能性のある北海道の開拓と、ロシアの南下に対応するための制度でした。

もう一つは本国にしたためた手紙です。世界布教とともに、植民地の拡大が各国の狙い

です。野蛮な地域、未開の地は植民地にしていくのですが、「大変貧しい生活をしているが、みんな明るく泥棒もいない、鍵をしないで生活する道徳のいきとどいた国だ。植民地化を考えないで、友好国の扱いをして・・・」

実に時は戦国時代、道徳は地に落ち親子も兄弟も主従も関係ない、そんな下剋上の世に薩摩は安定した政治がおこなわれていたのです。不幸中の幸い、こうして植民地化の危険から、薩摩が救ったのです。

私たちの先祖は、肇国の歴史から東アジアの玄関口として、日本の国柄を守り伝える、重要な役割を果たしてきました。国旗日の丸は、名君島津斉彬公が、船の旗印に使うように幕府に建議したことが端緒です。咸臨丸にも日の丸の旗が掲げられました。斉彬公を祭神とする照国神社では、今も国旗祭が毎年七月十一日、厳粛に斎行されます。その旗印を今後も掲げ続け、日本がその正しい国柄を、踏み外さぬように、改めて先祖に恥じない生き方をする約束を、ご先祖に御誓い頂くことで、さぞかし喜ばれるものと思います。国難にあたりひるまなかった、先祖の気概をしっかり受け継ぐことを、自分自身にも深く誓って今日の年忌祭を終了させていただきます。

（鹿児島県　稲荷神社　宮司）

御身一つに　負ひたもふ

木下鋏二

梅雨の晴れ間に輝く新緑は、実に心あらわれるものがございます。

山なみの　色はあらたに　みゆれども
　わがまつりごと　いかにかあるらむ

この御製は、昭和三年の歌会始でお詠みになったものです。御即位になって始めての歌会始でございました。

この御製にこめられました、お若い昭和天皇陛下の胸の内に思いをいたしますとき、感慨一入のものがございます。

さらに、平成八年の皇后陛下の御歌を御紹介いたします。

日本列島　田ごとの早苗　そよぐらむ
　今日わが君も　御田（みた）にいでます

いま御紹介致しました御製と御歌を奉唱致しましたとき、私は去る五月十八日、十九日

の両日、神社廳天草支部の主催によります「皇居勤労奉仕の旅」の感激の一コマを思い起こしていました。

それは、皇居内の生物学御研究所の脇にしつらえてあります「水田」を見たときでございます。水田には水がいっぱい張ってございましたが、御案内下さいました宮内廳の職員の方の説明によりますと、水田の広さは二百三十八平方メートル、七十五坪ほどの水田でございます。

ひろくはございませんが、この田んぼで天皇陛下御自らお田植えをなさるのだ。

皇后さまの御歌

日本列島　田ごとの早苗　そよぐらむ
今日わが君も　御田にいでます

この御歌を奉唱し、こめられています御心を心の中にあたためていましたら、

神社新報六月八日号に『天皇陛下　お田植ゑ』との見出しが付けられた御写真と記事が一面トップに掲載されていたのです。

その記事の一部を御紹介させて頂きます。

○

天皇陛下には、五月二十六日午後、皇居内の生物御研所脇の水田で、御自らお田植ゑをおこなはれた。ー中略ー

稲田にお入りになられた天皇陛下には、マンゲツモチとニホンマサリの苗を手にお田植ゑに臨まれた。陛下には同日、四カ所に苗を五株づつ、合わせて二十株を丁寧にお手植ゑになられたほか、御公務の合間にもお田植ゑ遊ばされ、二十八日までにあわせて二十ヶ所、百株をお手植ゑになられた。

陛下には、御自ら籾種から苗を育ててをられ、このたびのお田植ゑには、陛下がお育てになられた稲から採取したものと、茨城県つくば市の農業試験場産が用ゐられた。

聖上御親ら稲作りをなさる例は昭和二年、先帝陛下がお開きになられ、今上陛下には大御心をお継ぎになり、御代替りの年から御手づから稲種をお蒔きになる新例を開かれた。

例年収穫された稲は、十月十七日の伊勢の神宮の神嘗祭に根付きのまま奉られるのをはじめ、十一月二十三日宮中神嘉殿での新嘗祭に供へられる。

○

陛下のお田植えに示されました大御心に深く頭をたれるのです。

稲は「いのちの根」といわれますように、日本人が最も大切にする主食として神世のいに

しえより大切にしてまいりました。

このお田植えのお姿こそ、天皇陛下の大御心が常に国民（くにたみ）の身の上、国のゆく末に御心をくだかれる一端を示すものでしょう。

ことなべて　御身ひとつに　負ひ給ひ
うらら陽の中　何思（おぼ）すらむ

これは皇后陛下の御歌ですけれども、うららかな陽につつまれていても、天皇陛下の御心には、多くの思いが去来し、宸襟（しんきん）を悩ましてあらせられる事を、私達国民は忘れてはならないと思うのです。

（熊本県　大江八幡宮　宮司）

時代劇と現代

佐古一洌

今チャンバラ、所謂「時代劇」がひと頃より振るいません。

かつては、「水戸黄門」をはじめ「銭形平次」「大岡越前」「遠山金さん」はた又「桃太郎侍」や「旗本退屈男」「鬼平犯科帳」「子連れ狼」「剣客商売」「丹下左膳」そして「忠臣蔵」等々キラ星の如く沢山ありました。

その時代劇のうち一番長寿番組は、何と言っても「水戸黄門」であります。現在水戸の御老公は、里見浩太朗さんが好演なさっております。

この里見浩太朗さんは、かつての名優市川右太衛門の〝豪快さ〟片岡千恵蔵の〝渋さ、重厚さ〟長谷川一夫の〝艶っぽさ〟大河内伝次郎の〝男っぽさ〟を全て兼ね備えた、時代劇最後の人と言われております。

○

その時代劇の内容は誠に単純明快、すなわち「善きを勧め悪を懲める＝勧善懲悪」にあ

ります。

そして時代劇が描いているのは、〝愛と人情〟であります。それは男女の愛であり、親子の愛であり、君臣の愛でもあります。この人間関係、心のつながりこそは、かつての日本人の持っていた心そのものです。

例えば父親が子供を守る為に切腹したり、母親の為に子供が敢えて罪人になったり、主君の為には全てを犠牲にして忠義を尽くす。人間にはこう言う心の持ちようもあるのだと、時を超えて現代の私達に訴えかけてくれるのが時代劇であります。

多少窮屈な面もありますが、それだけ人間関係が濃密である証拠とも言えましょう。かように愛と人情厚きが故に逆に、それらを踏みにじる不条理に対する憤りも深かった。

そこで悪役の登場と相成ります。例えばテレビ「水戸黄門」の悪役は、パターンが決まっております。金好き、女好き、いじめ好き＝いじわる。それに酒好きを加えれば私のような者です。

そして彼らは、必ず滅ぼされる。こらしめられる。悪役俳優の条件は三つ、顔がデカイ、声がデカイ、態度もデカイ、一目見て〝お主も悪よのう〟と言われるような人物。この三条件が揃うのはあまりいませんから、悪役顔の俳優さんは品不足、かくて悪役俳優は何度

も蘇る訳であります。

○

時代劇のクライマックスは、そのワルが如何に懲らしめられるかの大立廻にあり、それによって観客は溜飲を下げるのであります。

ところが昨今、子供が親を、親が子供を殺すような事件が日常茶飯に起こり、更に師弟・上下関係も薄れ乱れ、お互いの人間関係は著しく希薄になっています。

その為一体何が悪いのか、いいのか、といった善悪の意識判断が薄れ、或いは失くなっている。そうした、人に迷惑をかけても分からない人間が、時代劇を見てそこに描かれている不条理な悪への憤りを感じるとも思えません。

かてて加えて時代劇が振わなくなった大きな原因の一つは、戦後修身や道徳といったものが否定され、日本の歴史もきちんと教えず、孝行や忠義といった古来の「日本の心」を伝えなくなった結果、時代劇を理解する下地が既に消失してしまったからであります。

○

つまり「修身」滅んで「時代劇」廃るであります。

しかし冷静に考えてみれば、善悪というもの、恥ずべきこと、卑怯なこととは何か―そ

れを子供達にしっかりと植え込むのが、真の教育、教育の再生、教育改革の第一歩のような気を致します。

戦前を否定するあまり、〝羹に懲りて鱠を吹〟いてはいけません。はっきり申して今の教育には〝日本の心〟が欠落しています。時代劇にはその日本の心が息づいているのであります。

故に時代劇の復活と教育の正常化は一つであるという事を申し添え、筆を置かせていただきます。

（京都府　松尾大社　宮司）

きさらぎの花開く 黙霖の教え

村田和之

先般、高杉晋作の劇団公演のお手伝いをする機会がありました。吉田松陰の熱烈な尊王、憂国の志に引かれた久坂玄瑞の誘いで父親に内緒で人格の修行と有能な人材育成を説く松下村塾に通い奇兵隊を結成、二十九歳の若さで病死しましたが、明治維新改革の先人となった一人であります。今年は吉田松陰の歿後百五十年。明治維新の先達として中心的役割を果たした松蔭、その陰には実弟の杉敏三郎と奈良の谷三山、広島の宇都宮黙霖といふ三人のろう者との交流があったことは余り知られておりません。

松蔭は、二〇〇年続く鎖国を開くべく日本の新時代を築いた志士を育て教えた第一人者です。松下村塾の教えは、わずか二年半の期間ながら、久坂玄瑞、高杉晋作、吉田栄太郎、入江杉蔵、伊藤博文、佐世八十郎、山県有朋、山田市之充、品川弥二郎、野村和作等、歴史上有名な若い志士を生み育てました。その中で教育において、特に大きな思想的影響を与えた黙霖のことを私達は忘れることはできません。

松蔭は二十一歳の夏、九州、東京、水戸、東北と遊学、外国を知り、古事記、日本書紀など建国神話を基に日本固有の道徳を説き尊皇思想を中心とする水戸学を学び、日本の歴史の重大さを知り、神道を崇め天皇を尊ぶ教えを説く水戸の堀江克之助を知りました。そして「今だ自分は会ってはいないけれど必ず門下生にお会いするように」と伝え残しました。ここ水戸の国は徳川ご三家の一つ副将軍と呼ばれる徳川光圀公、水戸黄門で助さん格さんで知られる水戸藩第二代の藩主、学問にたけ「大日本史」の編纂、日本最大の藩校、弘道館を設立し水戸学の思想を生み、激動の幕末と近代日本の幕開けに大きな影響を与えた所であります。先人達は相手と会談する機会も少い中で、その人の説く考えに共鳴し、文通での意見交換もしておりました。松蔭に大きな影響をあたえた一人である黙霖も同じく生涯会うことも叶わないながら黙霖は松蔭に対し十四回、松蔭からは十二回もの書状を交えたのであります。

黙霖は広島が生んだ勤皇僧、文政七年（一、八二四年）九月、今の広島県呉市の住蓮寺で二十二歳の青年僧の父と聴衆の母との許されない関係の間に生まれました。未婚の母や父の間を行ききし、養子としてあずけられる不幸の連続でありました。しかも、二十一歳の時、大病の為、耳と発声の二重苦の障害を受けながら住職となり、頼山陽、楠木正成を

知り、日本の国、天皇、国民のなすべき道を研究、自らの尊皇思想を「王覇の弁」と記し、「古代日本の天皇による君民一体の王道楽土の政治」を説きました。口で話すことのできない身体の為、その王覇の弁の草案を風呂敷に包み、ぼろぼろの衣姿で背負い手に錫杖を突き頭陀袋をかけ諸国を遍歴、筆談で説き歩いたのであります。安政二年（一八五五）、松蔭は下田の渡航事件で世間を騒がせた罪により投獄され、自身の渡航理由などを記した『幽囚録』を読む機会を得た黙霖は、松蔭と論争すべく交際を求めた。長州・萩の城下町に現れた黙霖は、松蔭に会談を申し込んだのであります。投獄の立場の為、会談は許されませんでしたが黙霖の熱意は松蔭にも伝わり「黙霖ノ如キ者ハ世ニ多クハ有ラズ・・・山ハ樹ヲ以テ茂リ、国ハ人ヲ以テ盛ンナリ」と記すに至りました。そして最後には、今迄の黙霖の文章に感謝し、「尊王の大義について不明を悟り、朝廷を尊ぶ志を一層堅固にするに至った。」「僕、ついに降参するなり」との決意を文章で送りました。しかし、残念ながら、その手紙は松蔭が処刑された五年余りも後に黙霖の手元に届いたのであります。

黙霖十九歳にして儒学の精神を学び、日本の歴史を知り、二十歳にして「菊花を詠ず」と詩を記し尊皇思想を自分の好む菊の花に託し「遠ク南山ニ対イテ短簫ニ泣ク、黄花ノ感慨人知ルコト少ナリ千秋郁郁タリ天家ノ号乃千是淵明以上ノ枝」と詠みました。又、黙霖

は、霜や雪のつらさの中に絶えて、百花にさきがけて花を開き、長く薫りを漂わす梅の花を好み梅を「きさらぎの花」とも祢し「雪郷（ゆきさと）の清き心を梅ヶ枝に映してや見ん春の庭面（にわおも）。」「梅の花散りにしあとのその実をも昔を今になすよしもがな」と詠みました。又、余談ながら明治二十七年、日清戦争時、広島の大本営に明治天皇が行幸され天皇に随従して広島に来ておられた総理大臣、伊藤博文に招かれた黙霖は口で話せない為「俊輔君（若い頃の博文の名）に会いに来た」と紙に書いて護衛に渡した処、その身なりに注意していた姿を見て博文より黙霖先生と叫ばれ側近の人々をびっくりさせたとのエピソードもあります。

黙霖、明治六年僧侶の出身ながら正義のため賊軍と戦い刀折れ矢つき戦死した楠正成を祀る湊川神社の宮司不在の為、初代権宮司として神明奉仕、次で今の石清水八幡宮（元の男山八幡宮）の祢宜を奉仕、明治三十年九月十五日、七十四歳にて帰幽。没後二十年の大正五年、維新の功により従五位を贈られたのであります。

幼名は采女と名乗り、後、覚了、鶴梁、雷卿、雪渓、梅卿、梅渓、史狂王民、雪卿、黙霖、梅卿黙霖とも名乗った黙霖は慶応二年（一、八六六）僧籠を退いて初めて母方の宇都宮姓を名乗り、宇都宮黙霖と祢し、正式には真名介と名乗りました。石井寿夫先生が初版よりお世話になり私達も毎年講話集を発行印刷している会社の社長こそ、その宇都宮家の

ご親族なのであります。

黙霖の生涯は不幸な誕生と波瀾万丈の人生ながら、日本民族として今日の天皇中心とした国造りの為に一生を捧げられ吉田松陰にも大きな影響を与えたのであります。その生きざまは、私達、志を継ぐ人々に無言の手本を示しているのではないでしょうか。

以上今大会、公開講演最後の取りとさせて戴きます。ご静聴誠にありがとうございました。

（広島県　長束神社　宮司）

神社の参拝作法について

前原亨秀

神社に参拝して頂く時に、「二拝二拍手一拝」の作法でお参りをして頂いたと思います。神様にお参りして頂く時には、その神社に特別の参拝する手順が無い場合には、「二拝二拍手一拝」の作法でお参りをして頂ければ良いでしょう。

参拝の作法として「二拝二拍手一拝」でと言われまして、不思議に思う方も多いと思います。なぜ、そのような作法で、神様に参拝をするのだろうと、宗教的な特別な儀式だと思われるかもしれません。

ですが、神様の参拝の作法とは、そんなに難しいものではなく、神様に失礼の無いようにという気持ちから生まれた作法であると言われています。

参拝の作法の初めにある「二拝」については、腰まで深くお辞儀をする最敬礼と呼ばれます。日本に数ある礼法であっても、人間相手に腰まで深くお辞儀をするということはありません。目上の人や尊敬する人物であっても、六十度位のお辞儀である敬礼をすること

になります。しかも、人と会って挨拶をする場合に、二度頭を下げると言うことは無いでしょう。神様に失礼の無いようにと最大限の礼を尽くそうとする気持ちから、人間同士が交わす挨拶ではありえない神様への気持ちがそこにはあります。

次に、「二拍手」ですが、これは不思議に思う方もたくさんいると思います。通常人間同士が出会って、拍手をすることはありません。むしろ、相手に失礼な事と思われるかもしれません。古来の日本には、貴い人間を迎える時に、その人間が通る時に一度手を叩き、その貴さを称える風習があったと言います。そういわれてもやはりあまり納得できないかもしれません。そこで、現代でも行われている例をご紹介しましょう。講演会などで、講師の先生が入場する場合、また結婚式などで、新郎新婦が入場するような場合に、司会者が「大きな拍手でお迎え下さい。」とアナウンスすることは、皆様も知っているのではないでしょうか。尊敬する人物が入場する場合に、拍手で迎えることにより、その人物を称える習慣につきましては現代でも見られるものです。神様が願いを聞き届けにお出まし頂ける、神様の貴さに尊敬の念をこめて、二拍手でお迎えすると言われています。

最後の「一拝」は、これで失礼致しますと言う事を示すお辞儀となります。

以上の参拝作法に対する説明には、諸説ありますので、別の解釈もございますが、神

様に失礼の無いようにという根本は同じものであります。

日本人は、古くから礼儀を尊び、他人を思いやる民族でありました。神様に失礼の無いようにと、その時代、その時々の人々が考え受け継いできました。

神様の気持ちを考えると言うことは、自分自身を振り返ることです。最近は、自分を振り返るということが少なくなってきたと思います。他人に指摘されて気付くこともありますが、自分の悪い所や、劣っている所などは、なかなか人から言われても、認められないものです。昔の親は良く子供にこう言いました。「神様の前でも胸を張っていられるようにしなさい。」神様の前に立つこととは、自分を振り返ることです。子供は、悪い事や隠し事をしていないか、親にあっては、子供が困っていないか、立派に育てられていられるだろうか、特に用事が無くても、神社にお参りをし、神様の前で自分を振り返ることは日常的なことでした。

正しい作法で参拝することで、皆様も、神社で神様の前に立ち自分自身を見つめ直す機会を持ってみてはいかがでしょうか。

（千葉県　千葉県神社庁　録事）

神社と参拝道

坂巻博志

社寺の参道の形は様々ですが、境内地を鳥瞰的に見ると、参道や社殿を囲むように木々が鬱葱（うっそう）と生い茂る鎮守の森が目にとまります。鳥居から、鎮守の森の奥に向けて参道があり、社殿に通じています。従前から信仰されていた、森にお社が建てられました。逆の例として、神社のために自然な鎮守の森になるように植林をした明治神宮は特に有名です。

狭い境内のお社でも多くの土地面積を参道として使用しています。参拝者が、鳥居の有る入り口から社殿に行き着くまでの間に大変重要な時間と空間が存在すると思います。参拝者は俗世間から神域に入る際、家宅に入る様に門扉一枚では神域に相応しい、心の変化を作る事は難しく心の準備が必要と考え参道を設ける様になったと思います。

神社の参道に特定しますと、一般的には、鳥居から社殿までの通り道を指しますが、大きな鳥居の代表は、和歌山県・熊野本宮大社の鳥居が、高さが約３４メートルもあります。

また、道路を跨ぐかたちの鳥居とか、多くの鳥居を持つお社も有ります。鳥居には、注連縄がありますが氏子の活動が活発な神社は、例祭や年末に新しい注連縄と交換できますが、小さい神社や、氏子の少ない神社では、化繊の注連縄で代用している所も有り苦労話を聞いています。

鳥居が無いお社が私の兼務社の素羽鷹神社に有ります。戦前の事ではっきりしませんが鳥居を奉納した当時の有力者の家族に不幸が続きとうとう鳥居を撤去した、と言う話が伝わっています。

又、神社の謂れなどを地元の総代さんに聞くと地域の逸話や伝承など・・・・を知ることが出来ます。参道の事だけでは無いのですが、地元神社の由緒を調べると奥が深いと思います。総代さんの記憶が伝承出来ればと思いますが、沢山の昔話が途絶えているかも知れません。

鳥居の付近から、玉砂利が敷いていてあります、敷石やコンクリートの場合もありますが、清らかさを維持し、それを示すために石を敷きつめる習慣があると聞いております。特に早朝に参道を進むとき、玉砂利を踏みしめ、ザッザッと言う音を聞きながら、清々しい空気の中境内の樹木の中を進む時、身も清まる気がします。心を落ち着かせて、真心を

こめて、参拝する事が出来ます。

参道を通る時には、礼儀作法が有ります。鳥居の前で一礼して進みます。手水を取り、神様と天子様のお通りになる中央の正中を歩かない様に進み賽銭箱の前で正中に進み再拝二拍手一拝の作法で参拝します。

出雲大社や宇佐八幡宮では四拍手、伊勢神宮では八度拝の作法がありますが、一般の方は再拝二拍手一拝にてお参りを致します。

現人神で有らせられる、天皇様が神社を訪れる際は、参拝と呼ばずに親拝と言います。天皇様は神様と同格と、神道に基づく理由からです。

以前、インターネット参拝が有りましたが、本庁から自粛の通知が出たことから、あまり聞かなくなりました。

日本全国の参道には色々な形態が残っています。平安時代から「神宮」と呼ばれるお社は伊勢神宮と鹿島神宮と香取神宮ですが、大正九年十一月一日に渋谷区代々木の地に、明治神宮が創建されました。

明治神宮の初詣は、毎年日本一の参拝者数で知られていますが明治神宮表参道は、両側にビルが建ち並び、自動車の交通量の多い道路になっています。参道とは言え、その雰囲

気は西洋風であり、他の神社仏閣の参道とは大きく異なります。参道入り口の表参道交差点には鳥居は有りません、大きな石灯籠が一対有ります。

また栃木県の三街道を日光東照宮の参道と見立てた、日光杉並木が有ります。全長三十七キロメートルの両側に杉を植栽し荘厳な雰囲気があります。この地の気候・風土が杉の生育に適していたのかも知れません。ギネスブックに掲載されてから、世界でもっとも長い並木道として、世界中に知られるようになりました。平成二十年四月現在の杉並木は一二、四七七本です。

門前町のかたちの参道が全国各地に有ります。参拝客を相手にする商工業者が集まることによって形成された町ですが、宗教都市として規模の大きい物や、歴史的にあじわいをとどめている地区は重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

重要伝統的建造物群保存地区の門前町は

滋賀県大津市の　日吉大社　　延暦寺
京都市左京区の　愛宕神社
京都市東山区の　清水寺

が有ります

平成十年、千葉県成田市の呼びかけによって日本全国の門前町を有する自治体・観光協会・商業関係者などが集まり、地域活性・町作り推進のために「全国門前町サミット」が開催されました。この参道も普通の商店街とは違う独特の雰囲気をもっており、俗世間から神域に通じる参拝道を形成していると思われます。

以上の事から、参道は、ただの通路では有りません。俗世間から、ご神前までの間に、心の準備をするための大切な空間と時間であり、また、神様と人とを結びつける大切な参拝道なのです。

また、近年は、神道及び宗教に関する意識が希薄になって来ています。うっそうとした鎮守の森に対する崇敬の念は薄れ、神社の森は必ずしも必要ではないと、考える氏子崇敬者もいるようです。道路の改修などの際に削られることも多く見られます。都会の現状として、森が全く失われた例も有ります。鳥居と本殿のみからなる神社も存在し、本来の自然崇拝を背景にした神社の姿が失われようとしています。

以上で　神社と参拝道を終わります。

（千葉県　浅間神社　宮司）

例祭日の変更に関する考察

中嶋勇人

今回の講演では以上の通り題しましたが、これに至るには実は氏子の青年とこんなやり取りがあったからなのです。

「あのう中嶋君、俺たちもっとお祭りを盛り上げたいからさ、例祭の日付を土日にして貰えるよう宮司さんに進言してよ。」

これは鹿島神宮の例祭の前後に山車を曳いている若衆からの一言でした。日頃から懇意にしている人物だけにすぐに意図が分かり「そんな進言できるわけないこと知っているでしょう。第一、神社のお祭りの日付というのは簡単に変えられるものじゃないんですよ。たとえばほらあなたの誕生日って変更できないでしょう」と私は答えました。

さて、このやり取りから、皆さんは今日私のお話ししたいことの大半はお分かりになられたのではないかと思います。現代の社会において神社の祭りとその執行の問題は大変厳しい状況にあるわけです。そのことについて鹿島神宮での事例などを挙げながら、今日は

私の意見を少しだけお話しさせて頂きたいと思います。

現代の神社の祭礼がやむなく元来の日付と異なって行われていたり、あるいは変更されて行われることが望まれている節があるということは神職である皆さんであれば経験上、皆無ではないこととお察し致します。お祭りに参加し担い手となる人たちの多くは、準備をするため少ない時間を割き、あちこちの調整に労力を傾け、一年間の積み重ねによってお祭りを行っているということがその内実であろうかと思います。我々神職も無論そうであるし、冒頭の彼のような神社の外側から支えてくれている人たちにとってもこれは同じことだと思います。土日を祭礼日とする先ほどの彼の言葉もきっとそんな苦労から出た冗談まじりの皮肉だったのだと思えます。

現代は、昔ながらの農作物の生育が基準となって日々が動いていた時代から七曜と太陽暦を取り入れた「カレンダー」で毎日が進行する時代となってしまっています。時代の流れにより社会は変容し、多くの人が一週間を時間の単位・区切りとして取り入れている世の中では、学校に通う子供たちや会社勤めをする青年たちをお祭りの構成員として引き込むには、ときには日程や時間を変更したり、あるいは祭りを縮小したり、また外部からの人的資源を取り入れたりと担い手・受け手の双方に負担がかかり、且つ伝統を守り引き継

いでゆくという大前提を少しずつ緩めていくという手法をとらねば祭り自体が立ち行かなくなってくるという段階にまで状況は進んできてしまっています。

ほかにも観光に関する行政や事業の観点からしても我々神職は微妙な立場に立たされてしまいます。お宮やお祭りに参拝者あるいは観光客を招くには土日であることの方が有利であることは言うまでもありません。近頃は休日の高速道路割引など世間の動きはさらに加速しています。これに対し、神職なら誰しも思う通りお祭りとはすなわち「神事」であり、これを単なる「観光イベント」にはしたくないという思いが心底にはあり、それと同時に「このお祭りを地域社会の活性化のために活用できないだろうか」と考えてしまうのも当然のことだと思います。

神職は神明奉仕、祭祀の厳修が第一とされますが、「神人和楽」という言葉が示す通りお祭りを盛り上げることも、多くの人に足を運んでもらい、ご祭神のご神威を広く世に広めることも神道やお祭りの本位に背くものではないと思います。だからこそ我々はジレンマを抱え、お祭りを行う毎に頭を抱えてしまうのかもしれません。

さて、ここまでお祭りを社会の変化に柔軟に対応することを想定しながら話を進めてきたわけですが、私の率直な意見としてはやはりお祭りの日付を動かすということだけは好

意的にみることはできません。ここからは神社の祭日を引き合いに話題を転じ、日本の祝日についてふれていきたいと思います。

四月二十九日昭和の日と十一月三日文化の日、これらはかつての天皇誕生日であり、かつては天長節と呼ばれ天皇陛下の弥栄を祝う祭日でした。続いて二月十一日建国記念の日はご承知の通り神武天皇即位の日でかつては紀元節と呼ばれた日でした。また最後に十一月二十三日の勤労感謝の日を挙げますが、私は神職を志すまで字面のみしか見ておらず、この日の意味を何ら理解していなかったという恥ずかしい過去を持っているのですが、この日は宮中で新嘗祭が行われる日で、天皇陛下が自らお育てになられた新しい稲穂を宮中三殿に御供えになる尊いお祭りの行われる日であります。

こうした「国の大切な祭儀が行われ、それを祝う」日だから私たちは「祝祭日」と呼ぶのですが、これと同じように全国それぞれの神社の祭礼は、ご祭神もしくは神社にとって由緒ある日・特別な日に行われているということを思い返さなくてはいけません。それぞれの日付にはやはり意味が込められており、だからこそお祭りは行われているということを氏子崇敬者にもきちんと伝えなくてはならないのだと感じます。

余談となりますが、昨今ハッピーマンデーというちょっと異様な制度が加えられ、祝日

を移動するという事例が日本のカレンダーから見られ始めました。これらの基本となる現在の法律にも少し疑問が残りますので紹介したいと思います。

「祝祭日」と私たちは普段使用する言葉ですが、昭和二十三年に定められたこれらに関する法律は「祝日に関する法（通称・祝日法）」として施行されています。なんとここでは文字の間に「祭」の文字が書かれておりません。これはいつの間にか「祭り」という概念が欠けてしまっていると換言が出来るのではないでしょうか。

いわゆる「旗日」とは、全てがそうだとは言い切れませんが、日本の「国家の祭日」という意味も込められていることを国旗の掲揚に合わせて周囲にも伝えていかなくてはならないのかもしれません。私自身も含まれますがこれを知らずに育った人たちや、思想を異にする人たちの手にかかり今後も暦が書き換えられることが当然のような風潮になっていけば、先人たちが培ってきた日本の伝統を軽んじ、またそれぞれの日付に込められた意味をないがしろにすることになるのではないでしょうか。さらにこれは皆の意見が一致すれば自分たちの都合で神社のお祭りも移動してもよいのではという考え方を助長することになるのではないかと危惧しなくてはいけないのかと思います。もしかするとこうしたことにならぬよう私たち神職はもっと大きな声で主張していなくてはいけない時期が来ている

のかもしれません。

さて、話題を鹿島神宮に戻したいと思います。

鹿島神宮では九月の例祭に並ぶ大祭としてとしてもう一つ、祭頭祭という当地に春を告げるとされるお祭りが三月九日に行われています。詳細は割愛しますが、このお祭りは鹿島神宮を中心とした周辺の五十地区から卜定により二字（あざ）が選ばれ、地区の人々総出で奉仕するお祭りであると言えば、大変大がかりな祭礼ということが想像出来ると思います。

約二十五年に一度しか当番が回ってこないという特殊な条件下での地域住民を巻き込んでのお祭りとなると、やはり祭礼日の移動を希望する意見も往々に湧き上がってくるものです。それだけでなく、現実には有志だけでお祭りを奉仕するなど規模を縮小したり、住民アンケート等により意見が辞退に偏り、二つの内の片方の字だけで奉仕したりするという状況も近年では起こってきています。

先般、地元の有力者から「職務の都合によりに自身の参列が叶わない」ないしは「自分たちが卜定を受けたとしたら地域を纏めきれるだろうか」などの理由により祭典日の変更を肯定する発言がありました。次第に大きな波紋を広げていったこの言を受け、鹿島神宮

側にも意見を求められることとなり、職員会議でもこれは話題に上ったことがありました。その中で私たち若い神職に告げられたのは次のようなことでした。

「現在この祭頭祭が行われる三月九日は明治六年に旧暦から新暦に移行するにあたり、神占によって選ばれた日なのである。この日にお祭りを奉仕するということは、いうなれば我々と神様の約束であって、ご祭神との約束を反故にすることは我々には到底出来ないことではないだろうか。」

昨日の薗田稔先生は講演のなかで神社の祭典というのは神話や伝承といった「古式」を今に再現できる場であり、その日は年に一度だけ巡ってくるそのお祭りが出来る日なのであるというようなことをおっしゃっていました。「神様との約束」の話に合わせて今の私の考えを支えてくれるような気がしています。

現在の神道における祭礼の問題は大きな過渡期を迎えています。そこには過疎化や価値観の多様化や産業構造の変化なども含むことになるのですが、今回の話題として取り上げた祭日の問題は、南方熊楠の反対で有名なあの神社合祀問題に似ているのではないかと私は感じています。信仰に直結する神社の由緒を左右したこの事態は、神社神道の基幹を揺るがしかねない問題ではなかったかと思います。この反対運動は柳田國男を始め知識人を

巻き込み、合祀の風潮は少しずつ収束し、やがて場所によっては復祀といった動きも見られるほどに世論は動いたそうです。

それぞれの神社の置かれる環境や状況は千差万別であり、鹿島神宮のように恵まれた環境に居る私が意見するのは控えるべきなのかもしれませんが、やはり可能であるならば神職はお祭りの日付を変えないための努力を惜しむべきではないと思い到りました。

大言をして熊楠を気取るわけではありませんが、今日の私の講演が少しでも皆さんの考えるきっかけとなって頂ければ幸いに思います。

（茨城県　鹿島神宮　権禰宜）

心の玉手箱

河本文夫

先日の事でございます。朝のお神楽を終え、新聞を読んでおりましたら、茶の間のＴＶから、「犬」「介護」という言葉が私の耳に入ってまいりました。

ほー介護犬の話題かなと何となく耳を欹てておりましたら、介護犬の話ではなく、介護が必要な老犬の世話を飼い主がしている話題でありました。後期高齢者ならぬ後期高齢犬の介護の話題でした。老犬を飼い主が、犬猫病院に連れて行ったり、それはそれはご丁寧な話しであります。手当てせねばとっくに死んでいたでしょう。動物愛護といえば、誠に聞こえはいいのですが、なにか違和感を感じたところであります。自分の親は介護施設に預けておいて、老犬の介護に気を使って。見方を換えれば犬も迷惑では無いでしょうか。

神様は、犬には我々人間には無い能力を授けられました。犬をはじめ動物は、自分で餌が取れなくなると、生きてはいけません。つまり死を意味します。それを悟りますと、細胞のＤＮＡに刷り込まれた本能に従って、仲間に悟られない目のつかない所で最期を迎え

ます。犬には死という概念は無いでしょう。それは自然に任せ、ありのままに自然と共に生きているような気がします。

米国に端を発したリーマンショック以来日本経済は低迷。派遣切という言葉が、生まれるこの頃、住む家もままならない人もいるとの事。大枚払って犬の介護でも無いでしょうといいたいところです。なにか間違っているような気がします。私も犬は好きで御座います。ふと昔の出来事を思い出しました。それは私の心の玉手箱に納めている「犬と少年」の話です。

まだ在京時代。私は、品川の大井町と大森の中ほどに会社が借り上げてくれた住まいに住んでおりました。私の一番良き時代だったのかもしれません。住所は品川区大井。なにしろ郵便番号一四〇、今は七五七ですから。七五七なんて中央にいる人にすれば、辺境の田舎。車のナンバーは品川ナンバー。ステータスを感じます。当時私は品川ナンバーのBMWに乗ってといいたいのですが、品川ナンバーのママチャリに乗りまして、家内に一台、私に一台、つまり我が家に車は二台。娘は後ろの荷台に乗せまして、大森の駅前のスーパーに出かけるのですが、その途中に、ペットショップがありました。私の娘がまだ幼稚園に上がる前、子犬に大変興味がありまして。このペットショップに寄るのを楽しみにして

おり、お決まりのコースとなっておりました。

子犬をほしがる娘に、部屋が狭くては飼えないね。犬がかわいそうだよなんて、納得させ、ただただペットショップの檻にいる子犬を見るのが楽しみでもありました。店の主人は迷惑な客だ、又来た、買いもしないのにと思ったかもしれません。ある日の事、店内の休息コーナーにある犬の本をめくって読んでいました。そこに「子犬と少年」の話が出ていたのであります。なんとは無く読み進めておりますとその内容に感動を覚えたのでした。店の主人も、そんな私たちに、その話素晴らしい話でしょう！と声を掛けてきました。そして、主人が、「私もその本にあるような事に出会ったことがあるんですよ」と話してくれました。その主人の過去の出来事又、その本にあった「子犬と少年」の物語を紹介してみましょう。

時々、店にやって来ては、ウインドー越しに子犬を眺めている一人の男の子がおりました。正月の喧騒も落ち着いた、ある日のこと。いつもの男の子がしばらく店内の子犬を見ていましたが、突然、

「おじさん、僕のお小遣いで買える子犬いないかな?」と尋ねて来ました。「そうだな、店に出ているのは血統書付だから十万円をくだらないけどね。血統を言わなければ」男の

子はポケットから財布を取りだし「僕、ずーとお小遣い貯めたんだ。お年玉も貯めてね。そして今三万円になったんだ。これで子犬買えるかな」

「うーん、三万円か～、大丈夫だよ。そうだ、今丁度僕にぴったりのがいるよ」主人は奥のドアを開けました。すると、毛がふさふさで丸々と太った子犬が数匹、店の奥から転がるように出てきたのです。子犬は男の子の足元に寄ってきました。男の子は、「わー可愛い」といって、白い子犬を抱きかかえようとしました。ところが一匹だけ遅れて一生懸命ついてくる子犬がいるではありませんか。男の子は、しばらくその子犬を見つめていましたが、やさしく抱きあげ・・・

「おじさん、この子犬はどうしたの?」と。

「あー、この子犬は生まれつき足が悪くてね、獣医さんに診てもらったけど、多分一生直らないって言われたんだよ」と主人は答えました。

ところがそれを聞いた男の子は、その足の悪い子犬を腕の中に抱いて、

「足悪いけど、うーん、お前可愛いな!」と、顔を近づけたりさすったり、しばらく子犬を抱いて店内を歩いておりましたが、突然「おじさん、僕、この子犬気に入った。この子犬を売ってよ!」

一瞬店の主人は驚きましたが、
「坊や、よした方がいいよ。その子犬は足が悪いんだよ、しかも、獣医さんも、一生治らない可能性が高いといわれたんだよ。それでもいいのかい。僕と一緒に遊んだり、走ったり出来ないかもしれないんだよ」
主人は健康な子犬を勧めますが、男の子は気持ちを変えようとはしません。
「そりゃあ、もしどうしてもっていうのなら、その子犬でいいんなら、そうだな、僕なら可愛がってくれそうだし、そうだおじさんがプレゼントしよう。ただでいいよ。足が悪くて売りものにはならないんだから」
と店の主人。
「ただでなんかいらないよ。おじさん、この子犬の何処が他の犬と違うっていうの？普通の犬と同じじゃないか！足が悪いだけだよ。普通の犬と同じ値段で買うよ。この子犬きっとわかってくれる友達が欲しいんだよ」・・・
「おじさん、僕、この子犬の気持ちわかるんだ」・・・
「きっとわかってくれる友達が欲しいんだよ」・・・と小さな声で
「だって僕もこの犬と同じなんだ」・・・

と男の子は主人に左足のズボンの裾をまくり、細い足を見せてくれたのでした。
そこには、ズボンに隠されて判らなかった、手術の傷跡のある足が現れたのでした。
そして男の子は、小さな声で
「金属のピンが入っているんだ」・・・と。
主人は「しまった！」
「足が悪いから売り物にはならない」といった言葉が。・・・
「僕悪いことといっちゃたな、僕許しておくれ」・・・
「うーん、僕大丈夫だよ」
主人は男の子の気持を汲んで、健康な犬と同じ値段でその犬を売ったのでした。
その後、この男の子は、この足の悪い犬を連れて、この店に、散歩の途中立ち寄ってくれると話してくれました。その時には、ドッグフード等を、持たせて帰らせるそうです。
「このような商売はね、ペットが売れればそれで良いようなものですけど、いつまでも飼い主に可愛がってもらえるかなと気がかりなもんです。結構、飼い始めたのは良いけれど、途中で、どうしようもなくなって、手放す人も多いんですよ。中には、捨てる人も多いんですからね。私が、扱った子犬で一番幸せな犬は、あの子犬ではないでしょうか。私に犬

の商売の意味を改めて教えてくれたような出来事でした」と、本にある「子犬と少年」の話に大変よく似た話をしてくれたのでした。昨今、犬の話題を聞くにつけ、人間と犬という動物のありようについて考えさせられる、私の心の中にある昔の出来事を思い出すのであります。

（山口県　宮尾八幡宮　宮司）

「いざさらば我はみくにの山桜」靖国の心を護り伝えん

小野日隆

本日は、御英霊が残された遺書やお手紙などを紹介しながら、御英霊の御遺徳をお偲び申し上げるとともに、日頃御社頭に奉仕する心構えの一端を申し述べさせていただきたいと存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

本日のお話のタイトルを「いざさらば我はみくにの山桜」とつけさせていただきましたが、これはご英霊が残されました歌の上の句です。下の句は「母のみもとにかへり咲かなん」です。

「いざさらば我はみくにの山桜母のみもとにかへり咲かなん」

この歌を詠まれた方は、海軍中尉緒方譲命、海軍第十三期飛行科予備学生として関西大学から学徒として出陣、昭和二十年三月二十一日「第一神風桜花特別攻撃隊神雷部隊桜花隊」の桜花搭乗員として母機一式陸上攻撃機に搭乗、鹿屋基地を出撃、九州南方洋上にて戦死されました。

靖国神社の境内に遊就館という御英霊の御遺品等を展示する資料館がありますが、私はそこを訪れた際必ず拝見するものがあります。それは一冊の海軍手帳です。そこには鉛筆で走り書きした二首の歌が書かれています。緒方中尉が鹿屋基地を出撃する三十分前にかかれた辞世の句です。それは次の歌です。

「清がすがし花の盛りにさきがけて玉と砕けむ丈夫我は」

「死するともなほ死するとも我が魂よ永久にとどまり御国まもらせ」

当時鹿屋を発って沖縄に到達するまで一時間半かかるそうですから、出撃の三十分前つまり二時間後には自分は確実に死ぬんだという状況の中で書かれた訳ですが実に淀みの無い達筆であります。死をも超越した中尉の泰然とした精神状態が偲ばれます。

緒方中尉はお母さんとの歌のやり取りでも有名です。お母さんの名は緒方三和代さん。出撃が決まった時、母は今生の別れにわが子の任地鹿屋に赴きます。

「うつし世のみじかきえにしの母と子が今宵一夜を語りあかしぬ」

鹿屋の別れの一夜、中尉はおそらくお母さんに対して、「敵の空母の一艘も沈めてみせますよ」と勇ましい言葉を語ったに違いないと思いますし、お母さんも我が子に対して「帝国海軍軍人としてしっかり働いていらっしゃい」と励まされたことでしょう。一分一秒の

時間の経過を惜しみながら夜遅くまで話は尽きなかったことでしょう。翌日お母さんは熊本の実家に帰りますが、その荷物の中にそっと忍ばせた中尉の手紙を発見します。そしてその最後に中尉の歌が書かれてありました。

「いざさらば我はみくにの山桜母のみもとにかへり咲かなん」

お母さんは歌で応えます。

「散る花のいさぎよきをばめでつつも母の心はかなしかりけり」

鹿屋の夜お母さんに勇ましく語った中尉も最後は「お母さん」と叫んでおられるし、お母さんも潔く散り逝かんとする我が子を誉めながらも「母の心は悲しかりけり」と結んでおられます。

もう一人紹介しましょう。

「靖国の宮にみたまは鎮まるも　をりをりかへれ母の夢路に」

皆さんはこの歌を聞いたことがあると思います。戦時歌謡で歌われたり、現在は詩吟の中で歌われることが多いと思いますが、この歌は部下の葬儀の日に、上官から戦死された御霊のお母さんに宛てて打たれた電文なのはご存知でしょうか。発信者は都城連隊副官大江一二三少佐、戦死した部下は歩兵四十七連隊陸軍中尉立山英夫命、昭和十二年八月二十二

日河北省幸荘にて戦傷死されました。

立山中尉は第二大隊第五中隊小隊長として北支に出征、河北省幸荘の戦闘で負傷、戦死されました。中尉の血まみれの軍服の内ポケットに自ら撮ったお母さんの写真が入っていたのですが、その写真の裏に母を思うまごころが記されていました。写真の裏一面に万年筆でびっしり次のように書かれてあります。

若し子の遠くに行くあらば　帰りてその面見る迄は
出でても入りても子を憶い　寝ても覚めても子を念ず
己れ生あるその中は　子の身に代わらんこと思い
己れ死に行くその後は　子の身を守らんこと願ふ
ああ有難き母の恩　子は如何にして酬ゆべき
あはれ地上に数知らぬ　衆生の中に唯一人
母とかしづき母と呼ぶ　貴きえにし伏し拝む
母死に給ふ　そのきはに　泣きて念ずる声あらば
生きませるとき慰めの　言葉交わして微笑めよ

母息絶ゆるそのきはに　泣きておろがむ手のあらば
生きませるとき肩にあて　誠心こめてもみまつれ
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん
お母さん　お母さん　お母さん

なんと同じ「お母さん」の文字が長歌に続いて二十四回も書かれています。お母さん思いの優しい中尉の気持ちが痛いほどわかります。この、中尉の親を思う孝行の心に感じ連隊副官大江一二三少佐は、中尉の母堂に次のような弔電を発信したのです。

「タテヤマトヨ殿

ヤスクニノミヤニミタマハシヅマルモオリオリカヘレハハノユメヂニ　オオエセウサ」

中尉の霊前に手向けられたこの歌は、同時に靖国の神と祀られた全将兵に捧げられたものであり、同時に全母性に寄せられた涙の慰めでもあります。

私が奉仕している大分縣護國神社の御祭神四万四千四百五十三柱、靖国神社の御祭神は二百四十六万四千柱、その一柱一柱の御祭神がそれぞれ今ご紹介したような、お母さんへの思い、そしてお父さん、我が子、兄弟への思い、そんな一杯の思いを抱いて二つ無い命を国に捧げたのです。私は三十一年間この事を常に肝に銘じてお勤め申し上げてまいりました。

「丈夫（ますらお）の悲しきいのち積み重ね積み重ね守る大和島ねを」という歌がありますが、大分縣護國神社四万四千四百柱、靖国神社二百四十六万柱、まさにこうした御霊たちの人柱とも言うべき尊い犠牲の上に、御英霊たちの「悲しい」いのちが積み重ねられた上に、今の日本の繁栄が、平和があることを踏まえてこれからも精一杯御英霊にご奉仕を申し上げて参りたいと思います。

（大分県　大分縣護國神社　宮司）

「懸税」奉献の大任を終へて

石塚智康

吾が高天原に所御す斎場の穂を以て、亦吾児に御せまつるべし

日本書紀

今上天皇が皇居内吹上の水田に降り立たれて、田植ゑや稲刈りをなされるのは十一月の新嘗祭にご自身で新穀をお供へされ、天照大御神をお祭りになり御自から聞食されるのは、皇孫の命として最も大切なおつとめであります。天皇はこの新嘗祭に先立ち豊受大神宮に抜穂をお供へになります。

神宮では年中最重儀である神嘗祭のお祭りが十月十六日夜半から十七日朝にかけて行はれますが、外宮先祭の例により十五日の夜、豊受大神宮で由貴夕大御饌祭が執り行はれます。

この神嘗祭に、宮中や全国の神社に先立つて、天皇様が吹上の水田で栽培された抜穂が根付きのままでお供へされ、これには特別に紙垂がかかつてゐますが、神宮より全国の神

社庁からも初穂を献納することを許されてをり、「懸税」（カケチカラ）として奉献させて戴くことが出来ます。

これにより我が鳥取県でも各支部で順番に「懸税」を奉献してをり、昨年は私の支部内の部会が奉献させて戴く順になりました。この奉献も神饌田より収穫した新穀が好ましいとの指導もあり、私は数年前から神宮神田で栽培された「イセヒカリ」の籾種を下賜され神宮神田に倣ひ、神饌田で無農薬・無化学肥料・有機栽培ハデ乾燥してゐますので、この任を請けさせて戴くことに致しました。

先ず前年から土作りをしなければなりません。稲藁に籾殻・糠・神社掃除した木の葉を入れ、寝かせた物を鍬込み病気に罹り難い土を作ります。春、そこへ籾種を播き苗作りに着手します。春先、温度が上がらないと中々発芽しません。そこで苗箱に毛布をかけたりして保温対策も手が掛かります。やうやく芽が出たら暫らくはモヤシ程度になるまで伸ばしてから外に出し緑化させます。それからは散水の毎日です。五月にもなれば気温も上がり土も乾くため日に二～三回は水かけです。従つて泊りがけで留守にすることが出来ません。ここが辛いところです。

そして苗が大きくなったら田植ゑです。私は無農薬栽培なので、田植ゑ後の除草剤散布

を行ひません。直ぐに草が大きくなります。そこで田の草取りに入ります。無農薬栽培で何が大変かと言へばこれが一番辛い作業です。通称「どん亀」と言ひます。今は「どん亀」に入る人はゐません。田んぼに入り四つん這ひで両手を使つて草取りです。暑さと水面からの照り返しに汗まみれで、腰から下ふくらはぎは痛くしびれて大変です。ものの半時間もすれば腰をのばしては、又こごみ草取りの連続です。後ろを振り返り、前の先を見てはフーとため息です。夜になると腰から下サロンパスを沢山貼つて、疲れなおしもつい多量に入ります。痛みを麻痺させねば辛いです。二杯が三杯、三杯が四杯と進みます。ペリー来航の黒船はたった四ハイで夜もねられず。私はたった四杯で大いびきです。連日の草取りは大変なので痛みが治つてからまた入りますが、その分草は更に伸びてゐてこれまた余計に仕事が大変です。漸く取り終はった所からは新しい草が芽を出してゐますが流石に二番草は足がすくみます。その分稗が直ぐに稲を追ひ越して大きくなります。

穂が出れば虫がどんどん出て来ます。そこで周りの田んぼからは次々と朝晩競争のように皆々が白い殺虫剤の消毒掛けが始まります。虫等は追はれてこちらの田んぼに安住の地を求めて集まつて来ます。無農薬だから虫も安心できるでせう。虫等も稲にとつては確かに新穂を食べるから害虫と言はれるのかも知れませんが、彼らも生きるため食べて種の保

存をすることは必然の事なのです。生けるもの皆人間と共生です。この事が大事。人間が一方的に殺してしまふ訳にはいかないと思ひます。虫に食べられても収量が少ないと思へばそんなに高価な農薬を多量に使はなくても良いでしょう。それに農薬散布した米を長年食べ続けると体内に残留農薬が一生蓄積され、排出されることはありません。良い事は一つもありません。

秋になりあちこちでコンバインが出て刈り取り、籾は直ぐにライスセンターに入れて強制火力乾燥されます。

神饌田では刈つたら稲架を組み建て約二週間ハデ干し自然乾燥して、抜穂を一本一本選別調整して神宮に奉献します。

十月十五日神宮では大きな曳車に全国から奉献された初穂を乗せて大勢の神領民が長い曳き綱をエンヤー、エンヤーの声高らかに力をあはせ外宮北御門まで曳き入れ万歳して、車から降ろされた初穂を豊受大神宮五丈殿にお供へし、大御神さまに参拝し、無事奉献できたことを報告申し上げ感謝の祈りを捧げます。何と言つてもこの初穂曳行事は一度味はうと翌年も参加したくなります。それ程興奮する行事です。皆さんの中には参加された方もお在りかと思ひますが一度参加されたら良いと思ひます。

食の安全が叫ばれている現在、手間隙かけ無農薬・無化学肥料で有機栽培して安心して食べられる米作りができ、無事神宮さまに懸税奉献奉仕の大任が勤められたことに感謝します。ありがとうございます。

（鳥取県　山根神社　宮司）

乃木将軍御夫妻

松吉宣和

乃木将軍が長州藩江戸屋敷で誕生したことは皆さんに知られていますが、静子夫人についてはあまり知られていません。

先日、鹿児島県いちき串木野市在住の所崎平御夫妻が参拝にこられた時、「近くに静子夫人の誕生の地があり、遺徳を偲び参拝に行きます。訪問されたことがなければ資料を送ります」と言われ、数日後、静子夫人に関する資料が送られてきました。

碑文「静子夫人誕生之地　大正八年二月　村野山人・村野須美子建立」

父親は薩摩藩医師湯地定之、母親は池田家より嫁いだ天伊子（ていこ）。父親は薩摩藩の人望が厚く、本業をそっちのけにし、生活が苦しく、そのため母親は内職に追われ、国事のために尽力している夫を助けました。

静子夫人は、三男四女の第七番目の子として、安政六年（一八五九年）十一月二十七日新屋敷町に生まれ、幼名を「お七」と言いました。

母親は子供達に人生儀礼に基づいての教育を施し、その甲斐あって、長男は貴族院議員、次男は海軍大尉、三男は海軍機関中将を務め、家庭を助けました。

「身を殺して仁をなす」ー将軍の妻として、軍人の母としてー

戦争に行く夫にお守りを持たせようとしましたが、ばかばかしいと相手にされないので、夫のズボンの縫い目にお守りを縫いこんだ、という微笑ましいエピソードが語りつがれています。

母親は貧困と心労で病弱になり乳が出ず、姉貞子が母親を心配し、幼い妹のことを思って数々の縁談を断り世話をしたお陰で、妹は病気もせずに成長して、かわいらしい少女に育ちました。

五歳の時、父の末弟吉田貞一の嫁、吉田品子と同居することになりました。品子叔母を抜きにして、静子夫人を語ることが出来ないほどの影響をうけ、静子夫人は口癖に「お姉様と叔母様との御恩は一生忘れない。どうにかして、ご恩返しをせねばなりませぬ」と話されていました。

吉田品子は、非常に温和な性格で、情け深く、優しく、思いやりがあり、物事に対して怒らない人でした。

お七は、気が非常に強く、頑固で泣き虫でもありました。しかし品子と暮らし始めてからは、泣かなくなった、と言うより泣く必要がなくなったのです。品子はお七の気心をよく呑み込んでから相手になりました。すべてを許す訳ではなく、折に触れ色々と教えを説き、女の最も大切な身だしなみと裁縫を教えさらに自分のものは自分で、夫のものは妻が、子供のものは母が、と言う基本的な考えを諭しました。

明治二年十歳の時、兄が両親に「今後は女でも学問を身に付けることが大切だ」と懇願してくれたお陰で、寺子屋で字を習い、『女大学』を読み、色々学ぶことができました。

明治四年十三歳、一家で江戸へ移住、十五歳になって麹町平川町の女学校に通いはじめました。「湯地の娘が男なりせば」と嘆賞されるほどの才女で、貞淑温順にして、きわめて質素、勤勉だったいわれています。明治十一年二十歳の時、名前を「お七」から乃木さんの雅号「静堂」の「静」をとり「静子」と改名、九月三日に乃木将軍と結婚しました。

明治十二年に長男勝典、十四年に次男保典が誕生。二十五年に乃木将軍は台湾総督に任じられ、一家を挙げて任地に赴きました。明治三十六年、日露戦争に乃木将軍と長男次男共に出征しましたが、五月二十八日に長男勝典が、十二月一日に次男保典が戦死しました。二人の息子を失った時、静子夫人は大将の妻として、お国の役に立てたことを喜び、悲し

みを胸中深く閉じこめて、涙一つ見せなかったそうです。

明治四十年、乃木将軍は明治天皇に凱旋の挨拶に行かれ、明治天皇より「二人のわが子を亡くされ、さぞ寂しかろう」とねぎらいのお言葉を賜り、秩父宮、高松宮、昭和天皇をはじめとする幼児の教育のため学習院院長を仰せつけ、大勢の「子供」を授けられました。また同時に伯爵に叙せられました。

明治四十一年、乃木将軍御夫妻は満州へ行き、愛児が御国のために命を捧げた戦地で、長男勝典、次男保典をはじめとする大勢の戦死者の慰霊祭を斎行されました。

乃木希典が世界的大人格者と言われるのは、静子夫人のおかげと言っても過言ではありません。

大正元年九月十三日、乃木将軍は静子夫人を始め各関係者宛の遺言書を作成し、静子夫人の前に置き、明治天皇の御後を追って自刃することを話したところ、静子夫人は、「二人の我が子もお国のために命を捧げました。私だけがこの世に残り、生きさらしにはなりたくありません。どうかお供をさせて下さい」と言われ、辞世の句を詠まれました。

出でまして　かへります日の　なしときく
今日の御幸に　あふぞかなしき

そして自邸で乃木将軍とともに自刃されました。

神社の説明後、旧邸の前に建立した、水師営の会見碑前で参拝者揃って合唱。

「水師営の会見」六番

二人の我が子それぞれに　死所を得たるを喜べり

これぞ武門の面目と　大将答え力あり

（山口県　乃木神社　宮司）

北海道名付けの親　松浦武四郎の敬神

芦原髙穂

長く「蝦夷が島」と呼ばれた島は、松前藩そして幕府直轄領として、北辺の僻地とされてきましたが、三重県出身の松浦武四郎（諱＝弘）によって命名されたのでした。

今回は、この北海道道名生みの親であります松浦武四郎の足跡を偲びつつそこにある敬神の心にふれてみたいと思うのです。

さて、北海道地名の名付け親でもある松浦武四郎と神宮大麻のエピソードについてご紹介させていただきます。

武四郎は文政元年（一八一八）三重県津市と松阪市の中間にある伊勢国一志郡須川村（三重県三雲町）の郷士、松浦桂介の四男として生まれました。先祖は長崎県肥前の豪族松浦党といわれ北畠藩の郷士となり庄屋を務めておりました。

父桂介は若くして隠居し、出家して慶祐と號しましたが、一方で本居宣長の門下生として、国学を修め敬神家として知られていました。

七歳にして茶や俳諧を好み曹洞宗真学寺の来応和尚について手習いをはじめる傍ら、名

所図絵や地誌を好み、諸国の名だたる山々に思いを馳せていたとか。その後文学に盛んなる津藩平松楽斎に師事し十三歳にして論語等漢学を学び、やがて江戸に出て、短期間で印鑑を造る篆刻を身に付け帰宅。

しかし、帰路の途中、中仙道戸隠山や御嶽の山を登り、登山がやみつきになったのは十六歳でした。

体格は小柄ながら鋭い気性と激しい熱情を持ち、並はずれた体力と人並み以上に大きな声は、肺活量の大きさを感じさせたと言います。足も強く、大人の男性で当時一日の行程が十里とされていたようですが、武四郎少年はそれを苦にもせず、後年は十六里から十七里も楽に歩いたといわれます。

天保五年秋、武四郎十七歳、愈々諸国周遊の旅の始まりでした。父からもらった僅か二両のお金を懐に家族は末っ子のこと、せいぜい二三ヶ月で帰ると思っていたそうですが、この後実家へ帰ったのは十年後の弘化元年（一八四四）の事でした。

この間諸国漫遊は北は仙台、西は四国八十八カ所巡り讃岐の金比羅参りそして九州鹿児島までいたりました。

この間の支えは、印鑑を彫る篆刻の技で路銀を確保、時として漢学の講義を行い謝礼を

いただいたと記録されています。

その間に真言宗の僧として出家しております。

やがて家を出て六年後長崎にて、大病を患い、臨済宗禅林寺において逗留することとなり、謙堂和尚の薦めで、この時には禅宗僧侶に改宗して名前を文桂と改めております。

生涯で一番長く定住した長崎滞在で、名主の津川文作から、蝦夷地調査の緊急性を幾度となく聞かされたのでした。

忍び寄るロシアの影を感じた武四郎は勇躍して蝦夷地渡航を思い立つのでした。

この度は二度と帰ることの出来ない旅と心した武四郎は一旦実家に戻る決意を致します。

時はすでに弘化元年（一八四四）両親はすでに他界し、兄弟も住まいも移転していました、母の三回忌、父の七回忌も済ませ渡航に先立ち伊勢の両宮を参拝。この時は僧侶として坊主頭であったため、付け髷というカツラをして参拝したそうです。

カツラの起源がお伊勢参りであることは、もとの神宮禰宜矢野憲一氏研究でも明らかにされていますが、武四郎もこれにならいました。

しかし武四郎はこの機会に還俗を決意して、「剃髪しているために皇大神宮参拝が叶わ

ぬと言うことは心外である、これより髪を蓄え松浦武四郎弘として蝦夷が島の隅々まで残すことなく探り、皇国のためにならんことを誓う」のでした。

神宮参拝を終えて墓所に暇乞いを告げ、産土神社に旅の安全を祈り郷里を出発しました。時は二月でしたが、京都に向かい次いで福井から北上したのですが、途中の名だたる山々にも登頂しながらの旅で津軽、弘前についたときには九月になっていました、すでに秋の気配、蝦夷地へは当時津軽の鰺ヶ沢或いは三厩から松前に渡るコースと下北半島の今ではマグロで有名な大湊から函館に向かうのが一般的としていましたが、鰺ヶ沢では江戸での刑事事件で旅人への規制が厳しくなっていて、この時は渡航を諦めました。

竜飛岬にて蝦夷が島を望み陸奥湾を海岸沿いに青森から小湊、野辺地から陸奥横浜を経て恐山を目指し、そして下北半島の北端にいたり、そして半島東の端、尻矢岬にでましたが、このあたりは旅人を撃ち殺してものを奪い、夜中篝火で往来の船をだまし、座礁させて略奪するという噂の土地でありました。

武四郎恐る恐る来てみると、「旅のお人はいずこより来られた」と問われ、「伊勢の国のものにて諸国の風俗を見るために来たのです。」と答えたとき、村人に喜びの声が拡がった。

「お恐れながら、それならば大神宮様のお国の方か、ここはお祓いさえもいただけない辺鄙なところなのによくおいで下された」と歓待されたが、当時の村の暮らしは江戸時代末期にあって、税金もなく、労役もない、生産は自給自足で、物資は有り余っているという原始社会でありました。

「お金は稼ぐにはいかほどでも稼げますが、それを使う必要がないから欲しくは思いません、役人も来たことがありませんのでかようなものは必要ありません」というのです。

しかし、武四郎が暇乞いをすると村長が「此村には大神宮様のお祓いございません、一枚書いていただけないでしょうか」との頼みに武四郎「それは安いこと」と半紙を四つに切って天照皇大神宮と書いて与えると村中がこれを望み、全部に配ったのでした。出発の時にはお礼として干し鮑二升上等な昆布百枚を途中の食料にと贈られたそうです。

武四郎はこの後一旦は八戸から仙台を経て、一旦江戸まで戻りました。時すでに暦は弘化二年となり三月、とって返して奥州路を北上、四月初旬鰺ヶ沢よりうねりを立てて押し寄せる大浪をかぶりながら遂に蝦夷が島に上陸を果たすのでした。

以後六回に亘り北海道及び樺太千島の国後択捉を探査をへて、明治二年に道名である北海道を提案し外十一カ国八十六郡を決定つながったのでした。

武四郎の敬神を伺わせるものでありますが、あの時代の多くの国民が、如何に伊勢の神

宮にことのほか敬っていたかを示すものと存じます。

もとよりアイヌの人たちは古くは東北から北海道そして、樺太沿海州にいたる地域において固有の言語や生活文化をもつ民族であり、北海道開拓においても貢献しました。しかし一方で江戸時代末期まで松前藩のもとでアイヌの人たちと場所請負人と言われる商人達との交易で搾取による悲劇が少なからずあり、そのために対立や抗争が繰り返されてもいました。北海道開道後も明治新政府の方針により、生活習慣の違った定住性のある農耕生活を推進され多くのアイヌの人たちが違和感をもたれた事は先人たちの記録にも明らかにされているところであります。一方で狩猟や漁撈で生計を立ててきた生活様式は、明治の世界の中で我が北海道がおかれた地政学的状況からは、到底許されるはずもなく、慢性的に食糧不足に悩んでいたわが国の食糧事情からも、農業開発と定住化による国造りが、国土を保全する上でも必要不可欠でありました。

覇権を競う国際環境のなかで、自然人としてのアイヌの人々の生活習慣では北海道という国土は守ることは出来無いことは自明であり、世界規模の時代の変化に対しあまりにも無防備であったと言わざるを得ないのです。

そのため、明治政府はアイヌの人たちの農業による定住化・自立支援のため、いわゆる

旧土民保護法を制定し、アイヌの人々の保護政策を始めたのですが、ご承知の通りこれはアイヌの人々の自立を促すどころか差別の元凶として戦前戦後をつうじて批判され続けてきました。

私どもはアイヌの差別を糾弾する余り現在の北海道を築いてきた先人たちの開拓の歴史が穢されたり、否定されてはならないという事であります。

（北海道　旭川神社　宮司）

神様を信じて

佐々木　美津子

平成八年十一月二十六日深夜、永遠の眠りにつかれた主人の顔。闘病生活は苦しかったでしょう、辛かったでしょうと、ただただ涙した日から十三年の歳月が経ちました。私にとりましては、あっと言う間の時の流れでした。

もうそんな月日が流れたのだろうかという思いと共に、主人亡きあとの神社を護るために、新たな人生を歩むことを余儀なくされた私の挑戦の日々、そして私を支えて下さった総代さまをはじめとする多くの人々、その思いが複雑に私の胸の中を行ったり来たりしました。

顧みますと、主人と共に病魔と戦った日々…雪降る中の通院…。不治の病のため第二の人生に賭けたささやかな「夢」をも奪ったのです。尽きぬ思いを抱いたまま旅立った主人を思うと胸がいたみます。主治医の石木先生には、本人はもちろんのこと私たち家族にも、広い御心と穏やかな言葉で「生きること」への勇気を与えていただきました。

平成九年、主人の歩んだ神職の道、社家として続いた佐々木家の道を絶やしてはいけないと心に誓い、國學院の研修を受けました。五十を過ぎての神職の道は厳しく、すべてが初めてのこと、泣きたい日々、失敗の多い毎日でした。時には男になり、時には女として努力してきました。「主人が元気でいたなら…」と思う日もありました。そんな私を支えて下さったのは、亡き主人と共に神社を運営して下さった総代さま、地域の皆さま、知人・友人の一言一言と、神様を信じ、神さまに守られ今日まで頑張ることができました。

平成十七年八月、町内外の御氏子崇敬者の方々より真心なる資金のご奉賀を賜り、矢作の郷土鎮守の森に社殿を新築、松明を灯し大神様の正遷座祭を地域の皆様方と喜びを共にすることが出来ましたことは、主人の永年の願いであり、私の終生忘れえぬ感激でありました。

朝四時起床、神社の戸を開け、石段の掃除・庭の草取り、ウォーキングする人々との爽やかな「おはよう」「お元気で」の朝の挨拶を交わし、六時二十分太鼓打ち、祓詞を献上しお日供の始まりです。

宮司を拝命して十二年目、この年齢になりようやく神さまを身近に感じ、神さまと共に生きることが、どれほどに心が和らぎ清らかで力強くありがたいことであるかがわかるよ

うになってきました。

「宮司さん」「神社のおばちゃん」と慕われるようになってきました。子供たちからも言われるようになってきました。この喜び・ありがたさを、どれだけの人々へご恩をかえすことができるかが、これからの私の務めでもあります。

又御神殿の灯篭を見ては、灯篭のように私も周りを明るく温かく照らしているかしら…。御神鏡を眺めては、私の心が曇っていないかしら、嘘をついていないかしらと諭されます。神さまの教えは、ありとあらゆるところに満ち溢れております。心を鍛え高め、良き言霊が言えるよう毎日が勉強であり修行だと思っております。

迷いながら、手探りしながら歩んだ神職への道。多くの方々から頂いた温かな言葉を心の支えに「神さまのお導きとご加護」に感謝し、これからも女子神職・宮司として頑張りたいと思います。

明治天皇陛下御製を心にいだきながら、

めにみえぬ　神のこころに　かよふこそ
人のこころの　まことなりけれ

（岩手県　天照御祖神社　宮司）

神宮大麻・神札の冒険

山元義清

今月の月次祭では、当社ゆかりの歴史の紹介と神宮大麻の中をのぞいてみます。

皆様はご承知のとおり、当社は慶雲元年西暦七〇四年に沃野な平森大杉にご降臨になられ、爾来今年一三〇五年を迎える古社であります。地域の人びとからの崇敬を受けてきた氏神様は、素盞嗚命とその奥様櫛稲田姫命、そして、お二人の間にお生まれの八王子命を主祭神としてお祀りしています。厄除けや病気平癒を始め、繊維や着物への感謝、五穀豊穣、和歌の上達などに高いご神徳を授けられる神様であります。近畿一円に計り知れない疫病が蔓延した際、それを憂いて各神社に祈祷のお沙汰がありましたが、効き目なく、再度当社へ丁重な祈祷の思し召しがされその甲斐あって治癒したようです。そのため後奈良天皇から当社へ正一位の神階が授かり、「正一位牛頭大明神」「正一位下笠天王社」と呼ばれてきました。天文九年西暦一五四〇年ですから四六九年前のことです。さて、今年四月米大陸に端を発した新型インフルエンザは、忽ち世界各国へ流行し、死者を出すとも

に、今秋以降の大流行が予言されていますが、当社では約四五〇年余り前の先人と同様にご祈祷し、病を封じ込めたいと思っています。

こうした日常の些細なことを見守っていただくのが、神宮の大麻であり、氏神様の神札であります。日本の文化として毎日伊勢神宮や氏神様へ足を運ばなくても、家に居ながら感謝と誠を捧げ神様の大御光をお受けするため、神棚を設置してきました。治承四年一一八〇年に源頼朝が「一千度御祓」の祈願をさせたことが『吾妻鏡』に書かれており、すでに平安時代から鎌倉時代にかけて「中臣祓」を何度も重ねて誦したしるしに「御札」を受けていたと思われます。幾度となく祓詞を唱えると清めの力が増すと考えられています。そして、全国に数ある伊勢神宮にゆかりのある神領地としての御薗や神田、神明社に神宮から派遣された祠官が御祈師をつとめて頒布したであろうと考えられています。御師は生計を立てるために領地内の檀家をまわり、御祓大麻を配布してきました。その中身でありますが、いよいよ冒険いたします。皆様は、大麻の中がどのようになっているかご存知ですか。お見せいたします。

神宮の授与所では、剣先祓とか剣大麻とか言われるもののほか、御神楽祈祷大麻や角祓など多く取り扱われています。細い木片に紙垂を巻き麻串（ぬさ）が作られ、麻巻（ぬさ）きと言う作業が

されます。真板の真ん中に溝が切ってあり先に作った麻串を張り、真板を包むように銘紙を巻きつけ張上作業をして糊を乾かせ何人かの眼で点検し確認ののち、完成した大麻も人も運搬のトラックも毎週一回修祓を受けて各地へ搬送されます。今、「麻」という文字をヌサと読みましたが、これはお祓いの道具と考えてよろしいでしょう。神事の初めにお祓いを受けることを修祓といって、麻緒を用います。この祓いの具が、「大麻」オオヌサであります。本年十一月三日宇治橋渡始式が斎行されますが、今仮橋を利用しています。もとの橋を入り左側二つ目の擬宝珠の中に「万度幣（まんどぬさ）」が収められ、その擬宝珠に元和五年三月と制作年が刻まれ、それ以降永年使用されています。宇治橋を通る七百五十万人の参拝者を神宮の入り口で見守り、静かにお祓いがされているのでしょう。一方、神宮は、皇室と切り離すことができません。それは、神宮では皇祖神と仰ぎまつる天照坐皇大御神が鎮座され、皇室の弥栄と国家の隆昌を祈る祭祀が厳粛に斎行されてきたところであります。天皇皇后陛下やご皇室の方々が、国内外へ行幸啓等遊ばされる時、その都度神宮からマッチ箱の半分くらいの大きさの小さな万度幣が奉製され、御旅のお守りとして届けられています。

今年の神社本庁の評議員会の意見発表のなかで、「大麻」は覚せい剤の使用につながる

ため、「大麻取締り法」の言葉を「マリファナ等麻薬取締り法」などの法律改正をと唱える宮司様がいらっしゃいました。神社で頒布の神宮大麻の歴史は極めて古く、内を固め外を変える良いご意見でした。神宮大麻には、私たち日本の一人ひとりの生活ぶりを守護するという精神文化が息づいています。

私たちの各家庭で神宮大麻と氏神様の神札をお祀りすることの意義は、今縷々御説明申し上げた次第であります。皆様におかれましては物事の中身、即ち事の「根っ子」を十分にご理解頂き、日々大神様のご加護をお受けになられ、益々ご健勝にお暮らしなさいますようご祈念申し上げ講話を終了させていただきます。

（滋賀県　老杉神社　宮司）

お言葉

原　茂子

平成の御皇室を築き上げられた天皇陛下は、今年ご即位二十年を迎えられました。平成元年一月九日に、皇居・神殿で行われた「即位後朝見の儀」で「皆さんとともに日本国憲法を守り、これに従って責務を果たすことを誓い、国連の一層の進展と世界の平和、人類福祉の増進を切に希望してやみません」と宣言されました。

その日から二十年の間に、世界中で色々なことがありました。そして日本は幾度となく大きな自然災害に見舞われました。その中でも、大阪府民の私は、平成七年に発生した阪神・淡路大震災が印象深く、その折に両陛下が現地へおいで下さり、被災者に直接お声をかけておられるご様子をテレビ等で拝見させていただき、胸が熱くなったことを、今でもはっきり覚えています。

震災直後私は、女性の神職であり宮司さんでもあるご先輩が、社務所の倒壊で御子息を亡くされたことを知り、お宮へ伺いました。ご本殿は後ろに傾き今にも倒れそう、御影

石の狛犬さんは台座からピョンと飛び降りたように地面にあり、その他の建物は見るも無残なありさまでした。近くの学校で仮住居されておられるとのことでお見舞いに参りました。あまりの被害大きさにとまどい、思いつく言葉も無く「この度は・・・」としか申し上げられませんでした。

教室を生徒の机で幾つにも仕切って、何家族かが寝起きされているご様子。その片隅の机の上に、遺影と白い布に包まれたご遺骨が、ポツンと置かれてありました。彼女と嫁と孫二人はわずかな外の明かりを頼りに、自力で這い出したとのこと。女手ばかり四人ではどうすることも出来ず、道行く人に「助けてください。息子がこの下にいます。手を貸して下さい。」とお願いし、やっとのことで連れ出し、ご遺体の火葬を終えられるまで幾日もの日を要したことなど、お聴きしました。涙もなく、淡々と話されるその姿に、ご苦労の大変さ、悲しみと嘆きの深さを思い知りました。今もその日の情景が目に焼きついて忘れられません。

その神戸の地に、両陛下お出ましくださり、作業服で、床にしゃがみ込んで、うなだれる被災者の顔を覗き込むようにして、お声をかけておられるご様子。どのようなお言葉をいただけたのかは、知る由もありませんが、心に寄り添った、思いやりのある、温か

いお言葉であったことは、その場に居た人たちが涙を流し、頷いている様子から推し測ることが出来ました。（神様から労いのお言葉をいただいた。）そう思えたことでしょう。

遠くにいる人達にも手を振られ、バスに乗られてからも、両手の親指を立てて語りかけられる皇后陛下のお姿に、どれほど多くのパワーをいただいたことでしょう。

両陛下が国民の幸せを常に願ってくださっているお姿を拝見いたしますたびに、私達の日々の暮らしの中で起こっている様々な出来事や、言葉の乱れに心が痛みます。

今年の四月二十九日・昭和の日の読売新聞朝刊に四万六千二十七通から七名の選考委員によって選ばれた二十一首の〝平成万葉集〟入選作品が載っていました。その中に

待つというときめき忘れし若者ら　メール打ちいる只ひたすらに　泉栄子　八九才

の歌があります。選者の壇ふみさんの評に「応募作には何日か置いてまた読むと懐かしさを覚える歌も多く不思議な力を感じた。もちろん万葉の時代と今は同じではない。昭和とも違う。携帯電話・メール・・・。言葉が簡単に伝わり、「言霊」の力が弱くなったのか。恋を詠む歌に思ったほどの力強さがなく、全体的に上の世代の歌が若い世代に比べて生き生きとした印象もあった。それも平成という時代を映しているのかもしれない。」とありました。皆さんもそう思われませんか。

○○で待ってる。　夕飯は要らない。　宅配で送ります。等など　パソコン・携帯電話のメール等で用件だけの短い文章のやり取りだけでは、人と人とが言葉で話す機会が少なくなり、相手の気持ちを察して、思いやる心が失われてしまうのではないか。と何かしら味気なく思うのです。恋人と待ち合わせをする幸せ。約束の時間になっても会えない。その時の苛立ちと不安。そしてやっと会えた時の歓び。そんな複雑な心の動きも感じないまま平成の若者は逢瀬を重ねているのでしょうか。

私は相手が恋人でなくても、せめて声が聴ける電話で用件を伝え合いたい。そして相手の声から周りの気配や、その時の気分を感じたいとおもいます。それ以上にお互い顔を見ながら、自分の言葉で話す、自分の思いや考えを表すピタッとした言葉が見つかって相手に伝えられたらとても幸せな気分になります。また相手も、私の心にすーと落ちるように話してくれたときには、満ち足りたとても豊かな気持ちになれます。

壇ふみさんも、言葉には〝魂〟が宿っていると書いています。

一つの言葉によって人は感動し喜びが倍増します。心を病んでいる人に寄り添う言葉はその悩みを和らげます。そして心ない言葉は他人を傷つけ苦しめ、時には死に至らしめることもあるのです。

〝言　霊〟両陛下のお言葉には国民の幸せを願う熱い魂が宿っています。

（大阪府　夜疑神社　権禰宜）

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりを願い神明奉仕に励んでいますが、講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

Ⅰ　何のために語るか（祈願）

1　神命をかしこんで立つ

2　まず祈れ

3　正しい志を

4　まじめな生活を

5　話は生きている

Ⅱ　何を語るか（内容）

その一　体験を語る

1　体験を語る

2　体験を反省する

3　二つの「門」

①　自然のいのちのなかに神様を見る

②　人間のいのちのなかに神様を見る

その二　講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな
2 位に中す
3 講録をつくる
① 話の材料を集める
② 話の材料を選ぶ
③ 話をまとめる
④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る
① 話はわかりやすく
② 自分の言葉で語る
③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を
④ 話には〝うねり〟を

2 至誠をもって語る
① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもって語る
③ 遺言の覚悟

3 自然に語る
① 講録をはなれて
② 自然に語る
③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十五回神道講演全国研修大会・茨城大会の記録

於　茨城県神社庁

神社本庁総合研究所所長　矢田部正巳

顧　問　阿部　信（神社本庁長老）

〃　平岩　昌利（東京都　神社庁庁長）

〃　吉田　茂穂（神奈川県神社庁庁長）

〃　中山　高嶺（埼玉県神社庁庁長）

〃　高井　淨御（群馬県神社庁庁長）

〃　宮間　孝夫（千葉県神社庁庁長）

〃　吉田　健彦（栃木県神社庁庁長）

〃　羽中田　進（山梨県神社庁庁長）

〃　真弓　常忠（住吉大社宮司）

顧　問　大野　俊康（元靖國神社宮司）

〃　矢野　憲一（元神宮禰宜）

大会会長　塙　東男（茨城県神社庁庁長）

実行委員長　村田　和之（長束神社宮司）

実行副委員長　佐古　一洌（松尾大社宮司）

実行委員　芦原　高穂（旭川神社宮司）

〃　生嶌　經和（松尾大社権宮司）

〃　小串　和夫（熱田神宮宮司）

〃　落合　偉洲（久能山東照宮宮司）

〃　木下　鍒二（大江八幡宮宮司）

〃　薗田　稔（秩父神社宮司）

〃　谷田　勉（櫻山八幡宮宮司）

実行委員

々　長曽我部延昭（伊豫豆比古命神社宮司）
々　戸内　康雅（心清水八幡神社宮司）
々　中野　幸彦（多賀大社宮司）
々　二橋　一彦（砥鹿神社宮司）
々　波多野　學（高見神社宮司）
々　塙　東男（笠間稲荷神社宮司）
々　原　茂子（夜疑神社権禰宜）
々　宮川　脩（福井県護国神社宮司）
々　山田　一孝（靜内神社宮司）
々　山村　稔晴（高知大神宮宮司）
々　山本　行恭（椿大神社宮司）
々　渡邉　知宣（疋野神社宮司）
々　和田　年彌（神宮禰宜）

―実行委員五十音順―

事務局長　畠田　明彦（松尾大社権禰宜）
事務局員　村田　和弘（長束神社禰宜）
〃　村瀬　佳子（長束神社権禰宜）
〃　石井　昌孝（松尾大社権禰宜）
〃　佐藤　勇穂（北海道神社庁録事）
〃　鈴木　明子（立木神社権禰宜）

神道講演全国協議会　役員名簿　―幹事五十音順―

顧　問　阿部　信　神社本庁長老
顧　問　真弓　常忠　住吉大社宮司
顧　問　大野　俊康　元靖國神社宮司
顧　問　矢野　憲一　元神宮禰宜
会　長　村田　和之　長束神社宮司
副会長　佐古　一洌　松尾大社宮司
幹事長　木下　鍒二　大江八幡宮宮司
幹　事　生嶌　經和　松尾大社権宮司
幹　事　小串　和夫　熱田神宮宮司
幹　事　落合　偉洲　久能山東照宮宮司
幹　事　薗田　稔　秩父神社宮司
幹　事　谷田　勉　櫻山八幡宮宮司
幹　事　長曽我部　延昭　伊豫豆比古命神社宮司
幹　事　戸内　康雅　心清水八幡神社宮司

幹　事　中野　幸彦　多賀大社宮司
幹　事　二橋　一彦　砥鹿神社宮司
幹　事　波多野　學　高見神社宮司
幹　事　塙　東男　笠間稲荷神社宮司
幹　事　原　茂子　夜疑神社権禰宜
幹　事　宮川　脩　福井県護国神社宮司
幹　事　山田　一孝　靜内神社宮司
幹　事　山村　稔晴　高知大神宮宮司
幹　事　山本　行恭　椿大神社宮司
幹　事　和田　年彌　神宮禰宜
幹事・監査　芦原　高穂　旭川神社宮司
幹事・監査　渡邉　知宣　疋野神社宮司
事務局長　畠田　明彦　松尾大社権禰宜

平成二十一年六月現在

あとがき

天皇陛下御即位二十年、御成婚五十年という慶賀すべき年に、私達が恩師と仰ぐ石井壽夫・佐古幸嬰両先生に多大な影響を与えた吉田松陰、その松陰が大きな教えを受けられた水戸神学の発祥地茨城県水戸市に於いて、第二十五回神道講演全国研修大会が六月二十四日より二十六日迄神社本庁研修所主催により開催されました。この地は古事記、日本書紀など建国神話を基に日本固有の道徳を説き尊皇思想を中心とする水戸学を生み、日本最大の藩校弘道館を設立、激動の幕末と近代日本の幕開けに大きな影響を与えました。

大会会長には当会の幹事役も兼務頂いている茨城県神社庁庁長塙東男先生、特別記念講演に「神話と歴史ー神道の基本理念」と題して幹事の大役をお引き受け頂いている秩父神社宮司薗田稔先生、京都大学大学院名誉教授として指導する多忙の中、献身的にご協力を賜わり受講生一同この上ない喜びでありました。茨城県神社庁の全面的な協力、関東地区各県神社庁の絶大な支援により全国各地より馳せ参じた参加者は清々しい気分と恵まれた環境を得て心おきなく研鑽することが出来ました。

又、年一回の全国大会ですが最近は一般の人々の聴講も見受けられるようになり、日本の国をどうにかしなくてはとの願いを持つ人が一般の中にも大勢居る表れかと思います。今の荒廃した世相や歴史を忘れ迷走している人達に、日本の気品のある性格を呼びさます為、これから会員各位の力を集結し日本丸の舵取り役として各地で活躍、先達として奉仕、邁進されることを祈ります。毎度のことながら大会開催に当り地域各県神社庁の多大なるご協力ご協賛と、役員及び事務局の力添えに厚く御礼申し上げ参加者各位の今後のご活躍ご健勝を祈り挨拶といたします。

平成二十一年　秋

第二十五回神道講演全国研修大会
茨城大会実行委員長　**村田和之**

講話集　常陸の祈り

―大御心を恐みて―

―第二十五回　神道講演全国研修大会　茨城大会―

発　行　平成22年5月1日

編集者
装幀者――神道講演全国協議会事務局

印刷所――呉市広白石一―二―三四

製本所――株式会社　ユニックス

発行所――神道講演全国協議会

〒六二六―〇〇三四　京都市西京区嵐山宮町三　松尾大社社務所内

TEL（〇七五）八七一―五〇一六　FAX（〇七五）八七一―三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします



茨城県神社庁庁舎